

# 獄中への手紙

一九三七年（昭和十二年）

宮本百合子

青空文庫



一月八日午後 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 駒込林町より（封書）」

一月八日 第二十六信

晴れ。五十一度。緑郎のピアノの音頻り。

今年の正月は去年とくらべて大変寒さがゆるんで居りますね。

そちらいかがですか。お体の工合はずつと順調ですか。畳の上で  
体が休まるということを伺つて、きわめて具体的にいろいろ理解  
いたしました。何でも、世界を珍しい暖流が一廻りしたそうで、  
大変あつたかい。それで却つて健康にわるく、世界に一種の悪質

の風邪が流行している由、称して、ヒットラー風。

私は、今年の正月は余り自動車にものれず、餅もたべられず、おとなしい正月をいたしました。盲腸の方も大体障害なく、きのう野上さん「自注1」のところへ行つたら薏苡仁（ヨクイニン）（何とよむのか忘れてしまつた、田舎にも生える数珠子玉（ジユズコダマ）といふ草の支那産のものの由）という薬を教わつて來ました。彌生子さんの盲腸もそれでなおした由。二月の『文芸』に横光の「厨房日記評」を二十枚ほどかき『文芸春秋』の文芸評を今準備中です。文芸懇話会賞の室生犀星は「雑沓」などは題材的に歯に合わず活字面を見ただけでうんざりの由です。横光、小林秀雄、犀星等、芸術上の高邁イストが、現実において一九三七年度には急速に自分達のポ

ーズと反対のものに落下しつつあるところ。日本文学の上に一つの新しい歴史の生れたことを、感じ、興味津々です。一月中旬に白揚社から本が出るのだが、まだ題名がきまらず。何かいいのはないかと考え中です。生活的でうるおいがあつて、音楽的色彩的であるようなの。

いつぞやから、私の家について云つていたのを覚えていらつしやるかしら。あなたが皆とかたまりすぎて夜更しづぱかりしないようとに注意して下すつたし、そのことをも考え、一緒に住む人のことをも考え、なかなか決定いたしませんでしたが、この正月三日に、目白のもとの家「自注2」（上り屋敷の家です。覚えていらっしゃるでしよう？）のそばで、小さい、だがしつかりした家

を見つけ、そこを借り、Xと一緒に暮すことにいたしました。家賃三十四円也。上が六畳で下が六・四半・三・玄・湯殿というの。部屋が一つ不足です。だが家賃との相談故これで我まんします。

一つ一つの部屋が廊下で区切られていて南向きです。二階は一日陽がさし、どちらかというと直射的だから勉強するために刺戟がありすぎます。陽よけの工夫がいるほどです。五尺四方というフロア！　用心はよさそうで、省線に近いが静かです。Xか、Dさんから手紙が届きました？　XとDさんは結婚することになりましたが、Dさんの家庭の事情、経済事情がまだXと同棲するに至っていないので、Xは当分私と暮します。Xは詩を書いてゆくのですが、家から一銭も来なくなつてしまつた。十二月には私が

下宿代を出しましたが、毎月そのようには行かないから一つは家を持つことを急いだのです。この二人は、勿論多幸ならんことを切望いたしますが、今のところX自身、愛情と一緒に一種の不調和を感じて居るらしい。このような直観的なものはゆだん出来ませんからね。Dさんは確かに人の注意をひくに足りる人ですが、

あらゆる過去の経験で人に愛され、便利で信頼し得る友人をもち、いつも出来る人物と見なされ、自身それを知つて、家の中では唯一人の男の子として生活して来た人にありがちな一つの特長をもつてゐる。素直な人でしようが、そういうものは強くある。よい意味でも、まだペダンティシズムをもつてゐる。Xにはスーさんは違うが、似た気質あり。すつかり納得ゆかぬうちに一方で

は衝動的に行動する。人と人とのことはむずかしいものね。私はXと暮す以上は大いにXをふつくりしたものにしてやりたいと思つて居ります。でも、私とXとは持つている感情の曲線が何という違いでしよう。Xは細いマツチの棒ぐらいのものをつぎつぎにもつてゐる、そして詩も三四行のをかくの。こういう芸術の有機的つながりは実に微妙です。

健康のためにも、仕事のためにも生活を統一する便利が殖えるから、家をもつたら能率的且つ書生的に暮します。楽しみであり、一寸うるさいナと思うのはXのこと。でも決してわるいというのではないのです。

—昨日の晩であつたかKさんが始めて家へ来てしみじみ話して

行つた。人間が孤立的になる場合、その原因は人間としてのプラスの面からだけでは決してない。私はそのことを率直に話しました。そのように話したのは恐らく知りあつてからはじめてです。稻ちゃん達はなかなか悪戦的日常（経済的に）ですがよくやつて居り、静岡から妹夫婦が東京へ転任になつて来ました。私の引越しは十二日頃です。番地がまだ不明。おしらせします。引越したらお目にかかりに行きます。お体を異々も大事に。変な気候をうまく調節してお暮し下さい。

〔自注1〕野上さん——野上彌生子。

〔自注2〕目白のもとの家——一九三一年初夏から三二年一

月下旬まで百合子が生活した家。

一月十六日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　豊島区目白三ノ三五七  
○より（封書）〕

一月十六日　午後四時　今柱時計が四つ打つ。

今年になつて二つめのこの手紙を、私が何処で書いているとお  
思いになりますか。きっと、前の手紙を見ていらつしやるだろう  
けれども、これは私たちの新しい家の二階の六畳のテーブルの前。  
やかましくない程度に省線の音をききながら、そして、この紙の  
横にあなたからいただいた二通の手紙、十二月二十六日のと一月

六日のとを重ねておき、くりかえしきりかえしよみながら。丁度  
くたびれているひとが煙草を腹の中まで吸つてつかれをやすめ心  
こうたの  
愉こころしくして いるような工合に。——十三日にこつちへ引越し、  
Xさんが家の仕事に馴れないし、いろいろ揃える仕事、本を片づ

ける仕事その他できのうまでゴタゴタ。やつとさつき風呂に入り、  
さつぱりと髪を洗い、十三日の朝引越しさわぎの間あわただで遑あわただしく立ち  
よみして来た二つの手紙をよみなおし、この家ではじめて書くも  
のとしてこの手紙を書いているわけです。十三日は、十一日まで  
アンドレ・ジイドについての感想的評論をかいていてつかれ、  
(ジイドがURSSへ旅行したその旅行記に対して『プラウダ』

や『文学新聞』が批判している。だが作家の内的矛盾の過程はそ

の内部へ入つて作家の獨特な足つきに従つて追求してゆかなければ、文学愛好者には納得ゆかぬのですから）十三日の引越しはどうかと、あぶながつていたところ、スエ子がなかなかのプロム・プタ役で到遂引越しはスミました。十三日の晩は良ちゃん、てつちゃん、池田さん、詩の金さん、戸台さん「自注3」、栄さん、手つだいやら様子見やらに来て、十一人位で夕飯をたべました。

上落合の家にいたときは、大体独りつきりで、栄さんが近所に住んでいたから暮せたようなものの、ひどかつた。その点今度はいいでしよう。但物価は最近五割近く高騰したものもあり、その方は閉口です。民間のサラリーマンの月給も上げてほしいという声たかく、偉い人々例え（陸相）など民間も協力せよと云つて

いて下さるが、文筆家の稿料はどなたも上げよと仰云らぬ。いろいろ活きた浮世は面白の眺望です。お鍋を一つ買つたら、その商人曰く、これだけは昨日のねだんでお売り申上げますと。

ところで、この二つのお手紙は、いろいろの意味で私には大変うれしゆうございました。いつもながらありがとうございます。記念の心を送つてやりたいと思つていて下さること。どうかよく考えて、素敵な言葉でも下さい。そう書かれていることが既に私にとつては、香馥<sup>ふくいく</sup>郁たる悦びの花束なのだけれど。こういうおくりものに対しては私は寡慾ではいられないわ。手紙を毎週待つたことは、私の申上げたことは覚えていたのです。もしか毎週書いていて下さるのに届かず、しかもそうと知らずにいるのなどつまら

ないから、それで一週間おきにと云つたのでした。しかし、ほしいという面から云えば毎日をもいとわず。今年は、お気の向くとおりに下さい。自分だけの心持を押し立てて云えば、あなたの手紙を血の中にまで吸収するのは誰よりもここにいる一人だと思つているのだから、云わば一行だつて、ほかにこぼすのはいやな位、その位の貪婪どんらんさがあるのだが、そこは市民の礼讓で、どうぞほかへも、と云つてはいる次第なのです。この正月は『文芸』へ横光の「厨房日記」の評を二十三枚、ジイドのを二十四枚かき。どれも最近の文集に入ります。きのうの晩も題を考え、なかなかうまいのがなくこまります。「昼夜」というのにしてスエ子の装幀にしようと思うのです。活きて動いた絵をかいて。これはもう原稿

をわたす必要あり。木星社の本は二十五日です。私はその後書きを、心を傾けたおくりものとして一月の二十三日に書きます。よいものを書きます。そして、間に合えば、私の本やもう一つの本の印「自注4」は、あなたの書いて下さった私の名をそのまま印にしたのをつかいたいと思つて居ります。これは大変好いでしょう？　思いつき以上でしょう。ねえ。この家は、同じ方角できつといい月が眺められるでしょう。きのうあたり夕月がきれいでした。晴天だと、遠く西日のさす頃、富士も見えます。本のことAさんにつたえましょう。やっぱり林町からこつちにうつってよかつたと思います。時間を十分活用出来るという点からだけでも。あつちでは、今太郎が風邪、母さんも風邪。丁度私が引越した日

から臥<sup>ね</sup>て居ます。食堂でストウブをあつたかくして、廊下や何かはさむい。そういうのが非衛生なのでしよう。

きょう思いがけなく山崎の伯父さん（島田の母上のお兄さん）が見えました。この八月頃から東京暮しで高橋というひとのボロの会社（ほんもののボロです）につとめて居られる由。娘さんの一人が阪神につとめていたのが小林一三に見出されて今は映画女優の由。そのお姉さん（虹ヶ浜へ行つたひと）が岩本さんの奥さんの由。いろいろお話を伺いました。山崎さんは下の娘さんと松原（小田急の沿線）に住居です。この頃、私の最近の学習語は本が入らず役に立てたいにも立てられません。又ごく近々ゆつくり書きます。この二つのお手紙に対してもうこつた返事を。私の鉢の

は南天の葉よ、紅葉ではないの。お正月の南天。ではどうぞお大事に。

### 「欄外に」

○父がああいう生活力の豊富さからかもし出していた家風といふようなものは、父なしには保ちません。その点大変微妙である。私がその繼承者で発展者であるわけですが、日本の家といふものは主人が主人ですから。私も小さい家で、私たちの家のここでの主人とならねばならぬ訳。

「自注3」戸台さん——戸台俊一。戸台俊一は日本プロレタリア文化連盟の出版部・書記局などに活動して、一九三二年

の春からのち、三三年、三四四年と日本プロレタリア文化連盟「コップ」が解散するまで実にしつこい弾圧と検挙を集中的にうけた。三三年ごろは、二カ月も三カ月も留置場生活をしたあげくに、やつと釈放されて五日目に往来を歩いていたら警視庁の特高が「なんだ、君は外にいたのか」とそのままつれて行つてぶちこまれたというようなことさえあつた。未決生活も経験している。「コップ」の最後の時期のもつとも忠実な同志である。

「自注4」本の印——顕治の手紙にあるあて名の百合子という字をそのまま木版にして検印用の印をつくつた。

一月十八日（消印）　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（は  
がき）〕

此度左記へ転居致しましたから御通知申上げます。

一九三七年一月

東京市豊島区目白三丁目三五七〇

中條百合子

一月二十八日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

一月二十八日。第二十八信。薄晴れ。火鉢のない正午四十二度。

一月の二十三日には是非お目にかかりたいと思つていたところ、その日は土曜日で時間が間に合わず残念をいたしました。二十五日のときは、大変いろいろもつと伺いたいことがあつたのに、話している心持が中断されたままであつたので、今日でもまだ何だか、いつものこれ迄のようにいい心持でない。きつと貴方の方もそうでいらっしゃるでしょう。とにかくお風呂に入れるようになりになつたことはうれしい。さぞ久しぶりのときはいい心持だつたでしょう。湯上りに、水でかたくしぼつた手拭てぬぐいで、きつく体を拭くこと。風邪よけに。

ところで。私の本年に入つてからの手紙は一月八日に林町から第二十六信を出し、十五日頃この家に引越した印刷のハガキをさ

しあげ、十六日には、あなたの一月六日のお手紙と十二月二十六日のお手紙に答える手紙を目白の家から出して居ります。そのうち、どの分が届いているのでしょうか。八日のは御覽になつたでしょう？　十六日のは？　この手紙がつく頃はもちろんおよみになつていると思います。

◎差入れのこと。忙しくて手がまわりかねていることはありますせん。申したように、その手紙をかいだ時、何かいそいで書くものとかち合つていそがしい気がしたのできつとそう書いたのでしよう。どうか御心配はなさらいで。それに、私は貴方への手紙をそのときのいろんな心持を率直に書いているから、そんなこともかいたのでしょうか。貴方は、又こんなことを云つていると、笑

つていらつしやればいいのよ。

◎夜具の白いキヤラコ<sup>えり</sup>衿は寿江が伺つて來たので、歳末にタオル二本と一緒に中川から入れさせるようにしておいたのでしたが、まだ届かなかつた由。とりまぎれたのでしよう。調べて居ります。

◎本は、『リカアド』などと一緒に御注文のは、私が上林へいたときあつちへ下すつた手紙の分です。小説に気をとられて、失礼。早速お送りします。戸台さんにきのうたのみ、四、五日で来ましょう。

そろそろ本をおよみになるのだから、この次のたよりには、すつかり本の整理をして、お送りしましょ、書いてよこして下すつた分、入れた分と、私はどつちかというと事務的にゆかず、す

みませんが、然し、私がそちらに必要なものについて抱いている気持など、云うまでもないことなのだし、よろこびをもつてしていることも云えば滑稽な位のことなのだし、マア折々御辛抱下さい。ああ、私は、ユリは間抜けだね、と云われることも時と場合では本当に大歓迎なのだから。非常に快適な雨の粒のようなのだから。

◎玉子のこと、サンドウイッチのこと、申しておきました。すみません、すみませんと云っていました。

それから、一番もつと伺いたくて中途半端になつていたXのこと。貴方のお手紙で、きつといろいろ私によく分るだろうと樂しみにして居りますが、お話しの要点は、私にも分りました。Xの

生活を助けてやるのはよいが、一つ家にいて、そこへDさんが良好としての資格で来ることについてあなたのお感じになる心持。

簡単にいきさつを辿ると、XとDさんとの間にそういう感情のいきさつのあつたことも、まして、結婚の意志があることも、私には全く告げられず、只歳末に近づいて、Xへの送金が農村の大不況のため途絶した、困った、どうしたらいいでしようと云うことでした。一方、林町の家は改築する「自注<sup>5</sup>」のでいずれ私はどこかへ移る必要がある、では、私と一緒に暮して見るか？それによれば越したことはない。そういう話で、その話がきまつても、まだ彼女は私に自身の事情については黙つて居りました。殆んど家がきまつてからRさんが稻ちゃんに困つたと云つて話し、稻ちゃん

んがXに、私に話すべきであると教え、Xはやつと話した。それで私はその時少し腹を立てたのでした、当然。

ところが、Dさんは家庭がああいう事情でおつかさん達はこのことをよろこんでいない。CちゃんがよくなつてRさんと暮せるまで、Xは一緒に暮せない。皆弱くて、働けないのだから。

DさんとXの心持については、私達周囲のものの腹の底は、あまり周囲から刺戟せず、時の自然な力で発展するものならさせ、さもないものならそれもよしという気持です。そういう印象を与えるのです、二人という人々が。性格や何かの点。

Dさんは頻繁<sup>ひんぱん</sup>にここへ来ることはない。普通の友人として一週一度ぐらい来て、かえった、少くともこれまで。Zさんの心

持を、この間、それとは別に一寸訊いたのですが、あのひとはXに対して、別にどう思つていはず、適当な結婚をしたらよいと思う、又対手のひとが、自分とのことに拘泥したりする必要のない程自分たちの結合は時間的に短かかつたし、内容がない、という事です。

こういうことは私とすれば何だか変なところがある。そんなものであるのか、あつてよいのだろうか。そういう気がする。だが、あのひとはそれでよいらしい。私が改めてそういうことについてキツチリしようとするのが寧ろ分らなかつた。二十五日に、貴方のおっしゃつたのは深い友情の言葉でした。

私としては、彼のひとが、貴方の友情のねうちを深くかみしめ  
あ

ることが出来るか出来ないかが問題でなく、対手はどうであろうと、貴方のお気持を私たちの家庭生活の裡では貫徹しなければいやです。

あなたが快くなく思いになるような風に私たちの家があつてはならないし、又そんな家のある意味もない。私の心持お分りになるでしょう。

今丁度別に手つだいをさがしかけていたところであつたから、それが見つかつたら、Xは別に住むように考えましよう。何か少しでも収入のある仕事を見つけて。そして、別に一つ部屋をもたそう。ちよいちよいしたことて手伝つて貰うとしても。それから、私たちのところにいるうちは、Dさんは従前どおり普通の友人と

して来て、かえつて貰いましょう。そういうやりかたはどうかしら。二十五日に、私はどちらかと云うと、何だか苦しい心持で帰つたの。途々いろいろ考えて。こんなに、貴方の心持を重く見て、自分の心持の中に入れて暮して居るのに、そういうことで貴方を不快にさせたのは實に實に残念であるから。そして、貴方が、自分の家が、変にもつれの間に入つているようにお思いになつたらさぞいやだろうと。そういうことを考える必要の起つたのは何しろ、五年の間に初めてでしたからね。参つてしまつた。

私が自分たちの家をもつのは、林町の生活に對して図式的に考えているからではなく、實際の必要です。一つの家に、二人の主人が居ては主婦が困るのだから。Xのことは別としても、私たち

の家はここに持ちつづけます。私は、貴方の心持を考えたら、あの夜でもXに部屋借りさせようかと思つたが、それも激しすぎるから、と、新しいプランを話しただけにしておきました。けれども、貴方のお心持によつては、すぐそのように計らつてもようございます。私が生活費をもつてやる覚悟なら今すぐにでも出来ることなのだから。どうか御返事を下さい。私の生活なんか、そこで貴方がいやだと思つていらつしやると思うと全く光彩を失つてしまふのだから。

子供らしい人々は、貴方に対する書く手紙のなかで甘えているのね。そして、あなたへの親密さの一層の表現として、私がどうしたというようなことを誇張的に表現するのね。そう書くことで、

あなたへの親愛を更に内容づけるように感じて。大人の年をして、子供っぽい感情のふるまいをすることは、はたの迷惑ですね。ともかく、この手紙は話さねばならない事柄の性質上、大して愉快でないのはくちおしいことです。でも、大体のこと分つていただけるでしようか。この手紙の任務は其なのですが。只今ネルのお腰を速達で出します。呉々もお大切に、寒中だから。

「自注5」林町の家は改築する——林町の家の改築は実現しなかつた。

一月三十一日　〔市ヶ谷刑務所の顯治宛　目白より（封書）〕

## 一月三十一日。第二十九信

二十八日に第二十八信を書き、引つづきこれをかきます。先便の主な内容であつたことが變つて來たので。XとDさんとのことは、初めから、私共はたで何だか合点ゆかぬものあり、又、あつちの家庭関係では、どうしても折合ず、困難であつたが、Dさんが昨日Xに自分が軽率であつたこと、阿母さんのXがどうしても嫌な心持は彼にも反映すること、一緒に生活しようとする計画は絶望であること、XはXとしての生活を立てるようになるとなど話した由。

Dさんの家庭とXは久しい以前から知つていて、その私の知らなかつた時代にXは、善意からであろうが、智恵ちゃんや阿母さ

んとして忘られぬ深刻な打撃を与えていて（療病に關し）<sup>とて</sup>、逆も妥協の見込みないわけなのだそうです。

僅か一二カ月の間に自分達のみならず周囲にも浅からぬ波を立て。軽率であつたという言葉以上のようなものですね。

私の心持では、斯様のこと、分るようで分りかねるところがある。どんな気持で人生を見て、自分の一生を見ているのか。生活をよくして行こうとする意志とか努力とか知つていて、云つている人でも、何だか釘のない組立てもののような工合で。實に変な気がします。私としては其那ことで貴方のところへまで或心持を波及させられ、腹立たしい気がします。

然し、おかしいことには、私のそういう腹立たしさの深さなど

は又一向通じて居らぬのだから。親切な心をもつてゐる人間をも、その親切に限界をつくらせ、親身にさせる度合いをうすくする人というものがある。

とにかく、そういう工合で、彼の人達の交渉の内容はすっかり変つた次第です。従つて貴方が不快にお思いになる点は自然消滅してしまつた。勿論、このこと全体が、浅はかな、衝動的な、愉快ではないことですが。

Xが、何かちゃんとした職業をもつようにすることは同じです。人間として拵え上げる上にももつと人間を知り、その中にいるのが必要です。

親がないとか、体がよわいとか、そういうことを特殊な条件と

して、時代的関係もあつて、不運から却つて依存的に生きて来た  
という人間は、女になど多いのですね。Xはもつと一人前の女、  
人間になる必要がある。今度のことについては五分五分ですが。  
もう私たちの間に、こういうことについてこういう種類の手紙  
を書くことは終りです。



二月の『文芸』や『文芸春秋』に書いた評論「迷いの末は」  
(横光の「厨房日記」の評)「ジイドとプラウダの批評」等、私  
として云うべきことを納得ゆくように云うことが出来て近来での  
成功でした。隨筆集の題は「昼夜隨筆」です。

竹村から別に小説集が出て、これは「乳房」を表題にします。

「昼夜隨筆」の方は寿江子が表紙を描きました。雨の日、女が子供をおぶつて傘をさし乍らもう一本手に黒い毛襦子のコウモリをもつて待つているところ。スケッチです。「乳房」の方は竹村の主人が装幀して名の字をかくだけです。

文学の領域にもこの頃は人情ごのみでね。横光氏日ク「義理人情の前に無になる覚悟が必要云々」と。こういう作家は「人情としては実に忍び難いが云々」と云つて人情を轢殺れきさつして過ぎる人生の現実に芸術のインスピレーションを感じぬものと見える。小林秀雄、保田与重郎、等の日本ロマンチストたち。私はこの次からもつと心持のよい、いいもの私たちの便りらしい手紙を書くことが出来るのを非常に楽しみにして居ります。今のこのXらのや

りかた、人間のそういう面について腹の立っている心持も直つて。では又。風が出て来ました。

二月六日朝

〔市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（封書）〕

二月五日 立春の後といつてもびっくりするような暖かさ。夜。けさ、まだ本当は、はつきり起きたわけでもなく二階から下りて来たらXが

「お手紙が来て居ますよ」と云うので、茶の間に行つたら、ウラウラと朝日のさし込むテーブルの上にお盆があつて、その上に手紙がちゃんとのせてあつた。「うれしい」と云つて、あけて、よ

んで、一つアアと安心して、顔を洗おうとして台所へ行つたけれど、眼がしばつくので、ホーサンどこ？ と大声を出したら、「そこの棚にあります」見るとアルのでそれを洗眼コップに入れて目を洗つたら、ピリツとする。ああ、こんなに充血していたのかともう片方洗つたら、何だかピリツとする工合が変なので目からはなした途端ブーンとアルコールが匂つた。「アラ！ Xさんアルコールで目を洗つちやつた」それから、ホーサンで洗い、水で洗い、まつかな目を鏡にうつして眺めていたら、Xがわきから「聞いたことないねエ」というので大笑いしてしまつた。誰だつて聞いたことなんかあるでしょうか！ アルコールで目を洗つたなんて。

でも、気が抜けていて笑い話にすんだから御笑い下さい。（一  
 封の手紙ユリをして動<sup>どうてん</sup>顛<sup>てん</sup>せしむることかくのことし）きのう手  
 紙を書いて一月六日づけの手紙を眺めて、いつ次のが来るのかし  
 らと思つてそのことを書いた、それをやめて、これに改めました。  
 家の生活のやりかたについて二重に考えて下すつて、本当にあり  
 がとう。

私の手紙ですこし様子はお分りになつたでしよう。自分でいや  
 に腹を立てているところがあつたので、あなたもいやと仰云つた  
 点、全身的に感じたのでした。でも、又次の手紙に書いた通りだ  
 し、今夜栄さんの話で、或はXに職業が見つかるし、そしたら私  
 はずつとよくなるでしよう。生活の感情の微妙さ。目前の便利で

まぎらすことの出来ない人間間の心持というものは何と活々と力のつよいものでしよう。それが逆に作用した場合には、目前の障害を踰ゆる人間感情の結合と隔全こ全とがなり立つのであるから、面白い。

私は一つ家に住むものがどんな対人関係をもつても、どんな生き方をしてもよいという風には思えず、まで蕊さやまで見えるし触れてゆくので、Xなど今まで心づきもせず、思いもしなかつた自分を見している有様です。

ともかく、私はただしそげもしないし、御安心下さい。おくりものの第一、ありがとう。私は私で、あなたがどんなに僅かでもいい心持で本をお買いになるだろうと随分楽しみにしていたので

した。では頂きます。そして極めて高雅な図案でイニシアルを組合わせ、あの文句を刻<sup>ほ</sup>らせましょう。私は万年筆は余りつかわずに仕事には。だからよく考えて或はペン軸にするかもしません。よく考えましょう。毎日つかいたい。気を入れて書くものを其で書きたい。ね、そうでしよう？

私達の生涯を托するところのペンなのだから。只順に行つても其は三月の五日以後になります。或は全然、そういう都合にはゆかなくなるかもしない。然し、もしそうであるなら、そうで、又私は、それをよいおくりものとして、記憶し得るわけです。そういうことが今日実現し得ないということで語られている作物の価値の意味に於て。

『リカアド』、繁治さん宛のお手紙も見せて貰いました。きょう小泉信三の正統派三人の研究を先に入れ、近日中に『リカアド』が見つかるでしよう。繁さんのところにもないのでですから。戸台さんにたのんで居ります。パー・シユキンもきょう入れ。

夜具袴とタオル二本。暮に中川へやつてあつた、訊いたら、

「あちらで廃業になつて居りませんから」とケロリとしている。

別の方をとりますから少しお待ち下さい。食慾がお出になつたのは何よりです。私の方も、いろいろ家の落付く前のゴタゴタで気がつかれているが御安心下さい。然し、眞面目に私は、生活の形態というものについて考えます。もつと下らぬ労力をはぶいた、しかも「お姉様」的でない生活はないものかと。あなたは御自分

の家として、どのような形をお考えですか。どういうのがいいとお思いになる？私は勉強、休養、を主眼にした極めて便利な家に、一人でやつてゆけるような形で住むのがどうも一等らしく思えます。日本の家では、出かける前に雨戸をしめる、そのことだけでも大変です。一つ大きな勉強部屋、あと、八畳（客間、食堂）に四畳半位、台所（ごく能率的にする）湯殿。そして入口のドア一つピシとしめれば全部よろしいという工合なの。そして、手伝いの人に時間制で来て貰うというようなの。何か一つ大いに考える必要があります。この頃私は前よりも一層勉強が主の生活の心持なのだもの。日本建の家は家を守るための人手を余り要求しきります。生活も、その時代のいろいろの必要からかわるものです

ね。

きょう、咲枝が太郎を初めてこの家につれて来ました。この間大雪の折、『婦人公論』から写真をとりに来て、私は太郎と雪の中に傘をさして立つてとつて貰いました。そして、けさついたお手紙の私への宛名を切つて、そのとおりの字を写真にとつて印にこしらえます。これは国男夫婦が印屋へやつて私の誕生日のお祝いにくれます。たのしみです。それで検印するの。

山崎の伯父様のいかめし型は適評です。柔道の先生のことは勿論よく承知して居ります。いろいろ考え方があることはありませんです。きのう、こちらの家へはじめての本の小包着。きようもう一つ（衣類の方）着。

早く散歩に出られるようになりになるといい。久しいことです  
るものね、もう。本当に日当でポカポカさせてあげたい。今年は  
一月の二十七日が満月でした。ここからも月がよく見えます。窓  
から私を訪ねて来ました。一月八日と十六日に書いた分が届いた  
のでしたね。これは第五信です。では お大事に

二月八日 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（男の人気がスキ  
ーをしている写真の絵はがき）」

二月八日。きのうの夜小雨の中を神田へ本を買いに行つたらこ  
の工ハガキが目についたのでお送りいたします。栄さんがきよう

上林へのこした荷物をとりに行きました。

これは何処の景色か分らない。中野夫妻はスキーに那須へ行つたそうです。ハイカラーネ。上林の上の方もきつとこんな眺めでしそう。あの辺はもつと起伏が多いが。もう一枚同時にかきます。

二月八日 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（男の人がスキーをしている写真の絵はがき）」

このエハガキを見ると、日光にキラキラ光る雪の匂いと頬べたに来る爽やかな冷気が感じられるようですね。私は風より雨がすき。雨より雪がすき。雨が降つたりすると傘をさして出かけたく

なります。スキーをして見たい、もし私の丸い短い体ののつかれるのがあるならば。但これは夢物語。モンペをはいて、赤い毛糸のエリ巻をして。スースーと、誰のところへ。

二月十日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（中西利雄筆  
「優駿出場」の絵はがき）〕

二月十日。これは古いエハガキ。今からもう足かけ三年前の帝展に出ていた水彩です。その時の招待日に父と見に行つて、父がこの絵は動いている一寸いい。と立ちどまつた絵。この刷は色がよくないが、陳列されていた薄暗い隅では騎手の体の線まで活々

と見えて私も一寸面白く思いました。偶然手に入つたからお目にかけます。あなたのところでは、夕方エハガキの色など特別鮮あざやかに見えるでしよう？

二月十七日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

二月十七日午後一時ごろ。

南のガラス戸をすつかりあけていると、ベッドの上まで一杯の日光。ものを書くには落付かぬ位です。（私は、春の日光には耐えられないから、眼の弱い故。せい。床の間をつぶして北に窓を開けようかと思つて居ります。）あなたのところにも、体のどこかにこ

ういう日光が当つてゐるのかしら。畳の上だけかしら。日当りのあるところにお移れになつたというのは何とうれしいでしよう。何だか私もほつとして楽な気持です。幸福な心持が微かにする位です。

十五日には、ゆつくりお目にかかるてよかつた。実によかつた。話す言葉や何かのほかに、いろいろうれしかつた。何しろ私ははりつめた心でいたのですもの。

お話で、私の生活の雰囲氣について一層何かお感じになつた理由も察せられました。フランス語の件。私はものを書くのが仕事で、責任をもつて書く習慣をもつていても、あなたへものを書くときには、くつろいでいるのかしら。例えば、私が林町のうちで

フランス語の稽古などはじめているのではなくて、Xがよそで稽古をDさんにして貰つていて、私はその教科書を買ってやり、その本がテーブルの上にあつたもんで、あんな格言なども引き出しあつたということが、はつきりあなたにはのみこめないようになしか、書かなかつたのかしら。可笑しいような、腹の立つような気がしました。そして、実は、貴方の方に読みちがえというようなことは絶対にないもののように、ひた向きに考えこんでいる自分も一寸おかしかつた。だつて貴方だつて——南天を御存知ないみたいなどころがあるんだもの。

林町の家の建直し（建築）は目下材料高騰で一寸見合わせですが数ヵ月うちに着手されます。正月早く、あなたには突然のよ

うに私が引越したのは、Nが正月頃傾向がわるく家をあけ（飲んで）そういうときは私が煙つたく、煙つたいと猶グレるので、Kのやりかたがむずかしいこともありますと分つて一層早くうつったのでした。この日白の家が割合よかつたこともあります。ここは、先の家の一つ先の横丁を右に入つた右の角のところで、小さい家です。でも、夕刻晴天だと富士が見えます。交通費がやすくなるので何より助かります。バスで裁判所や市ヶ谷へゆけるの。

木星社の印税は第一回分は三月五日によこすことになつて居ります。それで、ではやつぱり万年筆を買いましよう。あなたの顔を見たらそれを買おうと仰云る思いつきの心持がよく分りました。そして、ダイヤモンド社でやらせましょう。装幀は小堀鞆音の息

子で、ツルゲーネフ全集をやつた人。古九谷のよ<sup>あかじ</sup>うな赭地に緑のこんな形の飾、その中に文学評論集と墨でかいて右肩に著者の名。刷ることは千部刷りました。

もう一つのおくりものフリードリッヒ『二巻選集』「自注<sup>6</sup>」も私は少し得意です。もうどうに買って大切にしてもつているのだから。古典に対する私の理解力については御懸念は決して決してりません。私はここで又ここらしい激しい波浪の間に在るのです。船は小さいと云つても、近代科学の設備を怠つては居りません。私は小さい造作がいかに科学的かということが、今日の価値であると信じているのですから。

ジイドは、その作家的矛盾を自分から合理化すべきではなくて、

ジイドが真に誠実であらんと欲するなら自分の観念的な誠実ぶりのポーズをきびしく自己批判すべきであり、その点で与えられる批判を摂取すべきであることを書いたのです。無電で小松清とジイドが喋ったとき批判はあっても愛する心にかわりはないと云つた由。まだこの作家には本当のところが会得されていない。人間は自己満足や陶酔やのために自分の愛を云々するのではない、新しい、より高い価値を現実のうちに齎すことこそ愛の実証だのに。ところで、この印いんはお気に入るでしょう。

一月二十六日のお手紙で、あなたが万年筆のおくりものについて書いて下すつたその手紙の宛名の字です。検印用です。残念なことに竹村書房から出る小説集には間に合いませんでしたが「昼

「夜隨筆」の方には間に合うでしょう。木星社のにも二日違いで間に合いませんでした。私は大変うまく字が出ていてうれしい。ツゲの木です。数を多く掠すおのには一番よい由。

### 百合子

第三のおくりもの。名のこと「自注<sup>7</sup>」。私は昨夜もいろいろ考えたけれど、まだはつきり心がきまりません。單なるジャーナリズムの習慣でしょうか？ 果して。もしそうだとすれば、何故私はこうして考え、よくよく考えずには返事出来ないものが内的の必然としてあるのでしょうか。それに、お話を伺つたとき、私はこのことと私の生活の土台云々のことが、ああいう下らぬ混雜につれて結びついて出ている、思いつかれている、そのことでは、

率直に云つて大変くやしかつた。そして、何だか腹立たしかつた。  
私の生活の土台！ 勿論それは常によく手入れされ、見廻られ、  
より堅固にされるための種々の配慮が必要であることは自明なの  
ですけれども、そのためのいろいろの忠言というものを、私は実  
に評価して、一箇の私事ならずとしてきいて居ります。けれども、  
もし、私の生活の土台が二元的な危険をもつてゐるならば、どう  
して今日まで私の人及び芸術家としての努力を統一的に高めて來  
ることが出来たでしよう。（この二三年間の作品が皆よんと頂け  
ないことが本当におしい。）私は、あなたのお心持を細かく立ち  
入つて感じて、そういうことの思いつかれたことも分らなくはな  
いのです。決して。いえ、非常によく分る。それだけ、それが、

私としてくやしい雑りものをもつてゐるらしいことが私の直感としてどかないのです。今私の感じてゐるままを細かく書くと非常に面白いが、又長くなりそうで心配。簡単に云うと、私たちの生活は、貴方と私が互に深く豊富な自主的生存の自覚、情熱に対する自主的な責任をもつてゐるからこそ、特別な事情の中でも発育し、ゆたかに美しく花咲いてゐるのだと思います。私があなたの妻であるからというだけで、私は貴方に對してこのような私の心を傾けてゐるのではないのです。私が私で、そして貴方をしかく愛するからこそ外部的な力で破られぬ結びつきをもち得ている。そして、そのことが、現代の日本の法律の上で、特に我々の場合、別々では不便を來してゐるから、習慣に従つて姓名を貴方の方の

と一つにしている。そうでしょう？ その方が本当というのは、特に私たちの場合、何だか私の感情の、これまで生き貫いて来た、これから生き貫こうとしている感情の全面の張りにぴつたりしない。私は、可笑しい表現だけれども、中條百合子で、その核心に宮本ユリをもつていて、携えていて、その微妙、活潑な有機的関係によつて相互的に各面が 豊 饒 になりつつあること、 強 鞣 になりつつあることの自覚を高めているのです。私たちの生活の波瀾を凌がせ、搖がせず、前進させている私の内部の力は、こういう力で、大局的に貴方の生活と自分の生活との充実を歴史の上に照らし出して見通して、建設して行くところから湧くのです。貴方は御自分の姓名を愛し、誇りをもつていらつしやるでし

よう。業績との結合で、女にそれがないとだけ云えるでしようか。妻以前のものの力が十分の自立力をもち、確固としていてこそはじめて、比類なき妻であり得ると信じています、良人についても。私たちは、少くともそういう一対として生きているのではないでしようか。同じ一人の良人一人の妻という結合にしろ私は新しいその質でエポックをつくる、一つの新しい充実した美をこの世の歴史に加えようとして暮して居ります。こういう私の心持は勿論分つて下さるでしよう？ 私としては、特に、私として自分が意企しなかつたキツカケから、そういうことが貴方に思いつかれたことが、何だか遺憾です。だからこのことは、私たちのおくりものとは別にしましよう。別箇の問題としましよう。ね。

隆治さんにきよう、これと同時に手紙を出します。それから買物に出かけて、御注文の品を小包に出します。

島田へは私も思つていたから行きますが、いつ頃になるかしら。三月のうちに行きたいと思います。三月のうちに仕事と仕事との間を見計らつて。一週間か十日ぐらい。

いろいろ書いて一杯になつてしまつたけれど、十三日には窪川、壺井夫妻、徳さんの細君、雅子、林町の連中太郎まで来て十三人。六畳にギューギュー。皆がきれいな花をくれ、稻ちゃんのシクラメンがこここの机の上にあります。木星社の本の表紙の見本刷を額にして飾つた。皆よろこんで居りました。日本画風などころがあるが安手ではありません。桜草はいかがですか。日があたればき

つと長く咲きつづけるでしよう。私はこの手紙を、あなたの膝の前にいる近さで書いている、襟元のところや顔を眺めつつ。では又、御機嫌よく。おお何とあなたの目は近いところにあるのでしよう。では又。

「自注6」フリードリッヒ『二巻選集』——フリードリッヒ・エンゲルス二巻選集。

「自注7」名のこと——百合子は当時作品を中條百合子の署名で発表していた。

二月十九日夜

〔市ヶ谷刑務所の顯治宛　目白より（はがき）〕

(1) (2) )

エハガキが切れているのでこんなので御免なさい。

きょう午後に小説集『乳房』が出来てきました。くすんだ藤色の表紙に黒い題字。早速速達で御覧にいれます。「この一冊に集められている作品の中には『一太と母』のように随分古く書かれたものもあり本年の一月に発表した『雑沓』のようなものもある。

旅行記は小説ではないわけであるが私の作家としての生涯にこのような旅行記を書いた時代の生活は忘られないものであるし、今日では、五六年前に書かれた旅行記も却つて或味いをもつて読まれるので収録することにした。私たち一部の作家がこの数年間に

経験した生活の道は実に曲折に富んでいた。一つの作品から一つの作品への「以下はがき（2）」間には、語りつくされぬ人間生活の汗が流された。そして、直接その汗について物語ることは困難である。私は益 誰にでも読まれ得る小説として『雑沓』の続篇を書きつづけ、そのことによつて私たちの芸術の到達点をも示し、自身の芸術を高め得るような仕事をしてゆきたいと願つている、一九三七年一月二十三日。」序です。今夜はこの家へはじめて佐藤俊子さん「自注8」が来て夕飯をたべ、手紙に押してあげた印を見て字の感じを大層ほめていました。あれは暖い字ですもの、本当に。とりあえず床に入る前。

「自注8」佐藤俊子さん——前年の秋、十八年ぶりにアメリカからかえってきた佐藤（田村）俊子。

二月二十八日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

二月二十八日　日曜日　晴

きょうは何だか久しぶりで心持のよい晴天。きのうの晩は座談会で銀座へ出かけたら、かえりはひどい雨で、上落合の神近さんの家の先で、送ってくれた自動車が泥ぬかるみ濱にはまりこんでしまつて荒ナワを車輪にからみつけても、砂利をおいても動かず。どうどうと降る雨の中でポツネンと待つていて、運転手が空車をつれ

て来て、それでうちへかえりました。その夜の雨の中でルームランプの明るい車の中にぼつつりといて、もうあなたはきつと眠つていらつしやると、その刻限（十時すぎ）について考え何だか妙な気がしました。

きょうは昨夜の雨で晴れた空気の工合が一層心持よいのだが、あなたのところではどうかしら。それに私は今日うれしいのは、一日お客様をことわって、『昼夜隨筆』のためにかいている感想を書いてしまおうとしているからもあるのです。駅のすぐそばにいろいろなものを売っている市場があるので覚えていらつしやるでしょうか。あすこへ行つて、内側が紅で外が黄色っぽいバラを買って来て、三輪ばかりテーブルの上にさしています。

二月九日に書いて下すつたお手紙の後の分をこの数日の間大変待つていました。島田へでもおかげになりましたか？ 隆治さんることは伺つたら、隆治さん自身は希望していないのだそうです。ひとの話で、いいようなことをきいて寧ろ達治さんの心持から一寸そんなことにもふれたらしい様子です。隆治さんはやはりお家の仕事の手助けをしていらつしやるのだそうです。そちらへもお手紙がありました？ お父上が、二月十七日頃工合をわるくなすつたということ。一時はお驚きになつたそうですが、よい塩梅に恢復なすつたそうです。しかし、元通りということは出来ず、どつちかというと病症は前進している傾の御様子です。あなたが御心痛になるといけないとお母様は御心配ですが、私としてはあな

たのお心持は十分わかつてゐるつもりですから、御病状のこともこれからずつとあるとおりにお知らせいたします。その方をあなたもよいとお思いでしよう。意識など少し混濁していらっしゃる御様子です。三月の十五日迄に私はやむを得ぬ仕事を一応かたづけ、それから島田へ御見舞に行くつもりです。それより早くは仕事の都合上絶対に無理なので、幸御様子も落付いているし、それまで私は大車輪に働いて出かけます。どの位あちらにいるか、それは御様子を見なければ申せず、私はお母様のお邪魔にさえならなければ、少し長くあちらにいようかとも考えて居ります。私は島田で、お客様でなくなりたいから。こちらの家の留守番を見つけ、予定を別に立てずあちらへ行つて見て、きめようと思ひます。た

だ、あなたも御存知のとおりお店だから生活の様子がああいう調子の中で、私が落付いてまとまつた仕事をすることはどつちかと云えば困難でしよう。そういう無理で、空気をこわしたくもないから、その点では半月ぐらいの期間を考えても居ります。

いずれにせよ、私は出来るだけのことをいたしますからどうか御安心下さい。あなたがおやりになるだろうと思うことは皆やりましょう。そういう心付で、私は決して、あなたが残念であつたとお思いになるようなことはしません。どうか深く私を信じて安心しておまかせ下さい。この手紙は十日も経つて御覧になるのですね、その前に私はお目にかかるわけですが。――

ずっと運動にはお出られになりますか？ 入浴は？ 今年は冬

が大体暖く、春がもう来たようです。寿江子が鶴沼から来ると大抵私の方にいる。今も居ります。段々私の生活ぶりもわかつて来て、ちよいちよいしたことでは手助けをするつもりで居ります。

実際にどの位出来るかということは、おのずから別ですが。二月、三月（四月も）と『文芸春秋』に時評をかき、杉山平助氏から近頃の正論をはく批評家というようなことをきわめつけられ、ホーホーと我ながら批評家ということばに笑います。六芸社の本は序も簡単にしかしそくかけた方だし、好評です、全体としてそういうのは勿論当然であるが。ああいうものが売れる、それは実に興味ある現実です。私の楽天性の根拠いかに堅くリアルであるかと、努力を鼓舞されます。この前の手紙で書いたおくりもの第三につ

いての私の心持はおわかりになつていただけたかしら。議論めかしくて可笑しいやですが、書くとやつぱりあるようにしか書きようがない。そして、私は心でひとりで思つてゐるの、貴方は、御自分が本当に安心して大らかな心持でいらつしやれるのは、ああいう風なところが私にあつて初めて可能なのだがナ、と。うぬぼれではありますん、決して決して。現実は錯綜して、困難で、もし私が自主的に生活に責任をもつてゆけないのであつたら、あなたは逆も心付きを云つて下さるに暇いとまないどころか、実際には常に万事手おくれであることになるのだから。でも、私は大体に、まだまだ貴方に勘でお心遣いをうけるようなアンポンがあるのね、そのことでは本当にすまないし、一方から云うと勘が本質的には的

を外れないということが有難くうれしくもあります。

これは大変微妙な心持。このような歓びというのは。私は評論を、作家、人間としての洞察から現実に即して自由にかけて、或ことを云い得ている。小説でも、今どうやら一步前進の過程にあらしく、努力のコツとでもいうか、そういうものが会得されかかる感じです。現実を、その全体が立体的に活きて働くようになつた感じです。現実を、その全体が立体的に活きて働くように書いてゆく、描写してゆく、何とそれはむずかしいでしょう。私は評論をかく上で体得したものを、小説で更に高く形象的に身につけようと意気こんでいる次第です。私は、生れつきが小さい持味でまとめて、その人らしさだけで立ちゆくタイプではない、もつと違つた何かがあつて、それを全面的に発展させるためには自

分の人一倍の努力がいる。より大きい美のためにには。私たちはそういう人たちですね。ああ、こういう話をしあげると限りがなくなつてこまる。保田与重郎は『コギト』を出し（雑誌）日本ロマン派の理論家であるが、この頃は王朝時代の精神、万葉の精神ということを今日の文学に日本的なものとして提唱し、そのことは林、小林、河上、佐藤春夫、室生犀星等同じです。現代には抽象的な情熱が入用なのだそうです。三木さんは青年の本質は抽象的な情熱をもちうるところにある云々と。そのような哀れな空虚な青年時代しかこれらの人々は持たなかつたのでしょうか。二十四五日に文芸春秋社の十五年記念の祭があり、稻ちゃん、俊子さん等と行きましたら、小林秀雄というひとがお婆さんのような顔つ

きで、私に妙なお土砂をかけました。フウー。では又。これから仕事をします。どうかよくおやすみになるように。

三月一日 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（五色温泉の山の写真の絵はがき）」

三月一日、小雨。白揚社へ最後の原稿をもつて行つて、神田で寿江子と支那飯をたべるために歩いていてこれを見つけました。

これは奥羽の五色温泉の山の上の高原の雪景です。私は九つ位のとき父と祖母と一緒に五色に一夏くらしました。温泉宿は一軒で、そこの窓からは山の中腹で草を食べている牛も見え、この原はサ

イ河原と云つたと思います。

夏も大変うつくしい景色です。夜はこれも寿江子と帝劇で二都物語を観ました。当時のフランスの人民がよく描かれていませんね。

三月四日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

三月四日　快晴、些か風。第八信

きょうは水曜日です。私はいつも水曜日木曜日などという日は特別な感情で朝テーブルの上を見る。けさ、眼鏡をまだかけないで下へ降りてテーブルを一寸見たら、心待ちにしている例の封緘

がなくてハトロン封筒が一枚あり。何だろうと思つて手にとつて見て、ハア、とうれしく、それでも実に実に珍しくて丁寧に鉢で封を切つてそのまま一通りよんでも、又よんでも、食事の間じゅうくりかえして出したりしまつたりしました。可笑しいのね、何と可笑しいのだろう、一通の手紙でも見る毎に何かいいものが出て来そうな、何かよみ落しているような、もつと何かあるような気がして、まるで宝の魔法箱でも眺めるように飽きないのだから。この分量だけ手紙を下さるのにあなたがとつて下すつたいろいろの手数はよく分るので一層うれしゆうござります。

二月十七日に六信をかき、二十日すぎに七信をかきました。もうそろそろ二つとも届く頃でしょう。

このお手紙に書かれているすべてのことは皆よくわかりました。  
或はもう分つていたこと（お目にかかるて）もあり。（差入島田  
の要点等）

いまうちにには信州の方の知人へ稲ちゃんが世話をたのんで呉れ、  
よい人が見つかりそうですから御安心下さい。ヤスのような人物  
だつたらどんなにいいでしょう、あの半分位でも。

いずれにせよ、私は私たちの生活全面を非常に愛しているので  
す。そして辛いなどと、きりはなして考え、又感じたことは殆ど  
一度もない、これこそ、私は私たちの無上の幸福だと思つて居り  
ます。私が身に引き添えて思うことは、私たちの文学の上にでも、  
しなければならないことに比べて、生活術が未熟だつたり、人間

としての鍛練が足りなかつたりすることを自覚したとき、ああもつともつと豊富になりたい、とそれさえも私の場合では希望の光の裡で欲求されるのです。私は御承知の通り滅入らないたちの女です。私の方にあらわれる生活上のいろいろのこと||次善的な方法で家をもたなければならぬこと||それさえ私は私たちの生活として決して半端とかあり得べからざるとかいう俗的規準で感じていず、全的なもの、全く充実したもの、私たちの現実の中でもち得る唯一のものとして生きているのです。どうぞ御安心下さい。

私にもし例外的に己惚れが許されるとしたら、この点だけです。

貴方という存在は、朝夕まわりに姿を立ち動かしていないでも十分私をたっぷりと場所に坐らせ、豊かにさせていらっしゃるのだ

から。私たちはその点では本当の自信に満ちています。ただ、私はね、些かアンポンであるし、その自信を現実の歴史的な価値に具体化してゆくために、えつさえつさであるというわけです。それもなかなかよろしいのですよ。疲れすぎない程度に腰を据えて仕事を押してゆく心持は。

『文学評論』が（六芸社の方）いろんな本屋の店頭に積まれている。となりの方に小説集も落付いた藤色の表紙で並んでいる。何というよい眺めでしょう。評論感想集の方の名は「昼夜隨筆」というのにしました。わるくはないでしょう。「わが視野」というのはよい題です。この次のにつけます。

私の感想評論はこの頃少し内容がましになつて、この次の分に

は「わが視野」とつけてもよいらしい。この頃のは評論に力点があるの。

私の誕生日は謄本には二月十一日でしよう？　十三日なのです。何を間違えたのか。ずっと間違いっぱなしです。私はこの頃益夜仕事をするのがいやなので、なるたけ午後一日じゅうの仕事をするようになります。夜ちゃんと寝て、朝起きる、そういうのでないと私にはつづかないから。

中野さんが三四日前、銭湯の洗場で滑つて左腕の肱の内側をガラス戸へ突込んで深く切り、小さい動脈を切つてしまつて、手術をうけ目下臥床中です。あのひとは今年の正月はスキーに行つて右肩を雪につき込んでくじいてしまつたし、怪我がつづきます、

もう然し心配はいらないのです。

島田の方ではお父様ずっと平調でいらっしゃるらしく何よりです。前の手紙でお話ししたように私はもしかくり合わせたら三月二十日頃から出かけます。四月十日頃までの仕事沢山ありそれを全然しないことは出来ず、その点をも考えて。おくりものは、やはり万年筆にします。ペン軸でもし非常に恒久的のがあればよいが。今つかっているのはもう十四五年になるが、それでこわれたりしてはいやだから。私はこわれないの、折れないのが欲しいから。古典も、大抵揃つて居りますが、書簡の部分を、うごかして、それきりどうかなつてしまつているから補充しましよう。

『学鎧』、『アナウンスメント』等現在のはお送りしあとは丸善

に注文しました。貴方の方から御注文であつた本の目録は別封でお送りいたしましょう。これはこれとして。今年の春は、本が三冊も出て、傍らものも沢山かき、賑やかな時です。しかし、執筆のレベルは一つよりは一つへと高まらなければ意味ない。昔よりずっとずつと勉強です。又自らちがつた形で。

私は今年の記念にそしてあなたが三十歳におなりになつたお祝いに、私たちの蔵書印をつくるつもりです。もう自分から本を売るようなことはしないから。お体をお大切に。皮膚がゆるんで力ゼを引き易いから大事に。

三月五日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（梅の花の写真

## の絵はがき)」

三月五日 金、春の北風。

きのうは半紙のお手紙をいただきうれしく早速返事をさしあげました。昨夜は国際ペンクラブの大会でアルゼンチンへ行つた藤村の歓迎会へよばれ、芝公園の三縁亭という珍しいところへゆきました。

上野の精養軒のようなガラリとした、もつとオフィシャルな感じの店で、会にも文芸コンワ会の代表、国際文化振興会の代表等出席。藤村の挨拶は世界の大きい波に一寸でもふれて来ただけ、作家らしいものをおい意味でもつていました。きょうは下の四畳

半へ勉強部屋をうつし、夕方太郎が汽車ボツボ見物に来。

三月七日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

注文書のリスト上に＊をつけたのはもう送った分です。

(一) 一九三五・六・一 咲枝宛

改造日本文学全集中「独歩」「漱石」「藤村」

春陽堂明治大正文学全集『長塚節集』

アンドレ・ジイド＊『一粒の麦もし死なば』

『ドストエフスキイ論』

『日本經濟統計図表』

『近世日本農村経済史論』

\*『憲政篇』\*『正史篇』『軍事篇』

章萃社『日本社会経済史』

\*『日本經濟年報』第二十輯

『日本歴史地図』

(二) 一九三五・七・二七 咲枝宛

改造社文学全集中\*「漱石」「独歩」「藤村」「長塚節」

改造名作選集中「藤村」「漱石」

『開化期文学集』\*『戦争文学集』

新潮社全集「デイケンズ」「スタンダール」「ドライザア」\*

「トーマス・マン」

英書 The Works of W. Shakespeare, gatherd into one Volume

中央公論『シェークスピア研究』の栄

(三) 一九三五・一〇・二六 咲枝宛

図書月報・全集内容見本、普通目録 丸善の洋書目録中政治経  
済芸術哲学ノ分類目録

\*?『日本歴史地図』『東洋歴史地図』『兵法全集』

(四) 一九三五・十一・二 咲枝宛

佐々木惣一『憲法』\*上杉『憲法読本』アモン『正統派經濟  
学』小泉信三\*『アダム・スミス、マルサス、リカアドオ』  
クーノー『ヘーゲル伝』安倍『近世哲学史』

(五) 一九三六・三・一四 寿江宛

\*『日本經濟年報』第二十一、二十三輯

(六) 一九三六・五・二六

\*ブランデス『ゲーテ』

(七) 一九三六・一〇・三日 上林の百合子へ

『リカアドウ』 林権助『わが七十年を語る』 \*『猶人日記』

\*小宮『漱石襍記』 木村『旅順攻囲軍』 ツルゲエネフの\*

『散文詩』

(八) 一九三六・一〇・二一 百合子へ

\*『療養新道』 \*『栄養食と治病食』 \*『内科読本』 \*『国民保健読本』

(九) 一九三六・十一・二 百合子へ

ブーシュキン\*ツルゲーネフ\*フローベル\*ゲエテ全集目録

(十) 一九三六・十二・二六 百合子へ

ブーシュキン全集目録

以上の中、林の『わが七十年を語る』『リカアドウ』は日下本屋にたのんであります。『ヘーゲル伝』は近日お送りいたします。ブランデスの『ゲーテ』はよんでおかえしになつたのではなく、数が多すぎたので一旦送りかえした本の中に入つて來たのではなかつたでしようか。もしおよみになるのだつたら又入れましよう。

三月二日づけのお手紙をありがとうございます。一通りよんだときいろいろ

ろの感情を経験し、それからずつとその感情を感じつめて、結局私が貴方に向つていうことは心からのありがとうであるとはつきりしました。ありがとう。

あなたが私の生活について考えて下さるだけ考えててくれている人はない、本質的に。デイテールについては又別に書きましょう、特に父について。それはそれとして、又おのずからお話しもあり。それから私は隨筆的存在ではないし、本もそうではないし、そういう生きかたをし得るものでもないでしよう？ 元来。一人の女としての愛情から云つてさえも――

今『都』へ「文学における復古的提唱に対して」書いています、  
四回。

## 附録 一枚

「わが視野」の内容の概略を一筆。

社会時評、文芸時評、作家研究、隨筆で、社会時評はいろいろ。文芸時評は「迷いの末は」25枚、横光厨房日記の批評、「ジイドとそのソヴェト旅行記」「文学における今日の日本的なるもの」24枚、「パアル・バツクの作風その他」10枚、「子供のために書く母たち」15枚、「『大人の文学』論について」（林房雄、小林秀雄らの提唱に関して）10枚、「十月の作品評」12枚、「自然描写における社会性について」15枚、「『或女』についてのノート」15枚、「今日の文化における諸問題」23枚、「一九三四年度における文学の動向」30枚、

## 作家研究

- (一) マクシム・ゴーリキイの人及び芸術 (四十枚)
- (二) 同 その発展の特殊性にふれて (四十枚)
- (三) 同 によって描かれた婦人 (二十三枚)
- (四) ツルゲーネフの生きかた (四十枚)
- (五) バルザックから何を学ぶか (七十枚)
- (六) 藤村、鷗外、漱石 (九枚)

## 隨筆

最も長いので二十枚位（わが父）を入れて五六篇ぐらい。

（終）

三月十七日

「市ヶ谷刑務所の顯治宛 目白より（はがき）」

三、十七日。十五日にはいろいろ御相談が出来て私は大変うれしく、いい心持になりました。貴方から私は多くのことについて教わるけれども、しかられる自分というものは考えて居りませんから、そういうものとして互を見てはいなかから。とにかく本当にゆつたりした心持になれました。きょうは「今日の文学の鳥瞰図」を唯研に送り、栄さんと風の吹く街へ出て、島田へのおみやげを買いました。父様へは夜具。母様、野原の小母さん、向いの人には裾よけ。達ちゃん隆ちゃん富ちゃんにはバンド。克子さんにはきれいな腰紐とカツポー着。あとは子供らのための小さいお菓子入りのいろんな袋。今夜はそちらもお寒いでしよう。きょうお母さんからお手紙で、待つて下すつて居ます。『リカアド

ウ』を入れました。『日本経済年報』も。

三月十九日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（佐伯祐三遺作「レ・ジュ・ド・ノエル」の絵はがき）〕

三月十九日　明日立つ予定のところ、仕事、旅費、そのほかの都合で、二十三日頃になります。これを出してもきっとあつちから出す電報と、おつかつに御覧になるのでしょうかね。さむいことさむいこと、父上のお布団はいいのを西川で買いました。稻ちゃんど。

三月二十三日

〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（はがき）〕

三月二十三日。今夜立つところ汽車に寝台がなくて、くたびれているので明日の午後三時に立ちます。いよいよお立ちです。窪川さん夫妻はうずらの玉子を、壺井さんたちは体によいというお茶を、M子はのりのつくだとおたふく豆を。それでお見舞にくださいました。お父さんはこういうお見舞を考えていらっしゃらないでしようから、さぞおよろこびであろうとうれしゆうござります。私は今二十枚ばかりの評論を終り、もう一つ夜終ります。

三月二十六日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県熊毛郡島田村

より（厳島紅葉公園と広島駅の絵はがき二枚）

二十四日の午後三時のふじで東京をたち、ひろしま午前五時四十分、島田九時前でした。ひろしまから柳井線に入つたら、海と対岸の景色が珍しくて、目が大きくなつたようでした。お家へ入つて行つたら、中の間にお父さんが起きかえつていらつしやるので、びっくりしたり、大安心したりでした。思つたよりずっとよくなつていらつしやいます。ひる間、どつちかというとよくお眠りになるので、夜は御退屈のようです。気分も平静でいらつしやるし、食事もあがれます。お母さんは相変らず御活動です。井戸がすつかりポンプになり、お店もさつぱりきれいです。

晴、島田の茶の間。

きょうは晴天、おだやかな日です。お父様は障子のそばへ床をうつし、今は座椅子によつて上半身起き上つていらつしやいます。上御機嫌。お母さんは、稻ちゃんがくれたウズラの玉子をわつていらっしゃる。隆ちゃんは丁度仕事からかえつたところ。前の麦畑の麦は一尺ばかりのびて居ます。

家じゅうがいろいろと手入れをされていて、大変明るい感じです。うれしいと思う。達ちゃんはまだかえらず。野原から多賀子さん「自注<sup>9</sup>」が手つだいに来て居ります。

〔自注9〕多賀子さん——顕治の従妹。

三月二十六日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県島田より（浅野泉邸の絵はがき）〕

三月二十六日　今丁度正午の時報。ラジオは株式をやつています。

きのうは野原の御父上も見え、お向いの御夫婦も見え、兼重さん（山田の）も見え、なかなか賑やかでした。今は野口さんのお父さんが見えています。私のために大変キレイな座布団をこしらえて下すつてあり、テーブルも出来ている、何でもあなたが野原

でつかつていらつしやつたのというの。そのザブトンは大きいのに達ちやんか誰かもつと大きいのがよからうと云つたと大笑いです。毛布も布団もお気に入り、かけていらつしやいます。いずれゆつくり手紙をさしあげます。

三月二十七日午後 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 山口県島田より  
(封書)」

三月二十七日 晴天の午後三時前。

二階の部屋。父上は今おやすみ中。さつき隆治さんが一寸かえつて来て御昼を土間で食べて、又仕事に出て行つたところ。すこ

し風はあるがいい天氣の日です。裏に面した窓をあけ放して、山や農家の様子を眺めながら、私はさつきからあなたのことちらにおよこしになつてある手紙を整理して、さて、いろいろとうちのことを申しあげようと思つて。――

お父さんの御容態は電報やハガキで一寸申上げたように大変平靜です。食慾もおありになり、朝二膳ひる三膳夕三膳ぐらい、おかゆと御飯とをあがります。おさしみや野菜をあがる。カステラ、ういろう等もあがります。いい舌をしていらつしやり、通じも一日置き自然についていて、この四五日は用便も御自分でおわかりになるようになり、皆々大よろこびです。皆夜中の間のコタツのまわりに集り、お父さんのまわりを囲むと、いかにもうれしそう

な御機嫌で、ニコニコなりづめです。御飯を私がサジでたべさせてあげ、臥たり起きたりのお手伝いもしてあげますが、お母さんのお上手なのにはかなわない。何かやつていらつしやるのを此方でよくよく観ていると、やはり急所があるので。そこをエイヤツと私も真似をするの。「お后<sup>ゴー</sup>」「自注<sup>10</sup>」や、「一寸来て」お父さんはお后様なしでは立ちゆかぬ有様で、又お母さんが、明るく、てきぱきと、優しくしてあげていらつしやる様子というものは実際に見ものです。美しいというべき眺めです。達ちゃんにしろ隆ちゃんにしろ、病人として片づけず、生活の中心において実によくやつている。何とも云えない親しさ、<sup>むつま</sup>睦しさ。私は、林町のうちの睦しかつた、その性質とここの人たちの睦しさの性質とを考え

比べて見て、斯ういう一家の仲間に加われる自分を仕合せな者だと深く感じます。そのことは、深く、深く感じます。あなたは、本当に立派な御両親や弟たちをもつていらつしやる。心からおよろこびを申します。こういう心持の暮しというものは、人工的にこしらえようと云つたつて出来ぬことです。全体の気分がね。私は、お父さんの扱われていらつしやる様子を見て、親切とはかくの如きものと感服している次第です。単なる丁寧ではありません。いろいろ私は感動いたします。

家の財政のことは、お母さんから詳しく述べました。丁度二月の七日に講の整理がついて、お祝をなすつた由。十日ばかり経つてお父上がおたおれになつたのですが、やはりよつぽどの御安心

でしたのです。こちらの家は、今はすっかりこちらの所有になつたわけで、二階などすっかり畳がえが出来、雨樋も壁もさっぱり白く手入れされ、家の中は、一つの清潔で静かな活気に充ちています。お店の方も、明るくなつて居る。野原の方はこちらのように手堅く行かず、あすこは全部売却して、Tさんのいる、広島の方へ行こうと云つていられる由です。二千百円ぐらいの整理をし、あと千四五百をあまして、出かけようとして居られる由ですが、その価では買手が見つからぬ由です。きのうもゆつくりお母さんとお話し、野原は、あなたも思い出をもつて愛していらつしやるが、将来、若い二人が仕事をしてゆくには、どうしても、今の場所の方がよいから、ここは年の地代 60 でやはり持つていて、向

い側に九十坪ほどの横長い地面が1200ほどで手に入るから、達ちゃんの結婚のための必要もあり、出来るだけ早くそこを手に入れておいて、貸家にしてもよいということに大体御相談がまとまりました。この家を達ちゃんのものにしても土地がないので、この辺では結婚の話にもなり難い、まあ土地も一寸あるというところで嫁に来させて、となる由。それで私は、私たちで、その半分でも出来るだけ早く都合して、そつちを解決して、出来ることならお父さんに達ちゃんのお目出度<sup>めでた</sup>を見せてあげたいと思います。私たちのお目出度はあんまり本質的すぎて、世間のお祝儀は高とびした形だったから。ああやつて、お父さんがニコニコ楽しそうにしていらっしゃるとほんとうに、そういうよろこびもさせてあ

げたいと思うし、お母さんのそばにいる、若い女のひとの手も実際に用なのがわかります。これはいい案でしよう？　あなたもきっと賛成でいらっしゃるでしょう。講の方が片づいている以上、それがよいと思います。

隆ちゃんは、目下の考え方では運転の方でやつてゆきたい由で、兵隊まで（一年予）うちを手つだい、あとはよそにつとめて、といいう気らしいが、お母さんは、達ちゃん一人では無理だから、月給制にしてずっと協力してやらせたいという御意見です。そして、ここのお店も会社組織を改めて、達ちゃんの名儀になさる由。お母さんは今まで女の社長でいらっしゃったのよ、御存知？　うちには、なかなかアマゾンが出ますね。きのう、お母さんと二人で大笑い

してしまつた。だつて女の社長なら、婦人雑誌に出さなければならぬでしよう？　これは冗談だが。——野原の方の土地家屋は講をつくるときに、信吉さんが父上の御承知ない間に、自分の名儀にしてしまつていらつしやる由です。その他お二人としてはいろいろのこととて、この際、あちらはあちらとして生活の責任をもつてゆくようになることを御希望です。あなたは御存知ないかもしがなかつたが。——お父さんの昔仲間の野田さんはこの頃の激しい時期に株にひつかかつて、皆々心配して居ります。

お母さんは、近いうちに、私を宮島見物につれて行つて下さるそうです。こちらへ来る迄、私は父上のことも心配だつたし忙しくて忙しくてひどかつたし、着いて、お父さんのお笑いなさる顔

を見て安心したら、何だかポーとなつて、久しぶりで、まるでのんきな休まる気分です。お母さんの娘になつて、少し遠慮しながら甘つたれて、冗談を云つて笑つて、眞面目な相談もして、そして夜は十時すぎにもう寝て、それでも朝九時頃まで眠ります。どうも、眠くて眠くて。それは眠いの。あなたに、これだけ書いて、家の中の空氣おわかりになるでしよう？ 林町がああ腰をぬいて暮して居るし、私はキリキリまいをしているし、ここでは、お母さんを中心に活々<sup>いきいき</sup>と軸がまわつていて、又別な楽しさ、安らかさです。

今度来て本当によかつた。

お医者も特別に誰というお好みはありません。しかし、お父さ

んは昼間お眠りになります。これは、やはり全体の御衰弱ですから、余り油断はならないと思います。あなたの方はずっとおよろしい方ですか？ 食慾も出て居りますか。どうか、どうか、お大切に。ここにいると何だか遠いようです。私はこちらですつかり疲れをおします。では又

「自注10」お后ごう——顕治の故郷の地方では、おくさん、おかみさんをお后ごうはんとよぶ。

三月二十九日（消印） 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 厳島より  
(安芸の宮島廻廊より千畳閣を望む絵はがき)」

ここは大変に明るい美しいところでびっくりしました。清盛と  
 いう人物が只ものでなかつたのがよくわかります。よい天氣。お  
 母さんと、砂と松の間をふらりふらりと歩いて、よい散歩です。  
 あなたもここは御存じでしよう?

三月三十一日午後 〔市ヶ谷刑務所の顕治宛 山口県島田より  
 (封書)〕

三月三十一日 ひる少し前 曇天。

下でお父さんが「お后ゴ」、「お后ゴ」と呼んでいらっしゃる。私は

「ハイ、ハイ」と降りかけ「お后さまは今御用ですよ」御小水?  
 合点をなさる。用意してあげると「手をかせ」、私の手につか  
 まつて体を横になさるが、今度は勘ちがえ。それから起き上らせ  
 てあげて、背中のうしろにつめをかつて、ラジオをかけてあげる。  
 今甲子園のゲームです。あたりが静かなので「投げました投げま  
 した!」という声が、窓の軒の下からきこえて来る。蛙が円い声で  
 鳴いている。今日は勘定日でお母様はきのうからその準備で御多  
 用。達、隆二人は、虹ヶ浜とかへお嫁の荷をつんで出かけました。  
 きようはそつちもいそがしい由。

一昨日は今度病氣をなすつてからはじめて腰湯をつかわせ申し  
 ました。丁度二人が午後あいたので、家じゅう総がかりですつか

り洗つてあげ、さぞさつぱりなさいましたでしよう。言葉が自分ではよくおつしやれないが、話はよくおわかりです。この間お母さんと宮島へ行つた留守など、店の番をするからそこの襖をあけておけと、来る人にちよいちよい応待なすつた由。段々元に近く快復なさる。夜、御飯がすむと、こたつのまわりに皆あつまつて賑やかです。外へ出て見て、外が暗くてしんとしているのにびっくりする位家の中は生々としています。お母さんを見て、家の中心になる女のひとの気質というものがどんなに大切かということを感じます。お母さんは家宝ですね。私は女の先輩として、なかなか敬服措くあたわざるところがある。理解力にしろ、生活の地力であすこ迄高めていらつしやるのでですから、実にフレキシブル

ルです。そして労苦の中からよろこぶことを学び、その感情をなみなみと持つていらつしやる。本当に傑作です。お父さんは、今、わきから見ていると、もう全くお后さまに依つていらつしやる。

一種の美しさがある。勿論今でも時々かんしやは起しなさるらしいが。ずっと床についていらしても大きい骨格で、広い厚い肩で、その肩を私が自分の胸いっぱいに受けて抱えてあげたりしていると、何だか錯雜した二重うつしのような優しい感動を覚えます。骨格は、あなたはお父さん似でいらつしやるのね。

明日あたり、多賀子さんと野原へゆきます。この次来るときにはどうなつているか分らないから。海岸へも行つて見ましよう。

海岸といえば、ゆうべ虹ヶ浜の話が出て、何とか家のくり合わ

せがつき、お父さんの御様子が順調だつたら、夏は虹ヶ浜のあなたのいらした家でもかりておつれしたら等話しました。これはまだ全く未定です。お父さんはお后さまなしでは日が越せないし、お后さまは家がなかなか手ばなせないし。

隆ちゃんに私たちとして『早稲田商業講義録』を一年分申しこんであげました。15、広島の簿記学校へという話も出たが、そこはボキ専門で、それほどの偏かたよつた勉強は必要ないので、マアボツボツやって行つたらいいでしよう。隆ちゃんもこの頃は段々遠慮が減つて、すこしは喋るようになりました。なかなかいい子です。達ちゃんは、かえつて来た当座は、自分が二年兵で初年兵を命令にしたがえていたその癖で弟と一緒に却つてうるさいようだ

つたのだそうです。それでも、お母さんの舵とりよろしく、今日では互に扶けあうが、やはり兄弟は面白いものね。兄さんの方が全責任を負う（雇人対手のように）気にならず、隆がこう云つたからなど云い、ごたつくこともある由。でもいいのですよ、結局は。

あなたは何日頃こつち宛の手紙を下すつたかしら。お目にかかつたのは三月の十五日でしたが。――

私は二階の、裏山の見える方の窓の下に机をおき、本をよんだりこうして手紙をかいたり。きのうあたりから一日に三四時間ここで暮します。私は四日にお父さんのために臥ていて外が見えるよう、茶の間の障子を作りなおしたのが出来て来るから、それ

を見たら五日頃かえることになりましょう。私は令名サクサクな東京の奥さんなのですが、仕事をエイヤツとするにはやはり東京がよろしい。そして、もしお父さんの工合がよかつたら夏、虹ヶ浜でお暮しになるようにしてもよいと考えて居ります。御機嫌はいいことと思つて別に伺いませんでした。きのうあたりから又寒い。猫の仔が五四います。では又

四月二日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県島田より（封書）〕

四月二日。晴　島田からの第三信

待ちかねるようであつたお手紙がやつときました。あなたは三

月十八日に書いていて下すつたのね。それが着いたのは今朝です。

このお手紙に一つ一つ答えて参りましよう。お父さんの御容態についてはこれまでの手紙で書いた通りです。今後の御発病の原因は、危険なことであつたが、岩本氏（東京の）が結婚してはじめて見え、お酒が出て、お父さん、こつそりそれをやりになつたのですつて。夕方、若い連中がかえつて来て、それとは知らずお風呂へ入れ申したから、ショックの起るすべての条件は完備してしまつたわけでした。この位でお止りになつたのはふしぎな位。御様子は段々私が来てから一週間であるが、その間にも気付かぬ位ずつ語彙も殖えて来られ、長い文句を仰云るようになります。しかし、うとうとしていらっしゃるときのイビキは病的です。

から決して安心ではない。実に平安に、ソツとして保たなければならぬでしよう。私が来たことは大変大変御満足で、お母さんが「もう思いのこすことはありますまい、顕治に会うたも一つことじやから、のうお父さん」と仰云ると、首をうなずけて、「ない」と仰云る。そんな状態。お言葉は子供の片言です。障子を直したことはこの前の手紙で書きました。この位いるとほんとに家のものになれて私もうれしい。

今も、あなたの手紙ふところを入れて、お母さんと背戸の鶏小屋のところ（十羽いる。七つ八つ九つと卵を生みます）に日向ぼっこしていろいろ台所を直すことや、とりこわした物置を又建てるごとやあれやこれやを話しました。あなたは蔵つづきの物置を御存

じでしよう？あれをこの間とりこわした由。古くなつてこけか  
かつたから。今度はその古材木で九尺に三間ほどのものを建てよ  
うというのです。

負債のことは、講の片がついて、只今はもう何もタンポに入つ  
ているものなし。この決算のことについては三年かかっているそ  
うです。飛田の山崎氏が保証人であつたのが、山崎氏もああいう  
事情で東京へ出てしまわれたので、却つて簡単に運ぶようになり、  
お父さんの旧友で、兼重という七十余の老人が親方の肩入れで、  
二月七日に万事落着し、五十円ほどのお祝いの宴まですんだのだ  
そうです。お父さんの年金もこちらに戻っています。他にこまか  
いものが少々あるがそれは五百円ばかりで片がつき、十分ポチポ

チやつてゆく自信がおありの由です。だから、第一の手紙に申しあげたように、私達は達ちゃんの嫁とり条件を少しましにする方向へお手伝いしようとお母さんにお約束したわけでした。

三年前島田へ来たときは、ほんの五六日でした。お母さんをつれてあなたに会わせ申すのが眼目でしたから。その時野原へは夜一寸おじぎに行つたきり。だからきのうは昼からすっかり屋敷の中を見せていただき、私ははじめて真に荒廃したという家の有様に接し、いろいろ深く感じました。あなたは今の野原の家の建つたのを御存じないのですつて？ 離れのあつたところに便所が出来、そこからつづいて八畳六畳の両椽の座敷があり、鷄舎との間に昔からのザクロや大名竹を植えた小庭があり、元の表の間との

間の中庭には岩を入れ、池をつくり、そこに金魚がおよぎ、桜が小さい実をつけている。あなたが勉強なすつたという二階（台所の先の方から上る）は人が住まぬままになつて居り、となりの室のハタ台や糸をかけたままのワクに積年の塵があつた。それから鍵の手につづいている風呂の方、又昔油をしぼつた小舎の辺、更に奥へ二棟立ち並んでいる大鶏舎。いずれも、春の明るい陽をうけつつ雑草の間に建つてゐる。今あの家には叔父上夫妻、富美子（十二）で、私はこの小柄な美しくて堅い小娘とあつちこつち廻つて歩きながら一種の桜の園を感じました。あなたが、お母さんへのお手紙で、うちのこと知らすのはユリのためになることでもあるし云々と云つていらつしやる、そのことを思い出しつつあ

あなたの少年時代をも深くその感情に入つて感じつつ歩きました。あなたは林町の生活を御存じないから割によいことを多くお考えだけれど、それにしても、こういう時代の推移の姿を見るることは又私には刻みつけられるものがありました。そういう荒廃の中で、中庭の苔は美しく日光をすかして見える。そこに坐つて叔父さんは「駅」の父さんが楽しむということを知らないなど仰云つている。母さんがこの頃は金の話ほかせんようになつたなど。私は「そうではありませんよ。お母さんは生活の事情によつて、ゆとりが出来ればなかなか趣のわかる方ですよ」など喋る。あなたのことも。写真を見たりして。然し、野原は断然整理しなければ駄目です。こちらは島田のように単純にゆかず、（負債について島

田の母上も御存じなし、私も何だか伺えない）マアボチボチ片づけていらっしゃるほかないでしよう。Tさんはあなたの御心付をありがとうございますということです。そして自分でもこの頃は段々考えて着実にやる方針らしい。やはり子供の時からの環境で、体を労して稼ぐことは思い得ないのですね。何か「まとまつた金」ということが念頭についてしまっている。けれども、これとても、もうこの道でゆくしかないでしよう。

ジイドは、あなたの御覧のように私も見て居ます。この二月の評論では、ジイドが自分の抽象的な誠実性の故に誤られて現実を見る力を失っている。そういう作家の矛盾の点をとりあげていたのです。作家が、自分の存在の客観的な意義を理解しない、理解

する力をもたぬことは実に恐しい誤りを引起すものです。ジイドにしろ。だから、あなたが私の客観的理解力、進退等についていろいろ注意して下さることの価値は十分わかるつもりです。断乎とした忠言者のないこと。そしてその忠言には常に正当な私の仕事に対する努力の評価がふくまれ、更によりよいものを求めてなされるものである、そういうものが乏しいことは、たしかに私の可哀想と云えど云えることです。谷川などはまだまといの方よ。

私たちの作家としての存在そのものが、現在にあつては抗議的存  
在です。作家として粘ること自体がいかがわしい文学の潮流に対  
してのプロテストであり、今日もし私たちが阿諛的<sup>あいゆ</sup>な賞讃など得  
られるとしたら、それこそ！ それこそ！ 謂わば、もし賞めら

れたら、それこそ目玉をくりむいて、賞めた人と賞められた点とを見きわめなればならない。そういう状態です。今日賞讃の性質は、従前のいつの時期より恐ろしい毒素をふくんで居るのです。私は賞められないことには、既に馴れています。賞められたくなんかないが、私たちが褒められないことの意義と、その健全性を、ヨシヨシと云つて欲しい。實に、實に。抽象的に云つてはおわからにならないかもしだいが。でもわかるでしよう？

今日作家としてまともあるには、單なる自分の才能の自負とか閱歴とか、何の足しにもならず。却つて才能云々はその人の道をいつしかあらぬ方へ導く百パーセントの危険をもつてゐる。私の人生派的傾向が、思わぬ力で今日の波瀾の間に私を落付かせて

いるのです。この頃の室生、小林、林、河上、佐藤春夫、その他を作家というのであれば、私や稻公は作家の埒から夙にはずれているようなものです。或意味で、今日は文壇が自解しつつあるばかりでなく従来の概念での文学が揺れている。逆な力で優位性の問題が出ていますからね。

私はここで活々として暮して、台所を手つだつたり、風呂燃きしたり、全くわが家と暮しています。私はこつちへ来て、非常にこれまでの話と種類の違つた稼ぎのいろいろの話をきいて、どうも思わぬ収穫を得つつあるらしい。この次の分はこちらで拝見出来るかしら。お大切に。花を入れました。

四月五日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県島田より（徳山・幸町通りの写真の絵はがき）〕

四月五日。ひどい風ですが、野原の叔母さん、富美ちゃん、多賀子、こちらはお母さんと私という同勢で徳山公園のお花見にゆき、かたがた二番町の岩本さんと井村さんのお宅により、私はお母さんの後からよろしくと申して来ました。徳山中学校の屋根が見えました。徳山銀座で私がころびました。徳山駅は目下改造中で大ゴタゴタです。きょうは日がいいと見えてお嫁さん二組に会いました。

四月五日　〔市ヶ谷刑務所の顯治宛　山口県島田より（封書）〕

四月五日曇天、島田からの第四信。

こちらへ来てから十日経ち、家にもおちつき、いろいろこれまでの手紙で書いてあげ落したことと思い浮べます。今父上は眠つていらっしゃる。この頃はお母さん午後ほんの一寸体を横になさいます。夜、ゆうべ三度もお起きになりました。夜の世話が母さんには一番健康的にもこたえるのですが、どうもお后さんではなくてはお父さんのお気がすまない。あなたはきっと、こんなに気の折れて「お后ゴーここへ来キ」と炬燵こたつに自分のそばにおきたがつていらっしゃるお父さんを想像お出来にならないかもしませんね。お

や、下でガタガタいつている。きっとお父さんの御用便ですよ。

(中止) 何て重いお父さん! しんが非常に御丈夫なのね。一日  
おき二日おきに自然便がおりになります。木の腰かけ便器がで  
きていて、そこへ、かけ声をかけて動かし申すのですが、女三人  
ではほんとにやつと、やつと。

この間、宮島へ行つたとき夕方からあすこの岩惣いわそうという家の、

川の中にある離れに休んでお母さんといろいろ話しました。そし  
て、達ちゃんの結婚式のとき、ハイこれは顕治の嫁でございます  
というのもおかしいから、こんどかえり間際にでも、一寸ものを  
持つて組合「自注会」と近所にお母さんがつれて挨拶をして下さ  
ることになりました。三十一日に急にタオルを三本一箱づめにし

たものを東京へ注文したところ（十七軒分）。私は「ここの中の」になりました。これはいろいろ面白いの。きのう徳山にいられる甥（銀行員）が娘さんのお嫁のことで見え、私が初めて紹介された。前かけをかけていたら、お母さんそれをおとらせになつて、髪をかきつけてきた私を一寸しらべるようみて、そしてお引合せになる。私がお母さんのわきでお茶をいれたり何かする。それを、お父さんまで至極満足そうにして眺めていらつしやる。こういうときの私の心持、おわかりになるでしょう？もし貴方がわきにいらしたらどんな顔をなさるだろうと、あなたの独特な一種の表情を思い浮べ、微笑も禁じ得ず。但しこれはひとりになつてのとき。

私はこっちの地方と東北の田舎とを比べ、事毎におどろきます  
 経済的な点で。みんな女のひとなど都会風の装<sup>なり</sup>。一寸出かけるにもよいなりをして、私なんか質素です。そういうこともおどろきます。中学生は在郷軍人の服と同じ色の服、キショウだけちがう。女学生は大抵東京と同じセイラアです。野原にゆくとき虹ヶ浜にまわりました。春陽駘蕩<sup>しゅんようたいとう</sup>たりという景色で、あの家「自注12」には人が住んでいました。下松<sup>くだまつ</sup>には日本石油、その他工場が近頃の景気で活動して居り、江の浦のドックにはウラジオからも船が入ります。その職工さんたちの住居払底で、虹ヶ浜の小さい家はこの頃よくふさがっているのだそうです。島田の高山（呉服屋の隣り）は石油とギヤソリン専売権をもつて居り、うちちは多

くそこの仕事をする模様です。今度ガソリン一ガロンにつき五銭  
価上り、一カン二十五銭高。うちの車は一日に一カン位入用の由  
です。運賃を今までは引合わないという話がでています。う  
ちの車庫は、店のとなりの方。もと製材のあつたところを車庫に  
して、となりを木炭倉にしてある。きのうその辺をみていたら、  
店の前で近所の女人たちがお母さんと私をつかまえ、かどぐち  
社交がはじまつて、くすぐつたかった。ここは全く小さい町氣質  
ですね。言葉にしろ。河村さんの娘が高森の写真屋に嫁かたづいたの  
でその写真やに六日に来て貰つて、ここの一族、野原の皆が写真  
をとります。そしたらお目にかけましようね。

汽車の音は賑やかなものと思つていたら、この辺は小駅である

から一種寂しい心持を与える。汽笛が山々に響する。<sup>こだま</sup>ギギー・ゴトン貨車の音など特に。少年のあなたはその響をどんな心持で起ききになつたろうと思います。きりなしだからこれでおやめ。

〔原稿用紙に書いてある手紙の欄外に〕

ここに暮していると小説的な風に感情が押される。

こつちの風景は明媚<sup>めいび</sup>であるけれども、景色そのものが自身で飽和している。そこから或るつまらなさ。北方の荒涼として情熱的なところがない。それでいてこの辺は乾いている。

〔自注11〕組合——隣組のような町内の組合。

〔自注12〕あの家——顕治が学生時代夏をすぐした家。

四月十日夕 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 山口県島田より（封書）」

四月十日 午後 暖い晴天。島田からの一番終りの手紙（第五）

私は五日頃かえるように云つていたからもうこちらへは手紙を下さらないのかもしね。店で、お母さんがあなたに上げるとおっしゃる肌襦袢を縫つていると、「ユービン」と云つて河村さんへ自転車にのつた若者が何か入れてゆくのが見えました。河村さんに郵便が来てこつちに来ないのは大変不思議に思えた。そして、又縫っていたら河村さんの細君がキビの餅をもつて来てくれ、

達・隆はそれを頬ばつて仕事に出てゆきました。

この河村さんの娘が結婚している写真屋さんに来て貰つて、二三日後一家全員で写真をとり、大きわぎでした。あなたにお目にかかるために。七日に、背戸を見晴すガラス戸が出来上り、大満足です。二尺三寸の一枚ガラスをはめたから雨の日も外が床の中から見えます。きのうは、金物屋のおくさんが字を書いて呉れということでした。夜は、おかあさんが、私をつれ、三越から届けさせたタオル三枚入りの小箱をもつて、近所にあいさつにまわりました。「よいお日和<sup>ひより</sup>でござります。あの、これが顕治の嫁でござります、どうかよろしく。日頃御厄介になつちりますから今度見舞いに参りましたについて、一寸お物申したいと云つて居り

ますから」云々。そうすると、私が「どうぞよろしく」とおじぎするの、お母さん大安心の御様子でお店の敷居を跨ぎつつ「サア、こうしておけばもうおおっぴらにお歩きさんし」

おじぎをするとき私は大変お嫁のような気が致しました。

きょうは蓬つみに島田川のせまい川辺へ行きました。橋（フミ切りのところ）で達ちゃん達がそのときはトラックを洗つていました。その道で荒神さんの高いところにものぼりました。その石の段のところに野生のわすれな草が咲いて居た。勿忘草など通俗めいでいるけれどもああいうところであなたは子供の時お遊びになつたのでしょうか？ 何だかそれこれ思つたら子供らしい愛らしさがあつて、その花をつまみました。今押してあるから出来た

ら又お目にかけましよう。島田川の白董しろすみれも。皆、実に自然主義文学以前の、日本的口マンティシズムの素材で面白くて仕方がない。藤村の詩など考え合わせると、日本のその時代の文学の地方性＝フランス・ロマンティシズムの都会性に対する＝が感じられます。私は十二日の朝ここを立ちます。来るのはよいがかえすのはいやだとしきりにお母さんがおつしやり私もその心持です。

いろいろ、お味噌だの、かきもちだの草餅ういろうだの外郎ういろうだの小さいすりこぎだの頂いてかえるの。私を可愛がつてくれた祖母が田舎から私にくれたものを思い出して、私は大層うれしがつて居る次第です。

お父さんは腎臓に障害が起つて居ります。やはり順々にそういう

う新陳代謝には故障が起るのですね。この手紙がここでかく手紙のおしまい。私が、こんな島田川の手紙をかくなんて、なかなかいいわね。では又。お目にかかる方が早いのだから、そのとき他のことはいろいろと。

「欄外に」この桜は室積の桜。潮風に匂う桜は大変こら辺のより豊かに美しいと思いました。

四月十一日 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 山口県島田より（はがき）」

四月十一日。昨夕七時頃野原から電話で、叔父上急に右が痺れ

て口が利けなくおなりになつた由。達治さん多賀子私うちのトラ  
ックにのつてゆきました。既に昏睡こんすいです。瞳孔反応なし。今朝  
十時富雄さん帰り。三時（午後）克子大阪より。私は明日の出発  
をのばして御様子を見、且お世話をいたします。<sup>かつ</sup>血圧二百二十。  
この前の発病は百八十であつたとのことです。第一信

四月十一日 「市ヶ谷刑務所の顯治宛 山口県島田より（はが  
き）」

野原伯父上今度の原因は、日頃やはりお酒を相当あがつていた  
ところへ、昨日は好天氣だったので、ひなたで植木いじりをして

いらっしゃり、夕方大変いい心持で、風呂に入ろうなどいつて居られたところでした由です。「おせん、右へ来たぞよ。おれは奥でよこになるから駅へ電話かけえ」とおっしゃつたきりになつた。あなたのお手紙のこと改めて申上げたら、もうこれから絶対やめるといつていらしたというのに。

四月十三日　「市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県島田より（封書  
）」

四月十三日　島田。晴天、暖し。

野原伯父上の御急逝には実におどろき入りました。さぞびつく

りなさり御残念でしたろう。前後の御様子をかきます。

この前の手紙で書いたように、私が着いた日、光井からお出かけになりました。いろいろの話をし、愉快そうに夕刻までいておかえりになりました。それから三四日して、私が午後から伺い、おそいお昼をメバルで御馳走になり、お母さんのお云いつけで、お墓詣りをすると云つたら伯父さんも一緒に出られました。村会議員の選挙などの話があつてひとが来たりし、夕方私がおいとまする迄、やはり面白そうにお話しでした。「自分はいろいろ悲観するようなときは百合子さんの笑い顔を思い出して元気を出す」そんなことを云つていらしめた。家の整理についてのお話も出ました。土地六百坪一括しては買い手がつきにくいから区画して手ばなしした

いとか、鶏舎はよそへほぐして売るとか。

そのときも、私が着いた日も、伯父さんは私の前ではお酒召上らないが、やつぱり上つているらしい様子なので、よくよくそのことを申上げたら、タバコはやめにくいが酒はなくとも平氣と云つていらしつた。あなたのお手紙にあつたことを私は自分の出発の時刻をお知らせするハガキにわざわざ改めて書いて上げました。

九日の夜、私は十二日ののぼ上りの寝台券を買つた。十日の午後七時頃、夕飯をたべようとしていたら、野原から電話。伯父さん口が利けんようになつたから、多賀子をかえしてくれ云々。氷と氷枕を買つて戻れ。

達治さんが丁度いて、私は心配だから一寸様子を見て来て注意

することがあればして上げたいと、トラックで三人でかけました。富美子をたつた一人の対手で伯母さんはあわてていらっしやる。中庭を隔てた日頃のお寝間に行つて見ると、一目で昏睡であることが分りました。やがて医者が来て、瀉血しゃけつを五勺ほどし、尿をとり、血圧を低めるための注射をしました。そして小一時間の後かえつたら、激しいケイレンと逆しゃっくり吐しゃくが起きました。その時からずつとお顔の様子がわるくなつた。私は富雄を呼ぶこと克子を呼ぶこと等一時頃までいろいろお世話しましたが、どうも御容態が思ひたくないるので、次の日の朝、貴方に電報した次第です。十日の日は暖かつた。伯父さんは上機嫌でひなたで竹の鉢植をこしらえるためにお働きになつた。そして、夕方珍らしく飯がうまい

と、五杯もあがり、あと、よそから来た餅を二つあがつた由。そして、そろそろ湯に入ろうかというとき、急に右がしげり出し、こつちへ電話をかけるよう指図をして自分で床へお入りになつた。富美子が枕元についていたら「おや、目が見えんようになつた」と仰云つた由。それ限りでした。

翌十一日は母上がお見舞にゆかれ、私が家でお父さんの守もりをしていた。午後三時すぎ母上おかえり。やはり時間の問題かと思うとのことでした。医者も今明日が危期という。お父さんは丁度九日位に血尿があつて、それが鎮静していらつしやるが、これらのことで興奮なさり、食欲不振でした。カンシヤクも起つた。それやこれやを話して、私は本をよみながら裏で風呂を焚いていたら、

様子がわるいからすぐ来てくれという電話です。母上、今おかえりになつたばかり。すぐ達・隆がトラックでゆきましたら隆がとつてかえして来て、もうおなくなりになつたとの報知です。呆然としました。それから母上、私、隆と野原へ出かけました。出かけようとしたら、父上、母さんを呼び止め、「俺がゆかれんから二人分してやつてくれ」とおつしやつたそうです。隆治さんは初めて近親の死に会つて非常にショックをうけました。激しく泣いた、私は、涙が胸の内側に流れるようで。（もつと複雑な感じ。時代的にも人生的にも様々の思いの輻湊した）

富雄さんは十一日の朝、克子は御臨終の直前にかえりました。講中の人々が来ている。あわただしい人の出入り。母上と私とは

二時すぎまでお通夜をしてかえりました。私は私たちにとつて一方ならぬ御縁の方であるからずつとお通夜したいと思つたけれども、お母さんが私の盲腸がわるいのでお許し出せんでした。十一日に隆に託してお見舞を十円。御香典には貴方のお名前で二十円。

私が来ていたうちに全く急にこういうことになつたことを、皆と单なる偶然ではないように話し合つていました。百合子はん会うたのは顕ちゃんに会つたもホンついじやから、因縁いんねんじやのう、しきりに伯母さんも云つていられます。伯父上としては御苦痛なく、あの家でおしまいになり、あの家から葬儀の出たことはマアよろしかつた、お母さんのそういうお言葉には私も同感です。

御年五十四歳、母上より一つお若いのです。

十二日のお葬式には最後のお寺詣りまでずっとお伴しました。

今十三日はお骨上げです。うちからは達ちゃんが行つて居ります。野原の家、屋敷は只今は兼重萬次郎という人の手に入つていてことになつています。しかしこの人はお母さんによく御承知の人物で、自身の権利として二千円ばかりのものを回収すれば、あとは若し余分が出れば遺族に上げると申して居り、それは信用し得るそうです。

富雄さんは広島へ帰るのをいそいでいるが、伯母さんや富美子はこつちの整理つき次第広島にうつるでしょう。克子は大阪の、こつちのお母さんの従弟とかの家にここ三四年行つて働いて居り、

又そこにかえりそこから結婚の心配もして貰う方針です。多賀子は未定ですがここに手つだつてやはり身の振方をつけていただく方がよいかと考えます。お母さんもそのお考えで、富美子は出来るから師範に入れるプランであつた。それはその方がよい。富雄の生活は確実性がないから。未だ申しませんが、伯父さんの御厚情を考えて、私たちは富美子の学資を何とか助けてやりたいと思つて居ります。たとえ少々でも。貴方も御賛成でしよう。十四日があつちの若い人々が来ます。又いろいろ話しましよう。そして、私は十五日に立ちたいと思つて居ります。

父上はずつと平静でいらつしやるから御安心下さい。尿も血がなくなり量も殖えましたから。

四月十四日　「市ヶ谷刑務所の顕治宛　山口県島田より（封書）」

四月十三日　島田。

さつき書いた手紙を出して貰い、寝台券をとつて貰いました。  
十五日に立つことに決定しました。

昨夕は御葬式がすんでから（こつちの家でそれは負担なさいました）克子、多賀子、達治、私、座敷でいろいろ話した。玄関から台所の方はずつと襖をとり払つて大広間とされて居り、近所の人々が酒もりをしている。その声が中庭越しにきこえる。裏へは

急造りのカマドが二つ出来ていて、湯殿の前のところへ台を出し、附近の子供が二十人近く石ころ、レンガ、薪をこしかけにして御飯をよばれている。おつかさんたちが手伝いに来ているからでしょう。

話しているところへ伯母さんも来られ、私がつくという話がわかつたら、伯父さん一方ならないおよろこびで、島田の二階の方はさむいが、炭とりがないから一つこれをかしてやろう。花も好きだが、あつちにはないからこれを、と、わざわざ炭とりと花瓶とを運んで下さったのだそうです。私はそうとは知らなかつたが、この炭とりには重宝して、本当に伯父さんがおつしやつた通り、そこから炭をついで一寸した書きものをしたりいたしました。花

瓶も、お母さんがただ野原からくりやりましたとおっしゃつたが、私を歓迎のためとは知りませんでした。どこまでも伯父さまのやりかたですね。

それからあつちへ遊びに行つたとき、私はあなたがおっしゃつたことをもつたえ実際的の話を伺いたいと思つたが、簡単におつしやり、樂観的におっしゃるぎりで、それ以上つっこめませんでした。こつちのお母さんのお話で、講以外に負債がおありになり、あの土地を処分するしかないことは分つて居りましたが。

野原は今の交通関係では昔とちがつて全くの閑地ですね。あすこは隠居地です。

お葬式は御承知のとおりこつちの真宗（西本願寺なむあみだぶ

つ）の式で万事やられました。様々の習慣がちがうから、私はお母さんのあとについて、白いカツギをかぶつて、白と緑の造花をもつてお墓へおともしました。達ちゃんは富ちゃんが組んでいろいろのことをしました。隆ちゃんが真先に道あけあんどうというものをもち、母上、私、女の子たち、僧侶、富ちゃん、お棺、達ちゃん、それから伴の人という行列で、豌豆えんどうが花咲き、夏みかんがみのり、れんげの花の咲いている暑いような陽の道をお墓へとねつてゆきました。そこで式があり御焼香があり、それから火葬場へおゆきになり、私たちはかえったわけでした。

又うちで読経、焼香、御膳がでて、親族のものだけお寺二つへまいりました。町の中のと、山の高いところのと。その山のお寺

には白と紅の芍薬しゃくやくが花盛りで、裏を降りてくると松林の匂いがしました。海はすっかりかすんでいた。そこで紫のスミレを二つつみました。今にお目にかけましよう。伯父さんのような方にふさわしい晴れて花のあちこちに咲いた日でした。

四月二十日　〔市ヶ谷刑務所の顯治宛　豊島区目白三ノ三五七

○より（はがき）〕

四月二十日夜。きょうの午後慶應大学病院へ行つて、盲腸の手術のことについて、以前から私の体を診て貰つている医者に相談したところ、切開することは中止するようとのことで、手術は

おやめです。目下盲腸は癒着<sup>ゆちやく</sup>しているからつれたり何か無理が  
ゆくと工合わるい程度であるのに、余り丈夫でないのに切るのは  
というわけです。御心配なさつているといけないから、とりあえ  
ず。

四月二十一日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

四月二十一日、荒っぽい風の日、こういう風は大きらい。

むしむしとして、埃いっぱい。落付かぬ天気ですね。きのう  
夜ハガキを書いた通り、私の盲腸は手術しないことになりました。  
自分では弱い体という風に考えずにいるのに、もし万一という条

件がつくとは何だか可笑しいようです。盲腸もこう癒着して居れば、急に腹膜をおこすこともそうないだろうということだから、マアいいにしておきます。今、ベラ・ドンナという鎮痛のための薬を少しのんで居ります。あなたの盲腸はずつと納つて居りますか？ 私はどうしても貴方の生きていらっしゃるうちは生きたいから、荒療治はおやめです。島田で苦しいのを我慢しながら、お父さんの診察に来る裏の何とかいう髭を眺めていたら、心細くなつて、一そ切つて置こうと思つたのでしたが。

そういうえば、お目にかかるとき、厚着していらっしゃるようになされたのですが、ちがうかしら。今年、もしお体の事情がすこしましであつたら、そろそろ皮膚の抵抗力をつよめるようにしま

しうね。

島田が、私の故郷のような感じになつて、ときどきチサの和えものだの、新鮮な魚だのを思い出します。島田川の岸の景色も心にのこつてゐる。お父さんは、私がのませると薬をあがり、ほかの人だと、ぶつてこぼしてしまつたりなさる。安着の電報に添えてチチウエ、オクスリヲヨクメシアガレどうつたら、この頃お母さんや達ちやんたち、閉口するとそれを護符のようにもち出す由。あなたからも、この薬をのむことと、お小便をとるための袋をおつけになることの必要をよく云つてあげて下さい。今日、この袋はお送りするのですが、おむつではどうしても不潔で細菌が犯し、膀胱カタルを猶悪化させますから。きのう慶應でいろいろ訊い

て来たことの一つです。すっかり腰が立たなくおなりになつたことが膀胱の活動をも鈍らせるのだそうです 麻痺によつて。お父さんは、そういうものを五月蠅うるさがりになるのです。

お父さんは何という直情径行の、そして一面弱い方でしよう！ 何と弱い方でしよう！ 貴方が少年時代から恐らく感じていら

しつたろうと思う種々の感情の明暗が、今度三週間暮してかなり推察されました。達ちゃんと隆ちゃんとでは情感の動きかたのタイプが違います。達ちゃんは常識の平面を横に動く。隆ちゃんの天性は縦たての方です。生活が体をつかつて、かえれば食べて眠くなる生活だから素朴な表現をもつてゐるが。隆ちゃんはどこか貴方に似て來ている。

島田は確に昔より楽になつて来て居ります。そのためには実に尽大な努力が払われ、やや小康を得て、すこしは家の気分にくつろぎが出ている。父上も寧ろ今は仕合せな病人でいらっしゃいます。この半面には、この調子を保つて行こうと欲する、極めて自然な要求が心のどこかにあつて、それは、結果としては万事事なかれ風なものになつていて、人間の心持というのは何と微妙でしょう。休息が今肉体的にも入用なのであるから、或意味で神経を鎮める上にも、自然の作用なのではあろうけれども。——私のしてあげる一寸したことでも実によろこんで下さる。すまないようく悦んで下さる。よろこぶのを待ちかねていたようによろこんで下さる。そして、そんなによろこばれながら、そのよろこびは、

全く日常性の範囲にだけガン強に限られていることを強く強く感じるのは何という悲しいよろこびでしょう。私はこれまでこんな感情は知らなかつた。理屈に合わぬことは合理的なものの考え方たというところから話してやつて來た、自分の親などにはずっとそうしてやつて來た。

いろいろの点から、實にためになりました。本当に行つてよかつた。これまでの私の生活の中にはなかつたものが見られたり、接觸出来たり。

一つ傑作のエピソードを。

或日、タバコ屋の方で人の声がする。前掛をかけた丸いユリが出てゆく。「バツト一つ下さい」それが爺さんで、ユリの顔を見

てはにかんだようにする。「ハイ、どうもありがとうございます、二銭のおつり」爺さんやつこらと腰をかけ、バットをぬいたがマツチをもつていない。「マツチがいりますね」わきの棚を見ると、マツチが沢山、ボール箱に入っている。「ハイマツチ」「いくらです」見ると一銭とある。ユリ何心なく「一銭だが、マアいいその位のもんだからつけときましょう」「ハア、それはどうもありがとうございます、爺さん満足してかえる。ユリ、のこのこ中の間の方へ来かかりながら、オヤ、アラ、と気がついて、あああのマツチは売りものだつたんだ、一銭だつてとらなければいけなかつたんだ、と気がついたときは、もうおそい。バット一ヶは利益八厘でしよう、一銭のマツチをつけては二厘損したわけになる。ユリ、ひとりで襖の

かげで口をあいて笑つたが、お父さんにも母さんにも云う勇気なし。以上、傑作お嫁の商売往来、秘密の巻一巻の終り。

一巻の終りと云えば、島田へ野天のシネマが来て、二人と多賀子と野原から来ていた富美子をつれて宮本武蔵を見にゆきました。島田では『大阪朝日』をとつています。そこに学芸欄というものは殆どないの。武蔵や連載小説が、関心の中心です。地方文化ということについて非常に考えた、又私はあつちで作家ではなく嫁のみであるという在りようについても。やはり文化のことを考えました。實にいろいろ面白い。活きた圧力です。では又。どうか風邪をお大切に。あつちから廻送されるお手紙が大変に待ちどおしく思われます。

四月二十七日 「市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（クロード  
・モネの絵はがき）」

二日ばかり前細かい雨の降つた日、新緑の濡れている色が美しくてうちに居られなくなりずつと歩いて土管の沢山ころがつているところの方を散歩しました。カラタチの花が高いところに白く咲いていた。小さい家が樹のかげにあつた。入れた袴は鶴さんとお揃いです。ネマキは母上から。襦袢は島田で私がそうやつているのもよく似合うと云われつつ縫つたもの。

四月二十九日午後 〔市ヶ谷刑務所の顕治宛 目白より（封書  
）〕

〔欄外に〕今日は休日で隣家に子供と遊ぶ父親の声がする。

島田のをぬかして第何信になるかしら。教えて下さいまし。

『文芸』に山本有三論のようなものを書くために、この間うちから殆ど全作品をよんديて、昨夜それが終り、今日から書こうかと思つていたがどうもつまらない。有三の正義感というものの根源を明らかにすることが私の眼目なのだが、その根源がまことに云わば日常的で。――

四月十七日にあなたが島田宛に下すつたお手紙うれしく、あな

たがよろこんで下さることがうれしく、くりかえしくりかえし拝見しました。私に与えられたヨシヨシについても。ありがとうございます。私は島田からは多分第五信ぐらいしか書いていないと思います。殆どもう皆御覧になつたわけね。その後お母さんのところからは頻りにお手紙下さいます。大阪からかえつて来ている克子さんがお嫁の話があるのでこちらにいて島田の方をお手伝いしている由。富雄さんは広島へ戻つて居り、土地の処分は、比較的有利に行きそうな由。

お父さんも、野原のことでは突然であつたし、大分ショックをおうけになりましたが、それが鎮り、この頃は熱もおありにならないそうで、これは何よりです。熱がつづくと疲労するから。そ

の点で私はひそかに心を痛めていたのだつたから。送つてあげたゴムの袋は大していやがらずにつけていらつしやいますつて。あなたもよくお使いになるようおすすめ下さい。お母さんが大きな洗濯物のために川にゆき、まして梅雨にでもなれば本当に困りなのです。でもよかつたわ、お気にななつて。

貴方は、蔵の前の漬物小舎をこわした話、前の手紙で書いたこと覚えていらっしゃるでしょう。あれが新しく建つたそうです。台所口から庭へ出たところにイチハツの花があるのを覚えていらつしやるかしら。その花が白く咲いたそうです。その花や、大きな茂みになつている赤いバラの花が、今年は広々としたガラス障子越しに見えるわけですが、その障子にガラスをはめた人は、ほ

かならぬあの縁側のところから、往年泥棒と間違えられて貴方に  
おつかれられた人です。何という罪のない可笑しさでしよう。何  
と思ってあすこのガラス入れたかしらと思つて。その夕方（何年  
か前の）中気になつたお婆さんがあつたでしよう？ そのお嫁さ  
んが今病氣全快して店にいて、帰りに柳井まで一緒に話しながら  
きました。

顯さん顯さんと云つて皆が私に話します。（タオルもつてお辞  
儀して後は）そして、私は東京のお后ゴーさんよ。いつか達ちゃんが  
お父さんに私をさして「あれだれで」ときいたら、お父さん何と  
も云えない笑顔で、「ユリちゃん」と仰云つた。でも私をお呼び  
になるときは「東京の、ちょっと来て」です。「お父さん、面倒

だからお后のかわりにおユートおつしやいましよ」 そう云つても  
今度はまだよ。いつかおユートおつしやるかしら。

寿江子が今度はすっかり留守番をしてくれました。昨夜鶴沼へ  
かえりました。一ヶ月以上ここにいたわけ。それから二日ばかり  
前に伊那からお久さん「自注13」という女中さんが来ました。い  
ろんな友達が心配してくれて。三十日一杯でこれまでいたのがか  
えります。おひささんに縁があること。眼鏡をかけ、うたをうた  
うのがすきな十九の娘です。女学校を出ている。稻子さん的心配  
です。

私の盲腸は切らないことに決定したので、野上さんが盲腸の余  
後のんだ薏苡仁湯ヨクイニンという漢方の薬をのみはじめました。きき

そうです。のみ難いもの。さし当たりの仕事としてその有三をかき、『改造』へ四五十枚の小説をかきます。今月は、それでも白揚社の本が出たので何とかやりくれましたから御心配ないように。本当に今度は六芸社の本にしろ思いがけない役に立ちました。待望の書として六芸社のはレビューされています。

『冬を越す薔』と今度のとの間には大きい成長が認められている。そのことも当然ではあるが、私としてはやつぱり少しばん安心してもいただきたいと思つて。

林町の連中には、私がかえつてからまだ会いません。あつちが国府津へ行つて居たので。太郎にお母さんが下さつた大きなコマをもつて近々出かけます。栄さんは「大根つ菜」<sup>ダイコ パア</sup>という子供を主

題した獨得の小説をかきました。これは面白い。稻ちゃんは地方新聞に長篇をかいています。これもよい修業です。M子は毎日よく働いて月給四十円になりました。うちで御飯をたべてている。

この頃、二階の北の小窓から見ると欅けやきの若葉が美しくて、美しい。新緑の美しさは花以上です。お体は大丈夫なのでしょう？

近いうち、活々とした初夏の模様の手拭とすがすがしいシャボンをさしあげます。それらのものはここで新緑をうつしている皮膚の上にも。

仕事をすましたらお目にかかりに行きます。

〔自注13〕お久さん——埋橋久子。信州の人、目白の家で三

年間位百合子とともに暮した。

五月六日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（外国風景の絵  
はがき）〕

五月六日。何というひどい風が吹いたことでしょう。きのう  
「山本有三氏の境地」三十九枚ばかり終り。本気で書いた。お体  
はいかがですか。私はこの二日ばかり前から一日二ケのリンゴを  
励行しはじめました。一日に二つリンゴをたべて二年経つと体が  
変る。それほどよい。私はそれをやる決心をしたのです。努力し  
て継続するつもりです。貴方もおやりになつてはどうかしら。

五月十六日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

五月十六日　日曜日　第十四信

きのうの朝九時頃目がさめて下へ来て長火鉢の前のテーブルへ  
来ている手紙を見て行つたら、ハトロン封筒があり。おとといの  
お話で少くとももう二三日は先と思つていたのでうれしく、何だ  
か案外早かつたように感じられたが、落付いて見れば、書かれた  
のは七日なのですものね。

あの日、お目にかかるつて外へ出たら雨になつていきました。そこ  
で私は傘と一緒に持つていた黒いフクサ包から別の下駄を出して、

草履をしまつて、玉子のことや何か云いつけて、珍しく戸塚へゆきました。二階の大掃除をやつて古雑誌が出た、面白いものが出てる。長椅子の上にのつかつていろいろ話し、御飯を食べ、それからフラフラ散歩して新宿へ出たら、丁度時間があつたので「裸の町」という文芸映画を2／3見て、高野へよつてかえりました。日本の映画も追々心理的なものを捕えて表現しようとしているところへ迄来ている。だが、まだまだ不十分。女の内的なものの表現が弱いのでこの作は大分弱くなっている。チャンバラでないものを作ろうとする努力に対してもこういう試みも支持されている訳です。文芸映画の陥る危険は散文的なものと映画的なものとの区分の不鮮明さですね。

タカノの店がすっかりひろがつて派手になりレビュー的セットになつてから私ははじめて——だから去年以来はじめて。美しい果物は万惣をも思い出させ野菜サラダの味なども思い出させました。

一昨日は、島田からかえつて一仕事マア終つたしお目にもかかつたし、いね公曰く「きょうはやつとホツとしたでしよう」きのうは何とあつかつたでしよう。土曜日で昼迄働いた若い女の人们ち数人遊びに来ているところに手塚さん市川苺いちごをもつて来てくれ、暫く皆と話し、運動ズボンを買うとか云つて新宿へ出てゆきました。戸塚の二人は別々に勉強部屋をもつていることをお話ししましたかしら。妹さん夫婦が転任になつて來たので近くに一軒もつ

てその二階に鶴さんがいます。御飯はこつちの家。細君の方は二階に大体ひとり仕事するようになつた。でも出入りで、やつぱり昼間はザワザワしているが。――

きょうは又斯うして霧雨で、しづかで、私にはいい日曜だが、体には全くよくない。どうか呉々お大切に。実はなどと、汗をとつていらしたところを歩いて来たりして。――夜はよくおやすみになりますか。おかゆは十日分。パン一日おきは本月中云いつけておきました。本も注文してお送りいたします。私の方は  
仁湯ヨクイニ  
ン湯という漢方の煎薬をのんで、徹夜廃止で、早いときは十一時頃床に入つて大いに自重して居ります。何となし少しずつましになつて来る感じです。この前の手紙に申しあげたように今来て

いるお久さんという十九歳の信州の娘は淡白快活で常識もあり大変気が合い、私はお安さん以来の落付きです。そして兄の感化もあるのか、さっぱりして、安より明るい。私はこの好条件を十分活用して仕事をよくし、体を直すつもりです。どうか御安心下さい。

島田の家の事情が却つて私たちについて物わかりよくしているとお手紙にあることは全く同感です。それは本當です。私は島田の家に深い情愛を感じて居ります。あそこには林町になど全くなかつた生活の空氣がある。

あなたが少年の時代から御自分の周囲に感じていらしつたものと、私の周囲にあるものとは、社会での場処がちがうとおり質が

ちがつて いる。あなたの 経験して いらつしやる ものの中には（家族的に）皆 察しの つく、そして その 条件では やむを得ないと理解され 得る 質の ものです。

私はあなたが周囲に 対しても つていらつしやる 思いやり 深さやさしさを 殆ど 驚く 程ですが、あなたには それが 可能な 根拠がある。虹ヶ浜へおつれしよう という 話も、かえる頃には 不可能らしいと わかりました。お后さまは 家をお離れになれないし、お父さんには お后さまは 不可欠である。そして 店も。やはり 活動の 圈外にいることは おいやなのです。動かし申すだけ 疲れる だろう というような ことで。—— 夏は 葦戸でも こしらえ、新しいきれいな 蚊帳かや でもあげようと思ひます。そして 秋また ゆきましよう。これは 親

愛な笑話ですがよくよく覚えていらして下さい。私が島田へゆくときあなたのお手紙で、ユリも暫く滞在したいと云つてゐる云々とお書きになつた、お母さん方の時間の標準で暫くと云いゆつくりと云うのは最少限一ヶ月なのよ。一ヶ月以上なのよ。私は笑い出したが何だか困つてしまつた。わるくて。早くかえらなければならぬと云うのが。長くいるように云つて下さるの、うれしい。でも島田で仕事することは不可能です。だから秋に又ユリもゆつくりということは何卒保留しておいて下さい。ほんとうにわるいから。がつかりさせ申すのは。——野原にはよつぽど前、長いお見舞をかきました。仏壇の話も添えて。

あなたがこの手紙で本旨だけと書いて下すつてること、私の

妙でこ理屈についてあなたが書いて下さるのは大変にいい。楽しみにして待つて居ります。私はあれを書いたときの心持で今日は居ないから。しかし、ああいう妙な押し出しをしたことの根底には、私のバカなむきがあつたのですよ、分つていらつしやるでしょう？

あのとき貴方は、ユリが作家としての生活、その名の中では幾分安易な気分もあるだろう二つに足をかけている生活云々と仰云つた、その言葉を、云われていらない言葉の内容にまで入らず、そこに出ている角度でだけ、しかも全身的にうけて、私はあの当時の不快な条件もあつたから、まるで一匹の山あらしのように苦しくなつてしまつたのでした。ああ、貴方が私にこういうことを云

い得るのだろうか。今日良心をもつて生きていようとする作家の努力を作家だから安易であるという風に概括出来るのだろうか。  
 億 安的でない作家が、そして私のような愛情で生きている女が二つのもの（態度）に足をかけて、ふりわけで生活してゆかれるなどと思うということはあり得るのだろうか。等々

今になると、私にも自分の心持の観かたの主觀的だつたところは分つて居ります。貴方が仰云ろうとしたことも分るわ。貴方にそれを云わした感情の本質も。私たちは、或ことを話し合うに一番適した場合＝心持に＝を選ぶことが出来ない、又表現を細かく行届かせて話すひまのないということのために、何という思いをしたことでしょうね。けれどもあのことは私にいろいろ教訓を与

えました。

文学の仕事の上で、実質的な評価と他のものとの関係は丁度シーソーです。そういう時代である。私はそういうものに對して乱さず生活を押してゆくのだが、貴方に向うと私はどうもナムアミダブツ宗のようね。時々お数珠におデコを撫でて貰つてい気持になりたがるところがあつた、アナ恐ろし。私の理屈がおくれていると仰云ることはよく分る、だが、私のような女でさえ、一番苦しいこと、一番我慢ならないと思う（主観的に）ことでムクレると、ああいう墨を吐くところ、（リクツのようなのは外の形だけよ）私は自分の日本婦人的事情を感じます。正体云々とお笑いになつたが、私のみの正体でない。大変そのことを感じます。お

手紙を楽しみにして待ちます。では又

五月二十四日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（ゴツホの  
絵の絵はがき）〕

五月二十四日、雨が降りますね、きょう、やつと合シャツやセルをお送りいたしました。おそくなつて御免なさい。『改造』の小説<sup>41</sup>マイは「猫車」という題。もう一ヶ月ばかり前のやはり雨の日、ぬれた青葉の美しさにひかれて歩きに出て雑司ヶ谷の土管などつんである辺を歩き木の下の小さい家を眺めたりしたことを書いた工ハガキ御覧になりましたか。こういう大きさのは手紙並な

のを知らなかつたから或は駄目だつたかしらと思ひます。キレイな絵だつたのに。――

五月二十九日　〔市ヶ谷刑務所の顕治宛　目白より（封書）〕

五月二十九日　小雨　第十五信

きのう、二十五枚ほど「マリア・バシュキルツエフの日記」について書き終つて、それを届けて、国男寿江と落合つて、市ヶ谷へ行つて夜具をとつて来ました。ひどくなりましたね。あなたの御病気との戦苦闘を何だか感じるようでした。この次は、ああいう厚ぼつたいのない方が却つていいのではないかしら、綿が

切れないで。いずれ又それは御相談いたしますが。

そちらはきっと当分いろいろ落付かないでしょうね。中川には  
はり出しが出て居りました。それでも何だかどんなところかしら  
という気がして居ります。今の予定では十日頃まで大変いそがし  
いからそれがすんで、そちらもお落付になつた頃——二十日頃お  
目にかかりに出るつもりです。この間は、おそらくつて差いれが  
出来ませんでしたから明後日ごろさし入れだけにでもゆくつもり  
です。もし都合がついたらお目にもかかりますが。——

お体はいかがですか。今年の梅雨は早い。私は徹夜廃止の励行  
で大分よいらしい様子です。薏苡仁ヨクイニンもききます。二日ばかり前  
お母様からお手紙で、お父上の御様子がましになつたお話しです。

何よりです。食事もお進みになる由。野原の家は整理までずつと住んでいらっしゃることになり、おせむさんの弟さんが同居なさる由。お葬式のときお目にかかるつているだらうけれどもよく分りません。

今日、私は少しポケンなの。くたびれていて。今月は仕事がつまつていて、きのうまでに百四〇枚ばかり、一つも口述なしで書いた。このうち相当勉強したものが百二十枚ばかり。マリアの日記は千五百頁あるのを二日でざつと目をとおし。――

それでも、これだけ仕事の出来るのは、私の毎日が珍しく順よく運ばれていことのしるし故、その点本当に安心していただけてうれしい。（そして、テツヤしないのですよ!!）

おひささんという娘はいい子です。自然ですなおで日常に必要なだけ頭もよい。徹夜しないでやるのがうれしくて。うれしくて。その代り、今月は戸塚へ二度、壺井さんへ一度、林町へ一寸一度、座談会一、映画（3）、音楽（1）という位です。音楽のいいのがききたくて。私はどうもラジオや蓄音器の電化音が耳につらい。どういうのでしよう。下手でも生なまを欲する。ゆうべは本当に生なまがききたかつた。ゆうべは珍しく非常に物語のあるしかも痛切な私たちの夢を見ました。その夢をそのまま書いたら、ひとはこしらえた物語というでしよう。本質が、その筋を貫いている。非常に美しい行為と涙とがあるのです。私の体を貫いたために、あなたは死んだようで死んでいないという風な。面白い。ああ、本当に

それが夢だということを、きいたら人は信じられないでしよう。私は滅多に夢を見ず、たまにこういう夢を見る。面白いわね。こまかい部分をきかせて上げたいと思います。では又。

六月二十日　〔豊島区西巣鴨一ノ三二七七巣鴨拘置所「自注」<sup>14</sup>〕の宮本顯治宛　目白より（封書）

六月十三日　日曜日　曇。第十六信

きょうは母の三年祭の日です。一九三四年の六月十三日は大変にカツと陽のてりつける暑い日で、父が迎えに来て杉並から胸に氷嚢を当てて順天堂に行つたら、十五分ばかりで母は亡くなつた。

あの日の暑さや光線や父の顔や、まざまざとして居ります。お祭りはきのうにくり上げてやりました。

ところで、あなたのお体はいかが？ お暮しはどんな工合ですか。この手紙はまだ出しません。でもどうも書きたい。又連作にしてお目にかけましょう。

私はこの一月頃から半年ばかりの間に随分沢山評論風な仕事をしました。その結果、自分の仕事というものについて一層いろいろの理解がふかまつて來た感じです。つまり、私は評論風な仕事における自分の特質というもののプラスとマイナスの点がはつきり分り、現在の自分として、どの位までのことが出来るかということも分つたのだと申せます。そして、まことに面白いことには、

この間の手紙でも一寸申したように、自分の評論が先へ先へと押してすすめてゆく線を、今は作家としての半面がついて行つている（両方一足ずつチャンポンに前進する）ことが分つた。こういう云いかたは私らしすぎるが——お分りになるでしよう？ 書いて行くということについても、何か一つ目がひらけたようなどころがある。普通、芸術家たちは書くと云い、私もこの永い年月書いて来ているのだが、書くということは存在させることであるというのを、感覚としてまで感じているのはこの頃です。それが文字によつて存在させられなければ、どんな作家の善意も努力も生活内容も存在として実在しないという事実は何とおそろしいことでしょう。書かれてはじめて、それが存在し、自分やひとに働き

かけて来るものとなる。在らしめること。そのためには碎心し  
なければならぬこと。何と面白いでしよう。この感じは評論の  
ような仕事で、私が最近経験した一定の段階までの成長で、却つ  
て小説とのちがいとして自覚されて来たものです。私はこの点が  
わかつて、何だか作家として底がもう一つ深くなつたようなよろ  
こばしさです。評論のようなものでは私は疑問をつらまえて最後  
まで手を放さずその矛盾や疑問の発生点をつきつめてゆくたちで  
す。そしてそれは、研究というか、語るというか、とにかく小説  
の在らしめてゆく感じとはちがうものであり、小説が何とそのよ  
うなものであるかを痛感させるのです。

評論風な勉強は、自然の結果私自身に向つても小説の水準の引

上げを課すのも面白い。私は当分小説にかかりきつて、在らしめる術を行います。これから私は事情のゆるす限り自然発生的にあれこれの仕事に手をかけず、一年の或期間小説をかき、その汽罐車のように評論をかくという風にやつてゆきたい。カマだけ一つで先へ行きすぎてしまうと一大事ですからね。大きい重い荷物をひっぱつてゆかなければならぬのだから。（こんな色の紙は珍しいでしよう？　たまには目に変つていいかと思つて。）寿江子は線路のむこう側に新築されたアパートに部屋をかりて鵠沼を引上げました。夏で家賃が上るから。うちで夕飯をたべさせます。

太郎はナカナカなものになりました。遊びに来て玄関をガラリとあけると「アツコおばチャン」とアーツコに獨得のアクセント

をつけて呼ぶ。アーツコは大きいの意味です。いろいろしゃべります。寿江子は糖尿の消耗から或はすこし呼吸器を犯されているかもしませんがまだ不明（但、寿江へのお手紙にこれを書いて下さらないように）今月のうちに調べると云っている。私は徹夜しないしどうか御安心下さい。今日は日曜でラジオその他が寧ろやかましい。

十五日 夕方。

六月五日、づけのお手紙がけきつきました。このお手紙で見ると、私が五月下旬に書いた手紙はまだ見ていらつしやらないのですね。お久さんが呉々も御親切にとよろこんで居ります。お久さんは三度たべます。私は二度だが。島田の方へは今日お母さんのお気に

入りのハブ茶と中村屋の柔かい甘納豆とをお送りいたします。ハブ茶は野原の方へも。中村屋のザクスカはこの頃ちつとも食べず。寿江子はきのうアパートへ荷物をもつて来て、さつき見に行つて来たところ。東と南が開いていて落付きます六畳で16円。夕飯をすましたら銀座の三越へカーテンを買ってやりにゆく。目下小説についてコネ中。可笑しいことにはこの三日ばかり前から一匹の猫がどこからか家へ来るようになりました。おとなしい灰色と白。夜は皆猫を大して好かないから閉めます。すると、朝私が茶の間に坐ると出て来て決してよそにゆかない。この猫は随分間抜けです。猫なんて好かない人にこんなになつくものでないのに、可笑しい奴！ 今これを書いている足のところに丸まっています。そ

してニヤーニヤオなんかと鳴けず、変な声でギューギュー鳴いている。

M子は近所のアパートへ四、半の部屋をかりて暮すことになりました。四十円の月給とりです。自分でとる金で自分の生活をやつて見ることが必要だから。

十六日の午後 曇。よそでピアノの音。仕事をこねている。大体まとまる。そして、気持がのつて来る。

二十日の夕方 六時。

今日は日曜日で、うちワルブルギスの夜ですよ。寿江、M子、その他の連中が集つて来ている。いよいよ仕事にとりかかる。昨日はそちらへ徳三さんの細君が初めてゆくので案内がてら様子を

知るためにゆきました。この手紙いつ頃御覧になれるのかしら。  
 暑くなりましたからお体を猶々御大事に。ひとつえ 単衣をお送りいたしま  
 す 手拭シャボンと。では又。

「自注14」巢鴨拘置所——一九三七年六月十一日、顕治は市  
 ケ谷刑務所未決から新築落成した巢鴨拘置所へ移転した。

六月三十日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

六月三十日　雨　第十七信

私たちは同じ区内に住んでいるのに、お手紙はやはり半月かか

つてくる。何と不思議のようなことでしょう。十六日づけのお手紙ありがとう。蒲団の綿が切れていた原因についてはまことに何とも申しようなし「自注15」。私は心からあなたの膝小僧を撫でてさしあげます。

十九日には徳さんの細君についてそちらへゆきました。そして一寸差し入れをしておいたが、あとはそちらでもうおやれになつているでしようか。合シヤツは去年のよ。昔のはもう使つて居りません。ギューギューというのは洗つてちぢんだのかしら。中野さんはあの字典を『中央公論』に書いた小説のお金を入れてくれたのです。鶴さんは大変まじめによい仕事をして居ります。あのひとは私が徹夜がいけないといろいろいうと、常識を笑つてい

たが、この頃私のいうことも本当と身にこたえて来ているらしい。熱は出して居ります。稻ちゃんずつと書いています。すらりとしてある人らしいもの。とにかく私は、この夫婦を実際に大切に思います。私にみになるような気付を云つてくれるひとは外にない。六芸社の本「自注<sup>16</sup>」などについて批評を書いた鶴さんの文章は、友愛の珠玉です。

私は二十日頃から仕事をはじめ、小説だけにかかつてずつとやっている。毎日いくらかずつ書いて。沢山の時間を考えて。本質的に勉強しながら、自分を発育させつつ学びつつ書いて居ります。徹夜はしてはいなけれども、小説を熱中して書いていると、その世界が二六時中私によびかけて招くから、気が立つて、頭が

燃えて、床の中でやはり長く眠らない。しかしそれはお察しのようになつてゐる。その時間は有益なのです。あなたに喋りかけて、そうでしようといつたり、ひとりあなたのかわいろをつかつたり、いろいろ芸当があるのであります。そして、猫と遊ぶ。この猫は前便に書いた猫、ひどい好人物的猫で、猫を好かないものの家にいついてしまいました。仕方がないから戸に切穴をつくつた。仕事をしていると別の椅子の上で丸まつて他愛なく眠つてゐる。夜中になると黒い真丸い、美しい表情になつて、私が下へおりるとついて二階にあがつて来る。犬の子のように先へハシゴをかけ登つて。ところが私は何としてもニヤーを寝るところへは入れられない。いやなの。下へおろすに、一寸遊ばしてホーラ、ニヤーと足袋を

片方下へ投げると、この猫はいそいでおっかけて降りる。その間に私はかけてスイッチをねじつて障子をしめてしまう。このような余興。

島田がおよろしいのは何よりです。この時候のわるいことは、だが、何ということでしょう。

六月に『文芸』へ「山本有三氏の境地」という作家論をかきました。勉強して書いたの。

それから今、ウイーンのワインガルトナーというオーケストラのコンダクタアが夫人と来ています。二十八日にききに行つた。いろいろ芸というものについて、こういう出来上った大家の持ちものを観察したわけですが。ベートーヴェンの第六シムフォニー、

田園交響曲というの、あれはやつぱりその理解の点でききものでした。貴方も覚えていらつしやるでしょう？あの曲。静かな小川のほとりの部分もよく、特に楽しい農夫のつどいの部分（雷雨になる前の）、あすこはヨーロッパの村の祭、そこの音楽、雰囲気、ビール、踊、その気分が絵画的なまでにつかまれていて、私はききながらドイツの十七八世紀の風俗画を見るようでした。日本の樂人はこういう生活感情がないから、いわゆるベートーヴェン式に把握して、ロマンティックな自然感だけを描き出します。面白かったのは、その細君のカルメン・ワインガルトナー夫人の指揮です。ヨーロッパにも女のコンダクターは一人か二人です。いかにも細君風なの。バトンをもつて立つたところが。ドメステ

イツクなの。そして手法は非常に年長で大家である先生・良人に従っているので、何だか生粹でもないし、その人は感覚もないし、刻み目、つつこみが浅く、いい人であることと、いい芸術家であることとは必しも一致しないという実例でした。暖い感じの人なのだけれど。なかなか暗示の多いところです。一つもピリッとしあたどころがない。女であるだけ私は残念でした。主観的にはまじめなのです。もちろん。こういうことも私は、前便で書いた、芸術は在らしめること、客観的に在らしめなければ、どんなよい意図もないに等しい、というあのことを感じ直させました。カルメンさんはあんな偉い人の細君だから、一つ背中をぶつてハツとさせて、帯をしめなおさせてくれるような人はいないかも知れない

から氣の毒です。私は云つてやりたいが、素人だと思つて、やつぱりきかないにきまつてゐる（これは冗談）。

私はこの頃、あなたにかぶれて、或は刺戟されて、時間がいうものを実に内容豊富につかいたくてたまらない。仕事というものがわかつてきた。時間がすぎてゆくその感覚なしに、のんべんだらりとしていられると、SUでもジリジリしてきます。私はよく仕事して、休むとき音楽がやれたら本当にうれしいのだけれど。私には文学・音楽・絵の順ですね。今仕事五十枚。半分。十日までにもうそれぐらい。チエホフは仕事にぴったりする気持を、紙と平らになるという表現でいつてゐる。落付き工合を現わしてはいるが。私どもはもつと角度をもつてゐるな。ただ平らではない。

心の角度があつて、いわば彫り出し、築き、現わしてゆくので、彫刻的な精神労作だから。平面をかいてゆくのではないから。ペシコフは単純に、夜灯の下でやるこの苦しいそして楽しい仕事といつている。何とそれその人でしよう。私は何というでしょう。昼間の平均した光の裡で、刻々に人生を再現してゆく、そのむずかしさ、楽しさ。私は本当にまぶしくなく、さわがしくない昼間、誰にも邪魔される心配がなくて、せかずに書いてゆく心持は名状しがたい。時々改正通りが一筋ひろくそつちへつづいてくる様子など思いながら。

あなたもお忙しいでしょうが、どうか時々は私を夢で訪ねて下さい。シャガールの絵ではないが、いきなり天井をぬいて、こぼ

れていらしつてもびっくりはしませんから。林町の連中にはよろしく申します。アヤメとツバメの手拭はうちにもつかっています。あのシャボンの匂いはさっぱりしていると思いますが、どうだつたかしら。

〔自注15〕何とも申しようなし——拘置所の監房がせまいので、足がつかえ、顕治は膝をのばして寝たことはなかつた。

〔自注16〕六芸社の本——宮本顕治『文芸評論』。

七月十一日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

七月十一日　日曜日　曇、小雨　　第十七信

さて、きょうは私たち、この小さい仕事部屋で久しぶりに二人つきりです。おととい仕事をすまして、きのうはくたびれていたが三越へ行つて野原へあげるものを見て来て、きょうはのびのびとして貴方とさし向い。

一昨夜の晩は豪雨がありました。割合におそくなつてから。林町から自動車でかえつて来たら、豪雨沛然はいぜんたる夜のなかに、連つて光つているあなたのところの電燈が眺められました。きのうは可笑しい日でね。くたびれてポケンとしていたものだから健坊とタア坊のお土産に買ったマリと、あなたのために涼しい下ばきを買ったのをタクシーの中に忘れてしまつて、いねちゃんのとこ

ろの玄関でター坊に歓迎の声をあげられて、ア、忘れたと又戸外へ出たがもとより後かたなし。でもマアどこかの子供とあの男がよその知らぬ人の計らざる御中元を貰つたのだからいいと思いなおしました。まして、その自動車はボロでしたから。

健造とター坊は 私が仕事にくいついていて二十日ばかり現れなかつたら、この頃来ないね、と云い、二銭ずつ二人でためて私のところへ來ると云つたのだつて。私はそれに心を動かされて、先ずマリを買つて出かけたのに。——そのうめ合せにきのうは其から一人の子供をうちへつれて来て御飯をたべさせて、おひささんに送らせようとしたら、たよりなさそうにしているんで又私が送つて行つてやつて。健造たちはさしみがすきなので御馳走して

やつたら、その一切を特別なお志をもつて猫にやりました。この  
猫何ていう名なのかい？　名はないよ、オイオイニヤーと呼んだ  
り、わるさをするとネコ！　と叱るよ、と云つたらfrmという。  
名をつけてやつておくれ、そしたらその名を呼ぶからと云つたら、  
健造考えていて、きまりわるそうにしていてミミと縁側に書いた。  
何かの話に出て来る猫の名でしよう。ター坊に、兄ちゃんが猫に  
ミミつて名をつけたから、家へかえつてお話し、と云つたらター  
坊、あたしが話してやる健ちゃんきまりがわるいから、だつて。  
六つと九つの兄妹。大変に面白く、そして林町の太郎のようにス  
ポイルされていないから、いかにも「小さい人々」で心持よい。  
子供たちの母さんは『婦人之友』への小説できのうは大忙し。私

のは『文芸春秋』。新聞の方も母さんはつづけていて、前月は先方が金を渋つたのでねじこんだが、今日は一ヶ月先どりしたから、とキューきゅー云つていて。まあこんな工合ですね。

あしたお目にかかるのだけれどもお体はどうでしようか。この間の暑さ！ 六十年ぶりの由。私は腕の汗が机にきしむので手拭を当てて仕事しました。苦しくおありになりませんでしたか？

氷の柱をあげたいと思つた。それからフーフーあつい番茶を。夏ぶとんは不用のように仰云つたけれども、心持のものですし色彩のものだから二日ばかりのうちにタオルのを入れます。しづびりの浴衣はいいでしよう？ きょう袷せ類が着きました。

先月から今日までにかけての私の仕事は、いくつかの新聞に短

いもの三つ、映画批評三つ、中国における二人のアメリカ婦人――スメドレイとバツクのこと、社会時評のようなもの一つ、小説。すべてで枚数にすると百五十枚以上。これから二十日すぎまでに短い小説を一つに文芸時評一文化時評二つだけはいや應なしです。なまけて居ないでしよう？ それに小説について、私は、「雑沓」、「猫車」から今度のにかけて、少し発見したところがあります。いつもやあなたが作品の実質で漱石や鷗外ならざる時代を語ることについて書いて下さったことがあつた、ああいうことも原論としてはわかっているのだけれども、書いてゆくそのことで新しい世界をひらいてゆくこととは、考えて分つていることとやつて見てわかっていることとの間に在る微妙なちがいのようなどこ

ろがあつて、そのやつて見てわかるところが漸々 ようよう 身について來たようなところがあるのです。本当に今年は沢山小説を書こう。作品の中に作者の肌と体温と現実の社会的血行がうずいているような作品こそ書きたい。書いてゆくに際して、そこまで出し切れる迄修練したいと思う。私の持つて いる作家的水準は決して単純に低いとは云えないものであるが、私が自分に求めて いるだけの闊達さかつたつ、強韌さきょうじん、雄大さはまだわがものとしていません、まだその手前での上手さうま  
りきであり、確りさしつかである。

昔の小説家が主觀的な力みで、そういう箇性の範囲での闊達さに到達した、そういうのではない内容での闊達さ、美、簡素な力、そういうものが本当に欲しい。そしてそれは作者の生きかたから

だけ求められるものですからね。こんどの小説を書いて行くうちに何だか私は自分のリズムの扱いかたが高め得る方向を見出したようでうれしい。どうかこの方向がのびるようにならう！

一生懸命に努力し、自分に与えられる賞讃や批判の中からむだなく養分を吸つて育つてゆく、その生活感は何とよいでしよう。自分の努力、自分の熱心、そういうものが、とりも直さず真心から愛と一致し、その具体的な表現であるとさえ感じて（その経験と摂取において、自分の目に入れこになつている眼を感じて）、信じて生活してゆけることは、何と貴重なよろこびでしょう。私を努力させる力、私を生かしている力、それは何という根づよい強健なものでしょう。抽象的に書いて何だか妙だが、おわかりに

なるわね勿論。私が絶えず探し求めていて、自分を一層ひろげたり強めたり本ものに近づけたりする小さいキツカケでもピンと来たときどんなに私はあなたと共に其をうれしく思うでしょう。ありがたいとさえ思う。つまりこれらすべてのことは、私が比較的健康の工合もよくて、心が情愛に満ちていて、仕事にはり切つていて、その仕事を一つ一つあなたに、全く、実に、ほかならぬあなたに見て貰いたく思つてているということなのです。こう書くと何だか暑い盛りに一層あつっぽい息をかけるようですみませんが、でもこれはあなたの不幸にして幸福な良人としての義務だから、生かしているものの義務だから、あしからず。

本のこと、差し入れのこと、皆お目にかかるつて申します。鶴さ

んたちの生活はいろいろむずかしさをもつてゐる、しかしもし鶴さんがあると、どんな形になろうと、二人の生活を完成させて見せるというところに腹が据わればほんとにいいのだけれど。長くなりすぎるからこの手紙はこれで。

七月十三日夜　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

七月十三日

様子がわからぬことは、本当に苦しいときがある。きのうお目にかかる前の日私は割合自分の仕事を一区切りした気分その他でのんきらしい手紙を書いたりして。

きのうは、あの位立つていらつしやるのが骨折りではなかつたでしようか、あとから熱が出ませんでしたか。あすこは明るいので顔色のわるいのが目立つたかもしけないのに、いきなりびっくりして、わるかつたと思います。でも、余り、これまでより冴えなく見えたものだから。

ところで、先ず弁当のことはかえりによつて調べたところ、私が六月十九日に行つてとりあえず五日とたのんでおいたのを二十五日から五日間入れてしかも一本しか力ユでなく四本普通になつていたのでした。四本分は責任を負つて何とかすることです。何しろあの時分はひどかつたそうで、あやまつていきました。さぞいろいろ不自由なさつたでしよう。そういうことがやつぱりさわ

つて来ているのですね。きのうは二十日までおカユその他を入れました。

毛布カバーワンつ、座布団カワードをお送りします。お金を四十円送ります。野原のことはこまかく様子をききますが、私として、あなたの体が工合わるいときそういうことまで心を労させるのがいかにも本意ないから、私に何でも云つて貰うようにしようと思う。もとより貴方が必要以上に心配をなさるとは思っていないけれども、それでも、という気が私に起るものお分りになるでしょう？

私たちの条件で可能の最大をつくしてあなたの体を恢復させましょう。その目的のために、私は至急処分するものはしますから、

どうか体のために必要なことはちつとも節約せずにやり下さい。

当分私たちの全力をあつめて丈夫になりましょう。肉体の性質が或点強靭であるし、精神は十分の支える力をもつてているのだから、気候が定り、もう少し暑いなら暑いでカラリとすればきっとましにおなりになります。

医学的な健康体に私たちはどうせなれないが、平衡を保つことは可能です。それを目ざすことは絶対に不可能ではないのだから。気をそろえてやりましょう。私の知識、私のマメさ、私のもつその他すべての資質が、そのため最小限にしか活用されないのは何と残念でしょう。自分の体の内が苦しいように苦しいのに、それをしてゆく心持と直接には最小限にしか表現しないで、仕事をしてゆく心持と

いうものを、きのうきょう味つています。これは或る意味で新しい経験ですが、私は決して悄氣はしないから御安心下さい。只まだ非常に生々しくてそれに馴れない。

さて、野原には黒檀こくたんの五十円の仏壇を送りました。本当は金ピカなのだろうが、記念の品を納める心持にふさわしいような、但シ格に従つたよい品です。富美ちゃんには浴衣ゆかたと思つたがやめてお金にします。島田を手伝つている多賀ちゃんに浴衣。父上にはいろいろの食料のカンヅメと果物のカンヅメ。

私はこの手紙が着かないうちにお目にかかりにゆくでしょう。あんな苦しそうに立つていないのでよい方法はないでしょうか。いろいろのことが、もつともつと体の細かいことが気になるから。

きよう稻ちゃんと一緒にあなたの夏のかけ布団を注文にゆきました。きっとこれはたけがたつぶりだらうと思います。どうか呉々お大事に。元気に。よくお眠りになつて下さい。本を、どんなのをお買いになつたか、つい訊かないでこまつたと思います。どんなのを送つてよいか分らないから。重複しやしないかと思つて。では又近々に

七月二十日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

七月二十日　火曜日　晴天　第十九信

けさは、お手紙がもう着いているだらうと楽しんで下に降りて

来たら、来ていない。武田長兵衛から新薬の試用が来ている。御職掌がら先生がたには御頭痛も多いことでございましょうから云々。私は頭なんか痛みやしない（！）

今茶の間の机で珍しくこれを書いて居ります。この部屋は六畳で、となりの三畳の境をあけておくと北南風が通つて案外に涼しいのです。

きのう今日は暑いが乾燥して居ますが、御気分はいかが？　御氣分は元気でしようがおなかの虫はいかがな工合ですか。掛布団を送り、只今筒袖のねまきになさる麻の着物とちゃんと袂のついた御新調とを送りました。

島田のお母さんからお手紙で腎ウ炎をなすつたのですつて。二

週間おやすみになつたつて。生れてはじめて医者にかかるて病氣のつらさが分つたと仰云つていらつしやいます。今私が盲腸のために飲んでる漢藥の医者へハガキをかいて、腎ウ炎の余後のためによい薬を送つて貰うことにしました。それをすぐお送りします。

達治さんが召集されるかも知れないと御心配です。無理ないと思ひます。隆ちゃんはもう六ヶ月で入當ですからね。もし達ちゃんがいなくなれば、うちは運転手をやとわねばなりますまい。經濟的にそれではキヤンセルしかないのでですが。一般的な困難がきわめて具体的に一つのわれわれの家庭に反映して來ているわけです。万ーそういうことになれば、私たちとして何か些かでも考え

ることはありますからよいけれども、ねえ。

林町では国男が盲腸手術後の脱腸（ヘルニア）になつて又手術すると云つています。二三日うちにやるらしい。寿江はこの頃近くのアパートに大体落付いて、昼飯や夕飯をよく一緒にたべます。Sさんという元からの看護婦が池袋の堀の内にいて殆ど毎日来てくれ、寿江のインシュリンの注射をしてくれる。この頃寿江子は英語の勉強をはじめ、性格にしつかりしたつよいところもあるのに結局はどつちつかずで、人生の評価の土台がない。二十三の女の子というのはこういうのかしらと昨夜も感じました。この位いい素質をもつているのに推進力としての情熱が足りない。体が弱いことに帰しているけれども、それは間違いです。もし体が丈

夫でなければよい生き方が出来ないのなら、私たちなんか、年々歳々どこから生活に対するこのような愛や信を獲て来るのでしょうか。今岩波文庫のステイブンソンの「若い人々のために」というのを一寸よんديいて、この人が、あんな体で海洋の孤島に生活してしかもどんな人生の見かたをしていたか分つて、大変面白い。

勿論歴史的な違いはあるにしろ。いつか去年あたり私が手紙で書いた情熱と セント 感情メント のちがいをやつぱりこの人も知つている、さすがであるとニヤリとしました。そして曰く「信は厳肅な経験をつんだ、しかし微笑んでいる大人である。油断なき信は、私達の人生と境遇の横暴とに関する経験の上に築かれる。信は必ず失敗を見込み、名譽ある敗北を一種の勝利と見做す云々」ステイブ

ンソンの「宝島」やなんかを私たちは面白がらないのだが、そういうものを書かせた——自分の条件を最大に活かして——彼の生きる気持には面白いところがあります。精神の活々とした感受性、習慣や反覆でこわばらない心をこの人は持ちのいい心と云つていい。これは柔軟な含蓄ある表現ですね。この表現の中には愉しいものがあるわ。

きょうは、今月に入つてはじめての丸一日の休日です。あしたあたりから短い小説を一つ書き文芸時評をかき、一寸休んで九月初旬八月下旬までに又たっぷり小説のつづきを書きます、『新潮』。貴方の仰云るように生活をきちんとして、時間 내용ある仕事でびつちりとはりつめたいと思う。この頃やつとそのこつがわ

かり、自分もそれに少し馴らされて來たし、仕事と生活との統一の水準が高まりました。覚えていらつしやるかしら？ いつかバルザックが貧乏のためにあれだけの仕事をしたということを、あなたが私へ比喩的に書いて下さつたのを。歴史は幾変転して読者の要求が高まるに正比例して、バルザックのような相互的解決が或種の作家にとつて外部的に不可能であるところに歴史の妙味があります。

野原の方のことについて御返事がありましたか？ 私の方へはまだあるが、あの地所は広いので、分割して売ると、整理して猶住宅と土地だけは残り得る計算だということは、この間のお母さんのお手紙にもありました。地所が大きいからそういう都合に

ゆくのでしよう。但し、活動の中心から地理的に遠いため活動的な買手がなかなかつかないらしい。それで整理が永びいているのです。講のほかに近隣からのユーヴーもあるらしい。くわしくわかつたら又改めて書きます。

私はハンドバッグの中にきのう貰つた面会許可をもつて居ります。四五日うちにお目にかかります。その前に一寸お体のことを調べたいから——私の知識ではあやしいものだけれど。――

太陽燈あてていらっしやいますか？ 慶應などでも軽い熱のひとはかけている由、時間を加減して。私の手のひらの下にはあなたのおなかの気持のわるいところの感じがはつきりつたわって居ます。そして、私は念を入れてそれらのところを撫でる。何とい

う目の前にある感じでしょう。お大事に。呉々お大事に。

七月二十六日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

七月二十五日　第二十信

七月十日、づけのお手紙を一昨日いただきました。あのお手紙は最も真面目な心持と新鮮な誠意とでよまれ、それに対しての返事は具体的にいろいろあります。けれどもこの手紙はそれとは別に野原の家のことについてお母さんに伺つたお返事が今ついたので詳しく述べます。

お母様の書かれている順に。

二十五年前、「商売の失敗野原の信吉さんのこと」三千円の頼母子。<sup>たのもし</sup>年百二十円の掛金、元は去る七月十一日に全部すむ。抵当として野原の家屋敷、島田の家が入っていた。

其後十三四年前に又二号抵当で一万五千円の頼母子。一万五千円の中には野原の借金も相当あつたが、「いつの間にか野原の不動産及び家屋敷が全部信吉の名儀に書きかえられていました」、父上がお怒りになつたところ、立会人二人が入つて、年百十五円の頼母子を二十五年間にかけてすまして呉れよと書きものを入れました。もし返掛しないときは全部不動産は兄へかえすこと。

二三年は野原でもかけたが、その後はかけず、島田で九回まで年六百円をかけ、その後父上の御病気などの事情から頼母子側で

抵当を処分して整理することになったが、兼重萬次郎が心配人に入り、三千円の一時返掛で話がきまり、その負担額を、野原は五百坪もあるから一千六百円島田一千四百円ということになり、この三千円は兼重さんが出した。三号抵当に入っていたのでこれは百八十円、世話人その他の費用百五十円。島田の分は合計千八百円以上の負担となつた。これは兼重へ追々かえすことにして頼母子は片づいた。

野原の頼母子の負担は一千六百円ですが、ほかに自分としての借金が利子とも三千円位あつて、これも兼重にかりていて。土地は時価四千五百円位。買手がつけば一千五百円ぐらい浮いて、本家の家屋敷ぐらいは保てる。兼重も熱心に買手をさがしていると

いうわけです。

Tさんの私たちへの情愛の示しかたについてなど、私は自分の心持は別に申しませんが、この間島田へ行つたときは、お母さんもやつぱりここまで詳しくはお話し下さいませんでした。

お母さんは、事情をあなたが御存じないことを知つているTさんとして、貴方に向つていろいろ事實を歪めることについて御立腹です。そのお気持には私も自然な同感があるわけです。

島田は頼母子からは自由になつてゐるが、兼重という爺さんにはまだ相当の責任があるわけですね。この点も春にはぼんやりしていた。恩給はすつかりお手元に戻つてゐるのですが。

あなたが全体の事情に対して正当な判断をなさることはわかっ

ているから、私はこの手紙はこれでおやめにします。

猶おばさんからのお手紙で黒檀の仏壇は、かねておじさんが欲しいと云つていらしたものだそうで、大変およろこびでよかつたと思つて居ります。富美ちゃんからお礼の手紙つきましたか？お体を呉々も大事に。だるいのに体をお動かしになるのは大変だと深く察します。私も三日ばかり工合わるくしましたから猶々。

七月二十六日夜 〔巢鴨拘置所の顕治宛 目白より（封書）〕

七月二十六日 第二十一信

きょうあれからかえつて、すつかり安心をして、喉がかわいて

かわいて。たくさん番茶をのんでトマトとパンをたべて眠りました。私はいつも永い仕事を一つ終ると本当にのうのうして眠るのに、今度はお目にかかるつたとき、沢山の気にかかることがあつたので、珍しくよく眠らず、疲れがぬけなかつたので病氣したりして。

昼ねから醒めて、体を洗つて、新しい仕事を考えながら二階で風にふかれていたら、不図思いついて狭い濡縁ぬれえんの左の端れまで出てみたら、そこから四つばかりの屋根を越してあなたも御存じのもとの私の家の二階の裏が見えました。間に自動車の入る横通りが一つあつて、それから先なのに、屋根と梢とでその道路の距離は見えず。眺めていて、あの二階にさした月の光の色をまざま

ざと思いおこし、ここに今自分たちの生活があること、そうやつて昔の家の見えること、それらを非常に可愛らしく思いました。

あの屋根とこことの濡縁との間ににある距離はその位だけれども、私たちの生活は何とあれから動き進み、豊富にされてきているでしょう。そのためどれほどの人間らしい誠実さと智慧と堅忍とがそがれているでしょう。世間では、私たちにある意味でもつとも幸福な夫婦と折紙をつけています。私はもちろんそれをいやに思つてはきませんが、そういう人々の何パーセントが、何故に私たちが幸福な夫婦であり得ているかという、もつとも大切な点について考えをめぐらしているだろうか、とよく思います。

七月十日づけのお手紙を私は三度や四度でなく読んで、こうい

う手紙を貰える妻の幸福そしてこわさというものをしみじみと感じました。貴方は何と私を甘やかさないでしょう。（こわいのはむかしからだけれど）あの手紙の中には小さい感情でいえば、普通の意味で、私に苦しい言葉もあつた。たとえば、ユリのジエスチュアは云々。——ジエスチュア!! そう思う。ああと思う。ジエスチュア。だが幾度もとり出してよみ直して、しまって、こねているうちに結局私にのこるものは、生活態度について、貴方が私の可能性を認めた上で求めていらつしやる水準のより高いところへの健全な激励だけです。

あの手紙にたいする答えは、きょうお話したことその一部分です。私の生活の経済的な面をこまかく書いたことはなかつたけ

れども、一昨日、林町へ行つて書類をしらべるまで、私はいろいろのことを知らなかつたのです。去年の春かえつてから、ことしの正月こつちへ越すまでは入院の費用やその他で、自分の分などの話も出さなかつたし、こつちへ移つてからは大体四十円程、私のつかえる分としてもつて来て、私はそれをあなたの分として、至つて素朴な形でやつていたわけです。日常生活は稿料でやつてきています。〔中略〕

目の前に電燈の色が暑いので、昼光色をつけました。水色のような電球。これだと虫が来ないというが来ている。

稻ちゃんは二十五日に子供たちをつれて、無理をして保田へゆきました。健造曰く「母チャン、どうしたつて二十五日おくらし

たら駄目だから。日記に、二十五日ホダへゆきましたつてもう書いちやつたんだから」だつて。

栄さんは、妹さんが、あやうくインチキ結婚に引かかりそうになつたので、そのこわしに出かけ、かえつて來ました。もしかしたら又もう一度ゆくかもしれず、そうしたら壺井さんも行つて一ヵ月あつちで暮す由。あのひとこのひと皆行つてしまつて、私はお喋り相手がないわ。

七月八月は映画も音楽も口クんなのなし。仕事をして暮す。但し、この家は縁側がなくて、いきなり硝子戸なので、風は通るが落付かず。でも私は、あなたにたいしてこういうことは云えません。

夏、腸をこわすと實にへばりますね。私はまだしつかりしない。

あなたの方もなかなか照りつけるでしょうね。木蔭がないから。お体についても、私は緊めつけられるような、息の出ないような苦しい心痛からはもう自由になりました。しかし腸なんか敏感だから、そのためにも私は一層よい女房にならなければならない。

愛情なんて、実に必要を見出してゆく直覚、努力、探求のようなものですね。人にたいしても人生にたいしても、決して空なものではないし。主観的なものでもない。愛しているという自分の感情をなめまわしているなんて、何て結局はエゴイストでしょう。（これは小説の中に考えていることとくつづいているが）「海流」はチョロチョロ川がすこし幅をつけて来て、いろいろの錯綜もあらわれて来て、やや調子もでてきました。面白いそうです。「雑

沓」より進歩して來て いるところもある。技術ではなく、現実に向う態度で、私はこの長篇を努力して書き終るとやつと小説における自身の今日の到達点を具体化できると信じ、本氣です。

きょうは何となく愉しい。私もこれで案外しおらしいのだから、どうぞ呉々もそのおつもりで。これから仕事。では又。もう九時だからねていらっしやる刻限ですね。どの窓だろう。お大事に。

七月三十一日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

七月三十一日 午後 90° 近いあつさ。第二十二信

二十七日づけのおはがきを二十八日に拝見しました。この二三

日じゅうにとりにゆきましょう。何だか今年の暑氣は体にこたえること！ その後いかがですか。私はもうおなかの工合も直つて汗をふきふき仕事しているから御安心下さい。

富雄さんのところから返事が来ましたから、又その内容をおつたえいたします。この間、あなたが両方が同じような気持だから云々と仰云つて。まつたくその通りで何だか苦しいわ。何故自分で自分の実際を私たちに語る正直さ信頼をもち得ないかと思つて。島田がどうやらやれるようになつたのは只管野原のおかげであるのに云々。達ちゃんや隆ちゃんの献身をも青年同志の思いやりで見るべきだのに。

さて、

(一) 大正十年頃光井の土地六百坪及び家、信吉名儀となる。

(二) 大正十二年一万五千円の頼母子。返掛六百円の中、島田四百九十円、光井百十円。光井はあと返掛けせず。

(三) 本年初め頼母子を整理し二千八百円の中（母さんのお手紙には三千円とあつたようですね）野原千六百四十円。島田千百六十円。頼母子は消滅して、千六百四十円は光井の負債となる。他雞舎其他を担保にして千七百十五円の負債。合計二千七百十五円也。

(四) 整理方針、土地家屋の売却。価格約三千円。母屋をとりのこすためには約千円位調達の必要あり。

(五) 信吉の主人格である周防村の大地主山口彦一に、千百円

の負債あり。信吉と富雄の名。

(六) 光井の家は本年一杯で整理。母屋をとりとめられなければ一家離散の由。

あなたがいろいろ親切にたずねて下さるのをよろこんで居ります。島田に対するの呪(のろい)には苦笑しますが。――

私の手紙は又別に書きます。混同してしまいたくないから。

お弁当を外からちつとも入れられないと何だか不自由がましたのではないかと心配しがちですが、この間のお話で何だか大変安心しました。案外の便利もあるものですね。

どうかお大事に。リンゴの液が腸のため体のためによいのを読むので、どうかして汁だけめしあがれないものかしら。嚙かんで力

スを出すというのも不便であるし。何かよい工夫はないでしようか。では又。いろいろのお喋りを後ほど。

八月八日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

第二十三信　けさは珍しく汗をかかないで目をさましたと思つたら、午後はやはりむして來た。今年は例年になく夕立がありません。私はおお暑いと息苦しく感じる毎に、そこの建物の上へ大きい大きい如露をもつて行つてサーサアと思いきり水を注ぎかけてあげたい感じです。

工合はいかがですか。寝ていらして背中がむれるでしょう。ベ

ツドの上で体を右へまわしておいて、体とベツドの間へ団扇うちわで風を入れて又ねると、ほんのそのときぎりですが案外涼しいものです。右へかえつたら又左へかえつてという風に折々やると。

私はこの間、二三日少々ぐつたりとしたが、おなかの方はもう大丈夫ですし、仕事もしておりますから御安心下さい。私は暑いと云つても、自分の日常的条件でどうこういう気分は全く持つていないのでから。

稻ちゃんは前便で書いたとおり保田。栄さんは妹さんが変な男にたかられてこまつてるのでそのおっぱらいに小豆島。もし繁治さんが行けるようなら、二人で八月一杯滞在の由です。中野も国。戸台さんも保田。俊子さんは軽井沢。雅子さんは体の工合が

わるくて八月一杯休みをとりました。何とか工夫がついたら暑いアパートにかがまつてているより、田舎で暮したらよいと思つて、保田の方をきき合わせちゅうです。

島田や野原へお手紙お出しになりましたか。申すまでもないことですが、何か一寸した思いちがいからでも双方が揉めるという状態らしいから、どうぞそのおつもりで（経済的な問題に関して）。この間、富雄さんからの手紙の内容をおつたえしたとき、私としての手紙を別に書きましょうと云つたのは、この頃いろいろと又身にそえて分つてきたことがあつて、私は心からあなたにお礼を云いたいことがあるの。あなたが、一つ一つと私たちの本質的な生長のために必要でないボートを私にやかせることが、どう

いうことかという真価が次第に明瞭にわかつてきて——自分の生活感情に新しく加つて来る推進力の新しい発見の面から分つて来て、私はそのことについて心のもつとも深いまじめなところから、改まつてあなたにお礼を云いたい心持なのです。私はどのポートがない方がいいかを洞察し得るものは、私をその上に泛べている広い、たっぷりして活々した愛情なのであるから、その意味でも私は何だか鞠躬如きつきゅうじょとした気持になる。この頃私は自分たちの中にあるそういう貴重なものに思い及ぶ時、感動から涙をおとすことがある。自分たちの生きてきた五年の歳月というものの内容を考えて。——普通のものだけじめで五年が一区切りになるばかりでなく、今年は私の生涯にとつてなかなか一通りでない意味を

もつ内的な問題が発展させられた年でした。

あなたには私がこんな妙な切口上のようにお礼を云つたりするの、おかしいかもしれないが、笑いながら、ユリのばかと笑いながら、やつぱりそれでもあなたにも分る我々のよろこびというものはあると思うの。抽象的に云つているがお判りになるでしょう。いろんな、文学的なおしゃべりや何かとは一寸別にして、この手紙を出したい心持があるのです。

私は自分の誠実さによつてだけ遅々としてものを理解し、本当に会得してゆくたちの人間だから、あなたは良人としてある場合は少なからぬ忍耐をも必要とされます。あなたの忍耐の結果が必ずしも無でないところに私としてのよろこびもある。暑い最中に

暑くるしいお札をのべておかしいが、お互に暑さに堪えている折からのおくりものとしてはなかなかに新鮮なものなのですから、どうぞおうけとり下さい。

八月十日 〔巢鴨拘置所の顕治宛 目白より（はがき）〕

この頃ハガキが新しくなりました。見本をかねてお医者様の名前をお知らせ申します。慶應大学病院外科元木藏之助氏モニテギです。この方は日本での権威です。では又手紙は別に。

八月十五日午後 〔巢鴨拘置所の顕治宛 目白より（封書）〕

八月十五日 日 第二十四信

きのうは、腰をかけていらっしゃれたからすこしは疲れがましたか？ 本當におやせになつたけれどもやせたことだけに別に拘泥せず、熱が高くないことの方を寧ろプラスとして見るべきなのでしょうね。あなたの御努力も、そういうところに目立たぬながらやはり決定的な価値であらわれているのだと思いました。

後姿はいかにも相変らずのあなたです。ちらりと見送り、おお何と珍しいと浴衣の肩をふつて歩いていらつしやる瞬間の印象を全心にうけた。だつて何年ぶりでしょう　あなたの全身を動作の中で眺めたというのは。――

お話の本は、私は普通の図書目録だと勘ちがいして、それ

なら何かいろいろの目録でよいという風に考えていた。今日東京  
堂へ行つて揃えてお送りします。

けさ、七月二十七日に書いて下さつた手紙がテーブルの上にの  
つていた。きのうはいろいろくたびれて、夜は珍しく九時頃から  
床に横になり月を眺めながら、ひるまのいろいろのことを思うう  
ちにうとうとと眠り、十二時頃目を一寸さまし、又暫く目をさま  
していくもう月は屋根のむこうに沈んだが、ベッドの中ですこし  
片側へよつて、又いつか眠るまであなたとお喋りをした。時々撫  
でてあげながら。――

あなたのガクガク的調子をユリが悄氣なかつたかと思つて下さ  
ること、ありがとう。悄気ることはなかろうという御想像は全く

当っています。私はあなたに対しては私に向つてされるすべてからいつも最善の、そして、最愛の正当な理解をくみとるのをつとめてもいるし、お互の誠意の当然の結果として必ずそうあるのです。だからあなたの一つの笑顔さえ私にどんな意味をもつかお判りでしよう？ ここが私たちの生活の実に基調です。

私がよく勉強している時ほど所産に対するハムブルだということ。私はあなたにハムブルでなく思わせたことがあつたかと、極きまりわるい気がした。私たちの仕事の目標が、日常の現象的に対人的な比較の上に立てられて居らず、新しい文学的価値をもたらすために、自分の生涯の生活的芸術的全努力がどの程度までの寄与をし得るものかと考えて日々を送っているのだから、本質的に傲

慢ではあり得ない。傲慢であることと、確信に充ち、自分たちの努力の方向の正当性を信じている生活態度とはおのずから別ですもの。根本的に私はゴーマン人間ではないわ。**癪**<sup>かんしゃく</sup>は起すが。そして軽蔑すべきものに対する軽蔑をかくし社交性を發揮することも出来なけれども。どうか私が自分たちの希望している何分の一かでも価値のある成果をもつことが出来るよう、時々お目玉も大変にいいわ。

郵船のものや何かきのうお話した通りです。『ダイヤモンド』の何頁かをフレームと眺めていらしたでしよう、可笑しい。お手紙のうち乾布と冷水をやつてはいる、のあと、僕の石盤にも云々まで二行半真黒けよ。あなたのお手紙としては初めてです。それから、

窓をあけて眠るのは、雨天や靄の濃い時はよくないそうです。シャボンはこれからずつとお送りします。匂いというものは神経を休めるから。神経の疲れたとき水でシャボンで手を丁寧に洗うのは大変よくきます。御存じかも知れないけれども。

お久さん、お久さん元気かねと来ているよと云つたら、おや、ありがとうございます大元気だとおっしゃつて下さいましつて。暑いので簡単な服を着て、鉢巻をして、なかなかユーモラスでやつています。あんまり足の裏を真黒にしているので熊の仔という名があります。信州の中農なので生活に対する気分が、気質的にはよいが、どこまでもしつかりしたということは望めず。雅子さんは一ヶ月体が悪いので休暇を貰つて今保田にいます。稻子さん、

戸台さんと皆あつちです。ユカタあと一二枚ほしいとこのお手紙にはあるけれども、きのうはもういと云つていらしたわね。

きのう、本はおよみにならないのでしようとおききしたのは、近頃の流行的作品なるものを少しづつ読んで頂きたいと思つていたからですが、勿論いそがず。

作品の評価の主觀性の要求とはなかなか微妙な錯綜と混乱とを導き出しています。作品に社会性を求める必然は健全ですが、平凡な市民の日常的限界が作品の限界となりやすくそこに又経験主義的な危険がかくされている。婦人作家の昨今の暮しぶりもいろいろに分化して来ているし。では又。お体のことは決してくよくよしません。でも、非常に本気なの癒そうとして。暑さをお大

事に。

八月十五日夜 〔巢鴨拘置所の顯治宛 目白より（はがき二枚  
）〕

さつき手紙を書いてから東京堂へ出かけて、かねて御注文の図書総目録というのを調べました。あれは栗田書店から出ているので昭和八年版新しいのなしです。昭和八年以前の本を知るのにだけ役立つわけですが、どうしましよう。『出版年鑑』の十二年版はもう御覧になつたのでしたろうか六月出版ですが。もし昭和八年以前の分でよかつたら総目録をお送りいたしますが。（第一）

本郷の南江堂へ行つて学問的な本をしらべて、腸と太陽燈療法についての本をお送りしましよう。普通の本やではだめです。かえりにもとの砲兵工廠の横を通つたら、今あすこは後樂園スタジアム九月開場予定として工事をやつて居ります。中村光夫の『二葉亭四迷論』を古本で買いました。御覽になる気はないかしら。

『胃腸病の新療法』日野お送りしますが大したことなし。終（第

(二)

八月十七日　「巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（ダマスカスの細工物「ランプ」の絵はがき）」

八月十七日、きのうの午後太郎と一緒に本郷の南江堂へ行つて、本を買いお送りしました。私は何というあんぽん！ ほんとに何という。外ならぬあなたが体のために本をよむことも注意していらっしゃるということの意味が、やつと今になつてはつきり判つたなどというのは。本当に御免なさい。私はこれから本をよまぬあなたのために、毎日一枚ずつ小さいお喋りをのせたハガキをかくことにしました。仕事をはじめる前の挨拶として。

八月十八日　「菓鴨拘置所の顕治宛　目白より（トルコの細工物「大ざら」の絵はがき）」

八月十八日、朝。

御機嫌よう。工合はいかがですか。きのうは九三度二分ありました。濡椽の外の柱にさち子さんが蒔いた朝顔の花がこの頃咲き出し今も咲いている。きょうは、小さい小説の仕事にかかります。元フランスの首相であつたブルムが「結婚の幸福」について論文があり、それは男も女も多夫、多婦的傾向をもつてているのだから、或年齢までそれでやつて後結婚すると幸福だと云い幸福を平凡と休安に規定しているところは彼の進歩性を語っているではありますか。

八月二十日

（巢鴨拘置所の顯治宛

目白より（国立公園富士

箱根大涌谷の絵はがき)」

八月二十日、永井荷風の「東綺譚」ではないがラジオはほんとうにきらいだ。この頃はあつちでもこつちでも。家々が開け放しだからなおたまりません。空が皺くちゃになるような感じですね。お気分はいかがですか。私は体の工合がつかれて余りひどいから明日あたりから暫く国府津へ仕事をもつて行こうと思います。疲れがたまつていてよろしからずです。きょうは又少々暑くなりましたね。

八月二十二日　「巢鴨拘置所の顕治宛　神奈川県国府津前羽村

## 宇前川中條内より（封書）

八月二十二日、晴、第二十五信、九十二度、きのうは、朝のうちそちらへ出かけてやつと夜着をとつて来て、それから小さい例の茶色のスーツケースに本や着換えをつめて、四時に東京を立ちました。寿江子が横浜まで送りに来て、あとは私一人。この頃国府津は小田原にすっかり交通要點をとられてしまつて、この頃は準急もとまらない。但し、街路はすっかりコンクリートになつて、家の前の私たちがのぼつた古松の生えた赤土の崖などはどこにもなくなつてしまつた。そのことは多分去年の夏、あなたに其那スポートは体の弱つているときにするべきでない、と云われたドラ

イブで家の前を通つたときの印象で書いてさし上げたと思います。  
 庭は芝生になつてゐる。母が没した後父と来たとき植えさせた合  
むのき  
 歓木が風に吹き折られもせず一丈ほどに成長している。

私はこの間のハガキに書いたようにラジオのやかましさを聞いて机に向つていると、炎天の空がくしやくしや皺になつて感じるような神経の工合になつたので、本当に本当に思い切つてこつちへ来ることにしました。相變らず仕事をもつてではあるが、ラジオがガーガー云わず、来客がなく風が吹くのだけはましです。きのうはいい月夜で、窓からあまり海上が美しいので、ふらりと波打ぎわまで出てみたら、面白い発見をしました。虹ヶ浜であなたは知つていらつしやるかしら。月の海というものは、高い遠いと

ころから見ると銀波洋々であるが、波打際までゆくと月のさして  
 いる一筋のところだけ海上が燐<sup>かがや</sup>いて、あとは微妙に暗く、しかも  
 どこか明るく海面がもり上つたように見えるものですね。大変珍  
 しかつた。箱根の山の方も、風に吹かれた砂丘の方も見えず。丸  
 い白い浴衣に団扇をもつた私一人が月の照る浜にいるだけ。犬も  
 いない。

家の方は、S（略称「バラさん」という）父、寿江、私とお馴<sup>な</sup>  
 染<sup>じみ</sup>の看護婦のお母さんが来ていてくれるので私は本当に安心して  
 いられる。

こんどはまわりがすこし心配はじめでそういう順立てもして  
 くれたのです。

お工合はどうですかしら。この間の本はすこしは役に立つでしょうか。どうしても腸の疾患だけを特に一冊にとりまとめたのはありません。あの本は南江堂で買ったがその前日丸善（神田）へ行つたら医書のところに『人間は皮膚を変える』というヤセンスキーの小説、黒田辰男訳が立ててあつて、笑いを押えることが出来なかつた。何たる皮肉でしよう！ この作者の現実と人間の進歩の関係を見ることに於ての誤りは皮膚だけかえるところにあると批評されているが、皮膚を代えるのは生理的現象であるとして丸善の小僧氏は医学書の間に入れてある。實に善哉善哉である。近來の傑作です。こちらで私は全く神経の休養とその間にゆつくり仕事をすることを眼目にしてるので林町からも誰も来させな

い。台所の方にずっと留守番をしているおミヤさんという六十四のお婆さんひとり。父が私がここで勉強するためにテーブルを一つ買つてくれた（一九三五年の初冬）。それを今日三年ぶりでかけようとしたら（引出し）狂つてしまつていてあかない。広間のテーブルが夏なので室の中にタテに置いてある。あの大ソファは炉に背を向けてTの字に。そのテーブルのところでこれを書き、又仕事をするつもりです。私は大変意氣地がなくてわるいが、全くこの間うち少し病気のようになりました。例えば、ああこの風に一緒にふかれたい。そういう感情と、ああこれをたべさせて上げたい、ああこの風に吹かせてあげたい、そう思うのとでは感情のニュアンスが実に實にちがう。ああこの風と一緒に、だと私の

目の中にもう一つ目ありのくちで、風よ我らを共に吹けでどこへ  
 でもスースー行つて平氣だが、吹かせて上げたいとなると、もう  
 何だか涼しくても切ない、美味くても切ないでね。だから病氣の  
 ようになる。そして、おお畜生、自分が病氣の方が楽だと思つて  
 呴<sup>うな</sup>る。

でも、私は又もう一つ勇氣を起して、この切ない心持もちゃん  
 と持つて身につけて、平静な明るさをとり戻しますから、どうか  
 御安心下さい。ここに月末までいて、すこし神經を休めたらいい  
 でしょう。よく働いたも働いたし。この次手紙を下さるときどう  
 かユリのこの心持におまじないをして下さい。ユリによく眠れ。  
 よくうまがつて食べろ。楽しめ、笑え。そして俺のこともよく心

配しろ、と。

ほほう、私は大分アンポンの本性を露出していますね。でも、私自分ひとりで、私が元氣でいればそれは貴方もよろこんで下さると納得させて居切れないのです。ホレ、しつかりして、とおりの一つもぶつて下さい。

この間うち一日一枚のエハガキをはじめたのだが、御覽になりますか？ 甚だ心もとなし。ではこれから仕事（『報知』月報）の準備にとりかかります、お大切に、お大切に。

八月二十四日

〔巣鴨拘置所の顕治宛 国府津より（封書）〕

八月二十四日　国府津　第二十六信。こういう書簡箋が出て  
来たので。

きのうは、実に実に珍しい大雷雨でしたが東京はどうでしたろ  
う。ああ降る！　降る！　と白雨煙のを眺め、そこの屋根に沛  
然と雨の注ぐ氣持を考えたけれど、降つたでしようか。天と海上  
との間に火の柱が立つた。はじめての見もので壮大、かつ恐しか  
つた。こういうときの雷は地軸をゆるがすという形容そつくりで  
す。裂ける如し。

時評を書いています。あと二回で終る。今度は、むくみも引い  
たしよく眠るし成績はようございます。

あなたはいかがでしょう。よくおりますか。私はいろいろの

意味でこういうところに十日以上暮している辛棒はないから、これからは余りへばらないうち三四日本をもつて来ようというプランです。

この海岸は御承知の通り海水浴場がないからその点ではさっぱりして居ります。遊びに泳いでいる者一人もなしです。私は豆腐ばかりたべている、それから胡瓜きゅうりと。二十九日に緑郎がパリへ立ちます。音楽の勉強のために。福沢の孫で法律をやつている青年と一緒に。緑郎は何か得て来るでしょう。どうかお大切に。国府津へ原稿を出しに出かけるのでいそいで一筆。

八月二十六日

〔巢鴨拘置所の顯治宛〕

国府津より（封書）

## 八月二十六日 第二十七信

今朝十六日づけのお手紙がきました。東京からお久さんの付箋ふせんについて。

二十二日にこちらで書いた私の手紙はきつと今月の終り或は私がお会いしてから後についたりするのでしようが、このお手紙に、ユリもどつかへ行つて休めとあるので私は大変気が楽になつた。

去年の夏は体がしやんとしていなかつたのに馬力を出したからいけなかつたし又、疲れを休める適当な方法を知らなかつたのでドライブしたりしてしました。

今年は疲れかたのタイプも休むタイプも会得したから、ドライブなどしないし、ここでも日中は日かげでいてつよい光線に直接

当らぬようにこまかく注意して居ります。きのう寿江子が太郎をつれて来て、私の顔色がましになつたと云つてゐる。二十三、二十四、二十五と、毎朝十一時に国府津へ行つて原稿を送り出し、五回の時評が終つて、きょうは休み。

作家が客観的に全面的に押し出されていないと作品においても萎靡いびするというのは眞実です。今日のような社会の雰囲気の中では、この点が實に實に決定的な意義をもつています。どこかに一寸もたれ込むものをもつてゐる人々は、暫く風をいなす氣でそこにもたれて遂にえらいことになる有様です。私は幸、乱作ではない多産の時期に入つて來たらしい様子です。本当に仰云る通り完成をしきつた段階というものはないのだし、自分なら自分という

ものに現れている過渡性が、どういう歴史性を語っているかということが客観的に把握され、その意味を客観的に評価出来るところまで力をつくして生きて居れば、自身の所謂未完成をおそれる理由はないのです。

現在の私は仕事の軽重をよく見きわめて整理して、基本的勉強を怠らず、体を気をつけて、仕事と休養のバランスをつけることです。私たちの生活が段々深められ成熟して、二人をおく条件に阻害されることが益々減つて来るということは何という歓びでしょう。私たちはこうして自分たちの不動な幸福をつかんで行く。そしてつかんだものは決して手離すことなく豊饒になつてゆく。ユリのそのキャパシティーを鼓舞して下さい。

おみそ汁が買えることは知らなかつたからああそれはよかつたと、口の中にいい味がした。沢山は発酵するがすこしづつはきつといいのではないでしようか。私がこしらえた辛い辛いおみそ汁！

Tさんたちのことは、私もいろいろ心配して居ります。いつも互のなすり合い以上のところに原因があることを云つてゐるのですが。——こんど又書きましよう。しかし本当に合点させることは容易ではないでしよう。

私は昨今仕事の参考に必要になつていた『日本文学全史』（東京堂）久松潛一の『日本文学評論史』（上下）等を買いました。何しろ「もののあわれ」「ますらおぶり」が一部のアプ・トウ・

デイトですからね。久松氏の仕事は箇人でだけ問題を見ていく範囲ではあるが、私の欠けている知識は与えます。それから、カルの書簡集の部分などぬけたままになつていてるから、其を補充します。当分のうちに役立てるのが一番有効というのは切実にわかれます。それから、いつか、父の記念出版に私の書いたものについてあなたの仰云つたこと覚えていらつしやるかしら。私があれだけでも書いたというのは云々と私が云つたら、もし書けないのなら云々とあなたの仰云つたこと。思い出して下さい。そういう場合も予想されることはない。私は自分たちの生活と文学的業績に対しては飽くまで純潔であることを望んでいるのだから。大変抽象的大がお分りになるでしょう。とにかくあらわれた形はど

うあろうと我々の生活の成長のためにこそ活用されるべきなのは云わざとものことなのだから。

私の盲腸何とうるさい奴でしょう。此奴こいつのために、私の休養の形は安静、床に休むことになつて来る。おなかの右下四分の一にだけ邪魔ものがいる。きのうきょう、これがバツコしているのです。今月のうちに科学と文学のこと（科学ペ恩）婦人作家の今日（文芸復興）この間ハガキに一寸書いたブルムの結婚觀の批判（婦公）をかき来月から又すこし沢山小説をかきます。ではどうかお大事に。

八月二十八日

「巢鴨拘置所の顯治宛

国府津より（絵はがき

二枚 小田原海岸（一）と小田原駅（二）

（一）八月二十八日午後二時すぎ。

国府津へこの頃通用するようになつた全国速達で原稿を出しに來たついでにバスで小田原まで来ました。この駅の右手にコウズのあの茶屋が大きい店を出している、そこで今御飯をたべようと している、赤く塗つた椅子その他、箱根氣分のところです。国府津からバス20銭。出征送るのでとても大混雑です。

八月二十八日（二） 小田原の御幸ヶ浜に遠い親類のやつてい る宿屋があつて子供のうちよくそこへ来ました。ある正月、チリ

メンの長い袂のきものを着てこの浜の波打ぎわの砂丘に腰かけていたらいきなり砂がくずれて波の中におつこちて本当に本当に死んだと思ったことがあつた。大体ここも海は荒くて入れません。この食堂の隅に老夫婦居り父母を思い出します。

一九三七年八月二十九日

一九三七年八月二十九日　日曜日　晴  
顕治様　　国府津。

きょうは、爽やかな風がヴエランダの方から吹いて来ている。

セミの声が松の木です。海の方から子供らが水遊びをしている  
さわぎの声が活々と賑やかにきこえる。——平凡な午後です。

私は今日書こうと思つていた仕事がすこし先へくりのばされた  
ので、長テーブルの前で風に吹かれつつ、この空気を貴方に吸わ  
して上げたいと沁々思いながら、裏から切つて来たダリアの花を  
眺めているうち、ああ、きょう、あの手紙を書こうと思い立つて、  
これを書きはじめました。この手紙は謂わばすこし風がわりの手  
紙です。何故ならこうして書いている私自身が、いつこれを貴方  
が御覧になるかということについては全く知らないのだから。

それにもかかわらず、私はこの手紙は必ずいつか平凡な体も心  
もごく平穏な一日に貴方に書いて置こうと思つていたものです。

このことを思い出したのはもう随分久しいことになる。私が市ヶ谷にいた頃からです。

健康の力が、私の希望するほどつよくないということ、しかし、私たちは斯くの如く夾雜物のない心で歴史の正当な進展とそこに結びつけられている自分たちの生活を愛し、互の名状しがたい愛と共感とを愛している以上、或場合、私の生きようとする意志、生きる意味を貫徹しようとすると意志と肉体の力との釣合が破れることが起るかもしない。それでも、私はやはり人及び芸術家として、自分の希望する生きかたをもつて貫こうと思つてゐる。芸術家に余生のなきことは他の、歴史に最も積極的参加をする人々の生涯に所謂余生のないのと、全く等しい筈であると思う。私た

ちに余生なからんことをと寧ろ希いたい位のものです。

私はこういう点では最も動ぜず、正当な理解をもつ幸福にある。それでね、私はいつどのように、どこで自分の生涯が終るかということは分らないが、最後の挨拶とよろこびを貴方につたえないでしまうということはどうも残念なの。私は、こうして互に生きていること、而して生きたことをこのように有難く思い、よろこび、生れた甲斐あつたと思つてゐるのにその歓喜の響をつたえないでしまうのは残念だわ。このようによろこぶ我々の悦びを、何とか表現せずにしまうということは。

よしんば永い病氣で生涯が終るとしても私があなたに会えたことに対する、この限りない満足とよろこびとは変らないであろう

し、ボーとなつてしまつてボヤツと生きなくなつてしまふのなんかいやですもの、ねえ。

ああ、でもこの心持を字であらわすことは大変困難です。体でしかあらわせない。私たちを貫く知慧のよろこび。意志の共力の限りない柔軟さ。横溢して新鮮な燃える感覚。愛の動作は何と單純でしかも無限に雄弁でしょう。互の忘我の中に何と多くの語りつくせぬものが語られるでしょう。

私と貴方との境の分らなくなつたこのよろこびと輝きの中で、私の限りない挨拶をうけて下さい。

貴方について私は何の心配もしない。貴方は私のように不揃いな出来ではなくて、美しい強固さと優しさと知に充ちている。私

はその中にすつぽりと自分を溶かしこむこと、帰一させてしまえ  
るのがどんなにうれしく、楽しい想像だか分からないので。も  
う自分というものがあなたと別になくて、間違う心配もなくて、  
離れている苦しさもなくて、一つの親愛な黒子ほくろとなつてくつつい  
ているという考えは、私を狡猾なうれしさで、クスクス笑わせる  
のです。

そして、もう一つ白状しましようか、私の最大の秘密を。それ  
はね、この頃私の中につよくなりまさりつつある一つの希望。そ  
れは、私がさきに、あなたの中にとび込んで黒子になつてしまい  
たいという動かしがたい願望です。だから、あなたがこの手紙を  
御覧になるときはその点でもユリ奴め、運のいい奴！ と私をゆす

ぶつて下すつていいのです。ホラね、と私はほくほくしていくびをちぢめて益きつく貴方につかまるでしよう。

涙をおとしたり、笑つたりしてこれを書いて、海上を見渡すと実によく晴れて、珍しく水平線迄が澄みきつている。

いかにも私たちの挨拶の日にふさわしい。ではこの早く書かれた手紙を終ります

わが最愛の良人に。

ユリ

九月一日 〔巣鴨拘置所の顕治宛 国府津より（封書）〕

九月一日 夜十一時半 第二十八信

林町のテーブルで珍しくこれを書いて居ます。急にバラバラ雨の音がしている。明朝緑郎がフランスへ立ち、咲枝が送りがてら神戸の友達のところへゆく。倉知の俊夫（咲の兄）が召集されて出かけ、従弟の倉知紀ただしが又呼ばれて出かけ、春江の良人河合（咲の義兄）があぶないと云う工合で、この頃の空気がつよく反映しています。

さて、昨日は疲れていらしたところを却つていけなかつたかもしませんでしたね。口がお乾きになる様子でしたね。しかし、秋になつて気候も落付いたら追々きつと調和が保てて来るでしょう。理想的に行かないにしろバランスがとれるようになるであろ

うと確信して居ります。

きのうはもう時間がなかつたので、けさ予審判事にお会いして、  
体に関する条のことお話しておきました。それに関する部分だけ  
のこととして私の理解に立つて。

本とりそろえて最近にお送りします。私は明夕又国府津へ行つ  
て六日頃まで居るつもりです。菊池、越智氏のことは島田のお母  
さんに伺つて一番手近い機会にすつかりすましてしまいましよう。  
きのうは本当につかれた様子をしていらしたし、いかにもおな  
かの気持がさっぱりしない風でした。其でもあなたの心持がやつ  
ぱり相変らず平らかで、笑顔も暖く励ます光をもつてゐることは  
本当に本当にうれしい。私たちはいろいろのことから健康を失つ

てはいるが、私たちに健康を失わせた人生の経験は、私たちに不健康の中でも、互の笑いに輝きあらしめる力を与えているというは何と微妙であり意味ふかいことでしょう。病氣であるのに猶且つ健康な人々の心のはげましになり、生きかたのよい刺戟になり得る。私も及ばずながら病氣したつてそういう風に病氣をしそれを克服してゆこうと思います。

では又ね、ゆつくりいろいろ書きます。どうかおなかのブツブツが早くましになれ！

九月四日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　国府津より（御幸ヶ浜海水浴場の絵はがき）〕

九月四日、四五日いなかつた間に国府津はすっかり秋めいて來ました。御氣分はいかがですか。おなかのいやな心持はずつと同じですか。私は盲腸がつきものになつてから、そのおなかの感じがややわかります、眉のところへ反射して来るようなあの感じ。お大事に熱は下りましたか？ 涼風が立つてしのぎよくなつたらとたのしみです。ジヨルジユ・サンドの「愛の妖精」というのをよんだ。一種のお伽話とぎばなしですね。

九月十一日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

## 九月十一日 第三十信

非常に荒い天候ですね。きのうの雨のひどさ、きょうの風のきつさ。南風だから落付かぬ。お気分はどうでしよう。本当に早くカラリとして秋になればよいと思ひます。そしたらさっぱりとなるでしよう、そう思う。本年の残暑のきびしさには鬼も力クランを起した位です。

さて私は八日の朝、国、咲、私と三人で国府津からかえりました。出征する若い兵士とのりあわせ、東京まで来て、一寸林町へより、南江堂へ来ている本をとり面白へかえりました。家の方はSさんのお母さんが来ていてくれたので全く安全。どうしても栄さんの顔が見たく電報を出して夜来て貰つたが、ほかにも忽ち数

人のお客様です。あなたに手紙を書きかけたのがそれで中絶。次の日は、いろいろな人に入れてやるものを持ち造りしたり、夕飯を戸塚の夫婦栄さん夫婦とたべて夜いろいろ物語。

きのうは雅子さんが真黒に日にやけ、体のしまつた形で保田からかえつてきました。勤め一ヶ月休み月給もらつていて、又つとめるのです。今度は仕事ぶりを整理してすこし疲れを減らしたいと云っていますが、うまくゆけばよいが。――

島田のお母さんから先日伺つた菊池、越智氏のことについて御返事が来ました。お母さんのお話では、あなたの思いちがいでいらっしゃるようですよ。当時あなたがひとのでもあつたのではなかつたでしようか。

それから島田と野原の負債の表をつくるようにとのことで、私  
こまつてしまつてているのです。それはね、お母様が手紙はあなた  
へおつたえしたら置いておいてくれるなどおつしやつたので、又  
材料がなくなつてゐる。そう度々きいて上げることも出来ず。ど  
うかあしからず。

野原の方も、このお手紙によると買手が二三人ついたそうです。  
そして主屋おもやとその敷地ぐらいは十分のこる勘定になるそうです。

そう例の爺さんがお母上に申した由です。大変結構です。あなた  
もいろいろ配慮してお上げになつた甲斐があるというものです。

お父様、すこし心臓が弱くおなりになつたらしい。私は十月一  
杯はどうしても動けないがそのうちに又折を見て、今度は短い期

間お見舞に行こうかと思つて居ります。お目にかかるれば本当に本当によろこんで下さる。相すまない程うれしがつて下さる。もうすこし近かつたらねえ。でも十月以後にはどうしても一遍ゆくつもりです。そして行つたら野原と島田が負債のことで感情的になつてゐるようなことのないよう、よく大局的に話して来ようと思ひます。一人一人の生活態度に對して抱く批判と、家と家との心持とは一つものではないのだから。

私は一つ感想をかいて、それから又小説。国府津には、出征した従弟のことや何かで四日東京へ戻つて前後七日と五日いたわけですが、それでも今度は『報知』の月評、『科学ペ恩』、『自由』とみんなで五十五枚ばかり仕事したからよかつた。八月は体が苦

しくて能率低下と思つたが、それでも八九十枚の仕事はしていま  
した。しかし、私は様々沢山仕事をしている人の仕事の質をも考  
え、自分の仕事はどうかして質量ともに高めたいと切望します。

同一水準で沢山かける、これでは悲しい、我々の年や業績の歴史  
から云つて。やはりのろくとも前進しなければ。よく眺めている  
と、作家でも、日常性というものを健全に把握せずそこへ足を漬  
けている人はすこし作品が調子にのつてつづけて出ると忽ち下ら  
ない日常の描写になつてしまふのは、實に教訓です。そして、そ  
の人々に日常性に浸ることと無条件肯定の誤りを誤つたところで、  
それはインテリ性という風にだけ感じるところ、何と微妙でしょ  
う。いつかのお手紙に作家の理性をも科学的に育てることその他

實に真理であつて、しかもそれを自身の心臓で会得することの必要を知つている作家、又知ろうとする作家、實に尠い。今日は複雑な理由によつて作家センチメンタル時代です。芸術家としての勇気とか献身とかいうことさえ實質不明瞭の感傷でうたわれて居ります。センチメンタルでないとピツタリ来ないと云つた風で、こまつたものなり。読者のみがセンチメンタルでないとこころが今日の文学的特徴です。

壺井さんもしかしたら又失業しそうです。鶴さん相変らず。この間の晩皆が呂々よろしくとのことでした。稻ちゃんいそがしくて保田からハガキも上げなかつたがわるかつたとしきりに云つて居ました。

ああ何と風がひどいでしょう。書いている紙の上に天井の塵が  
おつこちる。では又書きます。医術の本でも何だか苦笑し腹の立  
つような非科学的な類別をする者がありますね、南江堂の本の終  
りの部分「自注」。呉々もお大切に。酸っぱい果物がよくない  
ことは知りませんでした。

「自注」南江堂の本の終りの部分——南江堂出版の結核に  
関する医書に、思想問題をおこす人間は多く結核患者だとい  
う独断が書かれてあつた。

九月十七日午後　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

## 九月十七日 第三十一信

きのうは本当にいろいろと、ほんの一寸した小さな事柄まで珍しく嬉しく、そのうれしい波がきょうまでも響いて体の中に流れているようです。久しぶりであなたの身ごなしに特徴である闊達な線の動きも美しく見えてつよく印象にのこります。一昨日は非常に苦しい心持であの壁の外からひきかえしたので、どうしても真直家へ引かえす気がせず、戸塚へまわって、防空演習の暗い灯の下で白飯をたべてかえった。昨日は朝七時半から出かけていて、一昨日の気持のつづきで、すこし気の晴れる方向へ事が進んだので、どうしても一寸よつて見たく雨のひどい裡を行つた。でも本当にびしょぬれになつた甲斐があつてうれしかつた。かえりに又

長い長い高壁に沿つて、ザツザツと傘に当る雨の音をききながら歩いていて深く一憂一喜という心の動きかたを感じました。勿論其は当然であるけれども。しんでは安心して居ると云うか、何かもかく不動の土台がある。しかしその土台に、殆ど高く鳴り響く波動を打つて苦しい心配やその心配をめぐつての様々の考え方やが動く。土台はそれでもわれることはないので凝じつとしたまま益激しくつよくその波動にこたえてゆく。この感情は人間に日常的な時間の観念を失わせ、日常の社交性を失わせるようなものです。けさは、きのうのつかれが出て、九時に一度目をさましてから、又ベッドに戻つて心愉しさの中で可笑しい夢を見て、その夢の中ではあなたの肩と横顔と目差しばっかりを見ました。あなたの紺

絆を着た肩のまわりには、あなたを歓迎している人たちが沢山居て私はこっちから近よれない、あなたはこっちをちょいちょい御覧になる。そしてそこは田舎でね、馬蹄型の山路も遠くに見えた。  
可笑しい夢！

夜着は、きのう注文しておきましたから、二十日にはお届けします。

夏の間じゅう下の四畳半を勉強部屋にしていたのだが、飽き果てたので、二三日前から二日がかりで、又二階へテーブルをもち上げました。この二階は六畳きりで二間南があけっぱなし。東の方へ机を向けないと形がつかず、そうすると右手の書いている方から光線が入つて紙にかけをつける。南へ向つてはのぼせ過ぎま

すから。――

私は勉強部屋だけはすこしゆとりがあつてその部屋の中をいろいろ考えながら動きまわることの出来るところが欲しい。本気になつて来ると私はひとつと話もしたくないし顔も見たくなりなるから。

島田へは年内には是非ゆきます。十一月に入つてゆけるようになるだろうと思います。フタの浮いたお風呂を思うとクスクス可笑しい。全くあれは奇妙なものね。あの風呂は長湯出来ない。心持から。あなたの鳥の行水も子供のときからああいうお風呂だからではないでしようか。

高校の賄まかないのことその他は訊き合せて見ましょう。この一二三日持

つて歩いて大仏次郎の「由井正雪」をよみました。前、中、と。  
これはこの作者の傑作の一つです。最近「雪崩」を出したが、こ  
ういう現代の性格を扱うと破綻だらけでポーズが見えて、大衆小  
説というものが本質にいかに非芸術性を含んでいるかということ  
の悲劇的典型に見える。しかし、由井などは筆もこまかく心理も  
それなりにふれていて、筋の説明ぬきの飛躍、あまりの好都合等  
を許せばなかなか面白い。一面、世間師であり、それを自覚し、  
しかもそこでしか生きる点がないと思つてゐる由井の心持など、  
少しさ歩み入つて描いていて、これと「雪崩」を比べると、大家  
にならんとする前の作者の脂のりかたと、大家になつて年経た  
後の氣のゆるみ、金のたまり工合、いろいろ教訓になります。大

仏という人は由井の扱いかたで一直線にゆくと或は純文学に入つてしまつたかも知れない。彼の賢さがそこを引しめたから今日大作家であるが、同時に引しめたところで芸術的発展の線の切先を下向せしめた。自分と世間がわかりすぎる、これが大仏の弱さです、芸術家としての。彼は遂に「上品で優雅な氏」で終るか。そして、日本文学史の上に私は実に面白く思うが、山本有三にしろ大仏にしろ、昭和五年から七年までの間に彼等の最優秀作の一つを出していることです。その理由を何処に見るでしょうか。私は面白くて仕方がない。自分がこの期間に文学の上で猛烈に自分を外面的に破壊したことを思い合させ。文学における科学性の問題の史的展望についてこの頃この方面での勉強のテーマをもつてゐる。で

は又。どうかこの次もきのうのようなあなたにお目にかかるよう。お大事に、お大事に。

九月二十一日　「巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（演劇「アンナ・カレーニナ」の舞台写真の絵はがき）」

九月二十一日、夜具をおいれしました。これは本月の新協のアンナ・カレーニナ。右端が原さんのドリイ。膝をついているのが細川ちか子のアンナです。カレーニンを滝沢がやっている。性格をちつともあの冷たい粘液質においてつかんでいない。演出は良吉。壺さん夫妻、いね、私、かえりには泉子さんを待ち合せて初

日のお祝に新宿のむぎどろをたべました。御気分はいかが？　き  
ょうはむしゃあつかつた。二十五日から夜更けの円タク流しがなく  
なるので不便です。

九月二十四日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

九月二十四日　第三十二信

こういう紙に書くと、目方が重くて不便なので、普通の紙を買  
うまで待とうと思つて居ました。ところが、今午後三時、二階の  
壁に向け、南を左にして斜かいの西日をカーテンで遮るようにし  
た部屋の机のところに、全く快適な柔かい光線がさしている。ゆ

うべから、夜中にもおきて書きたかった手紙を、もう迎ものばして居られない。光線も、あたりの静かさも私の心にある熱もすべてが紙に私を吸いよせる。（何だか靈感的な手紙でもあるような  
勿体ぶりかた！）

さて、御気分はいかが？ 私の目にはこの間の御様子があざやかであるから、何だかあれからずつとあの調子でいらっしゃるようになります。この手紙を御覧になつてすこししたらまたお目にかかるわけです。私は十月の五六日までこれから死物狂いなの。小説です。文芸。『文芸』では長篇をずっと年四回ぐらいずつのことになりました。私は云つてるのでせ切つて御覧なさい、文芸は一つの功績をのこすから、そのように私もがんばつてよい

ものにするからと。大体見とおしがついてうれしい。但金には殆どならない。今日長篇をのせ切るのは、結局文芸専門のものでしょう。仕事がまとまればよいとして考えて居ります。

この間お目にかかつたとき、実は私一つ大変な秘密を抱いてひとりでホクついていたのです。自分から嬉しい一種の感動でつい口へ出しそうになつたが、やつと辛抱してあなたのお誕生日の祝いまでそつとしておきました。せん先、お互に話していた名のことね。十月から本名に全部統一します。そのことを親しい連中にも話した。長篇が終つて本にするときとも考えていたが、この長い大仕掛けな仕事が終るまでと何故のばすのか、自分の心持に必然がなくなつた。それでつまり十一月号の書いたものすべてから宮本百合

子です。あなた又ユリバカとお笑いになるでしょう。でもこれは全く私の生活の感情のきわめて自然な流れかたなのだから、私は自分でもうれしく、特に私がこの半年の間に、いろいろの心持を歩んで、ここへ来ていることそのことがうれしい。だから今度はあなたからお断りをくつても、私はでもどうぞという工合なのですからどうぞ。私は結局はこれまでの年々に何かの形であなたのお誕生を記念して來た、その中で外見は一番形式的のようで、実質的なおくりものの出来たのは今年であると思ひます。そして、そのような可能を与えて下すつたお礼を心から申します。仕事から云つても私はこういう成長に価していることの確信があります。私たちは字を書いたり、短い時間に喋つたり、そんな形で互の心

持をつたえなければならないのだけれども、こう云つてゐる私の心持のあなたへの全くの近さ、ふれ工合。それを字でかくことはお話のほかにむずかしい。おお、私はここに、こんな工合にしてものを云つてゐるのに。

私がこんなに歓びの感情を披瀝<sup>ひれき</sup>するのは、あなたに唐突でしょ  
うか。そうではない。でも、私のこの心持がわかるであろうか。  
このよろこびの中には何とも云えず新鮮で初々しいものがある。  
又新しい青い青い月の光がそこにさして來てゐる。私は書きながら涙をこぼすのよ。人生というものは、其を深く深く愛せば愛す  
ほど、何と次々へと貴重なおくりものを私たちに与えるのでしょ  
う。この私たちの獲ものが食べられるもので、あなたのおなかへ

入つて、すっかり体の滋養になつたらさぞぞぞいいだらうのに。  
ではこの手紙はこれでおやめ。私のおくることの出来るあらゆる  
挨拶であなたを包みつつ。

九月二十五日　「巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（鍋井克之筆  
「二筋の川のある村」の絵はがき）」

九月二十五日、文房堂で買った二科のエハガキ。この画は本当にこういうところがあつたのでしょうか。夢でしょうか。そう思わせるところにこの画家のこの絵での狙いどころがあつたわけと云うべきか。昔このひとは遙かに精悍がありました。これは芝

居のや をもつたかきわりの如し。もう一つの東郷湖という風景も同じように或趣味に墮している弱さがある。

九月二十五日の夜。

〔向井潤吉筆「伐採の人々」の絵はがき〕

この絵を眺めていると、コムポジションを一寸工夫するともつと生活の雰囲気とスケールのある絵になると感じられますね。もつとも前景の一かたまりの人間と、その奥の木を引っぱる一列の人間との間隔が、雰囲気的にアイマイにしか把握されていない、だからクシャとしている。実物は果していかがや。まだ見て居りません。十月最後に見られれば見ます。御体をお大事に。

九月二十八日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（鍋井克之筆  
「梅雨時の東郷湖」の絵はがき）〕

九月二十八日夜。

はじめの頃の単行本を、製本しなおしてお送りいたします。す  
っかり古くなつてこわれてしまつてゐるから。鎌倉へゆくと頼朝  
公御六歳のしやりこうべというのがある。「一つの芽生」などと  
いうのを見ると、自分の御六歳のしやりこうべのようで、フーフ  
ー。でもその小猿のしやりこうべのようなものもお目にかけます。  
何卒幸に御笑殺下さい。

九月二十八日夜十二時。　〔宮本三郎筆「牛を牽く女」の絵は  
がき〕

大変おそらく書いて、しかられそうであるけれど、今、きようの  
分だけ仕事を終つて比較的満足に行つて、一寸あなたとお喋りが  
したい心持。お茶を一緒にのみたいとき。原稿紙の上に、こまか  
い例の私の字でごしやごしやと（一）（二）という下に書きこん  
であつて、そこから様々の情景と人々の生活が歴史の中に浮上つ  
て来る。何とたのしいでしょう。私は『あらくれ』や、『新女苑』  
や『婦公』に、新しい署名のものを送つて、たつぱりして仕事し  
ている。

十月一日 「巢鴨拘置所の顕治宛 目白より（国枝金三筆「松林」の絵はがき）」

十月一日の夜。仕事が熱をもつて進んでいる。雨だれの音。鶴さんが工合をわるくして心配しましたが、もうややよろしいらしい。あなたはいかがでしょうか。雨つづきで気分がさっぱりならないでしよう。

この仕事を五日の午<sup>ひる</sup>までに終つて、六日はお目にかかりにゆくのを御褒美のようにたのしみにして、せつせとやつている。ミシエルというフランス人がモンパルノという小説を書き、今大家であるモジリアニが一枚たつた六フランでパン代に売った絵が一年

後一万一千フランで売られたことなどかいていて、いろいろ考えさせます。

十月九日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　広島駅より（広島駅の絵はがき）〕

十月九日朝五時四十分。広島でののりかえ。このあたりでは構内のランプもすっかりくらくなっています。兵隊さんがこの食堂にも沢山。雨はやんでいます。七日の夜は仕事を片づけるために眠れなかつたので、八日の三時に立つたときはフラフラ。十時頃までウトウトしていて、寝台が出来たので五時間ばかりよく眠り

ました。馴れたのでこの前より近いように思います。島田でびつくりなさいましょう。

十月十一日 「巢鴨拘置所の顕治宛 山口県熊毛郡島田村より  
（封書）」

よく晴れたお天氣。今お父さんはお休み中。多賀ちゃんがおひるの支度をしている。お母さんはどこへかお姿が見えない。私は店で新聞をよんでバットを一つ売つて、今上つてきてこれを書いているところ。

きのう八時四十何分かについて、改札のところを見たら多賀ち

やんがでていきました。小さいトランクと中村屋のおまんじゅうを入れた風呂敷包みとをもつて出たら、きょうは防空演習だからといつて、いきなり自動車にのせられてしまった。達ちゃん、消防の服装（ポンプの小屋へ）で出ていたそうです。ちつともわからなかつた。

お父さんは大よろこびでいらつしやいます。思つたよりいい顔の色をしていらっしゃるし、舌が實にきれいでびっくりするようです。夏は何しろひどい暑氣だつたので心臓が苦しくおなりになつたそうですが、今は御飯も大きいお茶碗に二つ（おかゆ）をあがります。間食はなさらず。春のときからみると、お体は軽くおなりになつたし、気分も自發的なところが大分減つていらつしや

います。それでも昨夜私が何か云つてふざけたら皆笑い出して、お父さんも、一緒に大笑いしていらしつた。気分はやはり非常におだやかです。お母さんが、顕治の知つている頃のお父さんじやつたらどんな我儘わがまま云うてじやろと思つてているだらうとおつしやつています。おとなしい、いろいろ気になさらない。すこし、お母さんや内輪のものにはカンシヤクをお起しになる位のことです。御気分が平らなのは何よりです。きょうこれから野原へお墓参りに行つて来ます。野原の方は四百五十円ばかり不足しているかぎりで家と土地とが十分のこる由です。かり手がついて来るから家は小学の先生にでもかして、おばさんや富美ちゃんたちは富雄さんの方へ引うつつて世帯を一つにしようという計画とみえま

す。富雄さんのこれまでいた店が駄目になつて（つぶれた）日米証券へ入つている様子です。

こちらもずっと平穏にやつていらつしやいます。大していいということはない。やはり不景気だそうです。でも手堅くやつていらつしやるから。——隆治さんは今年は二十歳なのですね。この六月かにケンサがあるのね。私は間違つて一月に入営かと思つて居りました。春のとき何だかそんな風に間違つて覚えて来てしまつたのです。六月にケンサならまだ間があります。

あなたが中学の一年生だつたとき、よくつれ立つて通つた中村さんという人が戦死されました由。河村さん「自注<sup>18</sup>」のところでは夜業つづき。島田から四十二人一時に出で、總体では七八十

人の由です。野原からかえつたらこのつづきをまたかきます。お  
お眠い。けさは十時まで眠つたのにあたりが静かで、気がのんび  
りするものだから、眠い眠い。つかれがでてきてしまつたのです。  
きつと。

きょうは十一日。小春日和。

きのう野原からは夜八時半頃かえりました。皆よろこんでいて、  
くれぐれあなたによろしくとのことでした。今あの家には小母さ  
んと富美ちゃんと河村さん（小母さんの弟さん）とその姪といっ  
方とです。河村さんは下くだまつ松の方につとめ口が出来て、あつちに  
家が見つかり次第ゆく由。下松は借家払底で、一畳一円で家がな

いそうです。河村さん、あなたのお体について心配していました。  
くれぐれもお大事にと。

野原の小母さんは家がのるので本当におよろこびです。私たちもよかつたと思います。小母さん曰く、いつか二人でかえつて来てくれてもとめるところがあつてうれしい、と。ハモの御馳走になつたりしてお墓詣りをして、かえりに切符をかつて来たら、お母さん、もし都合がついたら琴平さん「自注<sup>19</sup>」へ詣でて来たいというお話です。来年の秋でもゆつくりおともしましようと言っていたのですが、もし達ちやんが召集されでもしたらというお気持もあるので、急にお思い立ちになつたのでしょうか。今時間表をしらべているところです。

お母さんも永年のお疲れで、この間腎盂炎をおやりになつてから、すつかり御全快ではなく、台所の仕事などでも過労をなさるといけない御様子です。今は多賀ちゃんが手つだつてているから大丈夫ですが、きのうも野原へ行つて、すつかり多賀ちゃんに手伝つて貰うようよくたのんでおきました。

春からみると何か全体がしづかになつてゐる。お母さんは余りこれまで御丈夫でなかつたし、御無理だつたから、すこしこの際お<sup>いたわ</sup>労りになる方がよいのです。そちらもこんなにいい天氣でしょうか。どうかお元気に。若い連中も元気にやつて居りますから何よりです。では又。

「自注18」河村さん——島田の宮本の家の向いの一家で、病父がその人のリヤカーにのせてもらつて相撲や芝居見物に行つたこともある。

〔自注19〕琴平さん——讃岐の琴平神宮。

十月十二日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　山口県島田より（琴平名所の金比羅高台より讃岐富士を望む絵はがき）〕

十月十二日。こういう景色が山の頂上から見晴せるわけだつたのですが、雨で濛々<sup>もうもう</sup>。平野の上にもくり、もくりと山が立つてゐる、この地方の眺めは或特色があります。屋根を藁<sup>わら</sup>でふいてい

る、その葺きかたが柔かくて特別な線をもつてゐる。人気はよくない。善通寺というところも通りました。松山へは時間がなくてゆけず。いつか又別に参りましよう。道後にもゆきたい。ぜひ行って見たい。小母さんのお伴で琴平も見たわけです。

十月十五日夜 〔巢鴨拘置所の顯治宛 目白より（封書）〕

十月十五日 夜 小雨。

今夜は愉しい夜の仕事。——十四日の夜八時二十一分かの上りで島田を立つて十時四十分頃広島。そこで一時間余待つて、夜中の〇時二分の特急ふじで十五日、きょうの午後三時二十五分東京

着。寿江子と栄さんが迎に来てくれていて、その足で裁判所へまわり、島田の半紙へ書いてもつて来た許可願に印を捺して貰いました。あしたお会いするために。そして目白へかえつて来て、お土産の松茸まつたけだのくりだのを皆にわけていたら、留守番をしていてくれた雅子さんがお手紙を出して來た。

栄さんがかえつてから、二階へあがつて来て、一週間ぶりに机に向い、くりかえし、くりかえし、又うち返して読んだ。本当に手紙は食べもののようにです。味う。味う。

それは九月一杯はこういうリフレツシユメントがなかつたから、むさぼる如き心持です。でも決して工合のわるいときを押してまで書いて下さらないでもよい——（然し、出来るだけ手紙は書こ

うと云つていらつしやることの上に立つて、一寸分別臭く云つて  
見ます。）

島田で書いた手紙のように、お父さんは私の云うことともおわから  
りになりますし、別れの御挨拶をするといかにもお心のこりの風  
でこちらが困るような感情もおあらわしになるが、やはり公平に  
見て春よりはお弱りです。それでも実にきれいな舌をしていらつ  
しやる。あれでもつていらつしやるのでしよう。行つてようござ  
いました。お母さんも琴平へ強行的小旅行をなさつても次の日腰  
が痛い位のことでお元気ではあるが、私は呉々お金よりも体、と  
いうことを念頭にお置きになるようおすすめしました。あなたも  
この次お書きになるときには呉々もそのことを仰云つて上げて下

さい。

例えは私が島田へ往復二等にする。そのことが体のために必要であるということを実感としておわかりになつたのは、今度の四国ゆきの御経験からです。それまではゼイタクと思つていらしつたことを、御自分で云つて笑つていらしつた。体を大切になさることが島田の家のために重大であることをよくおつしやつてあげて下さい。こちらから又腎孟炎のための薬、暖い下着、夜具などお送りいたしますから。

私が野原へもゆき、十三日には野原からも島田へ来られ、先頃じゅうのもしやもしやも一応調和状態になつて居りますから御心配なく。多賀ちゃんも島田で手つだつてくれるつもりで居ります

し。私も今度は盲腸も痛めずかえりましたから御安心下さい。この頃割合にましな方です。あなた野原の克子と富美子ととりちがえていらっしゃるのではないかしら。一人前の手紙をかくつて。

克子は一番の姉娘です。この間あげた手紙の主は富美子よ、今小学の六年生の。いつぞや私が間違えた高校時代の賄のことはよく申上げてきました。お母さんはもうすっかりお忘れだから鶴さんの返事をまちましよう。経堂辺に住んで出版屋につとめていられるらしい風です。緑郎、寿江子、友達たちへのおことづけは皆申します。稻ちゃんのところでは鶴さん又盲腸らしい由。十七日には御飯一緒にたべようとしたのしんでいたのに。――

このお手紙にもある大きい平安の気持。私には非常によくわか

ります。日常の便宜性に關しないといふその性質も。我々の生きてゆく道について考えるとき、その心持は私の心にも實に充滿して来る。互を流れ交している水が噴水のように粒々となつて、ひろびろとして或微妙な輝きをもつて照つてゐる水の面へ落ちてくる。その複雜な、優しさと勁さと無限の的確さをもつた粒々の音。心の耳を傾けて聴けば聴くほど美しさの底深さが迫つて来るような音とひろがりの感覺。この裡には何という歡喜と苦痛とその苦痛さえも熱愛する情熱がこもつてゐることでしよう。私は、この名状しがたい感覺を、自分の芸術家としての成育の上にどこまで摑取出来るだらうかと思うことが屡々『しばしば』です。何故ならこの緊張したその極点にあつて鳴り出すような人生の美感はある

まり強くて、それを芸術家魂で支えるには、よほど素晴らしい芸術的稟質が必要であるから。おわかりになるでしよう？

ユリがこのような人間的豊饒さへの過程と作家的成熟とを、一定の土台の上に立つて極めてリアリスティックに、十分の歴史性をもつて客観的に完成させようと努力していることは。そして決して其はたやすいことではないのだから。容易に完成するには余り私たちの生活に豊富なものがありすぎる。それにおしつぶされないように。おお、それは逆も猛烈な作家的自己鍛錬です。感動を感動としてその中に主観的に没入することは一定の情熱の量をもつたすべての過去の芸術家が生きふるして来た道です。謂わば息絶えなんばかりの心持を、新しい客観的な価値として、芸術的

にこの現実の中に再現してゆくこと、其は實に實に大仕事です。

本当に、昔の芸術家の感動はその人だけの幅で流れた。今日は世界の振幅をもつていてる！ この幅、つよさ、錯綜、それが一人一人の中に鳴り響いている、その姿を描くこと。やつとそろそろ鳴り出した私の交響楽はどこまでその響かすべき音響を奏し切るでしょうね。

十月一杯に五十枚ほど今日の文学について書くことがあり、それを終つて又小説にとりかかります。長い小説というものはまことに書くべきものです。その中で作家は成長し得る。

お体について、私は最も苦痛な心配というような気持をこここの峠ではのり越えたような気分です。これから無理さえなかつたら

やや平穏ではないでしようか。あの暑氣であつたもの、たまつたものではなかつたのです。冬は却つてましです。風邪さえひかないようになされば。

私は今あなたからの手紙を、この紙に半ば重ねるようにして左手に並べておいて、読んでは書き、書いては読んでいるのですが、字というものは何と肉体的でしよう。ここに簡単に百合子と書かれている。三字のよびかけに無量の含蓄がある。或人によつて或場合書かれるわが良人へという宛名は、良人へという一般的な代名詞にしかすぎず、而も他のあるものにとつてはこのたつた五つの字が存在の全幅にかかわつてゐる。生存の根に響く内容をもつてゐる。人間の心のちがいの面白さ。

今夜はもうこれでおやめ。今頃は何の夢？　夢なし？

十月二十五日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

十月二十五日　第三十三信ぐらいでしよう？

今年は実に雨の多い秋でした。きょうは珍らしくいい天気、きのうは日曜日で私たちとしては本当に珍しい一日をすごしました。戸塚の母と子供ら二人、栄さん私、井汲さん母子という顔ぶれでピクニツクしたのです。私はもう五年も前にそういう遊びに出たきりだったので、珍しく、頬つぺたは大気の中ですこし日にやけてピチピチしたような気分で、夏以来の気分のしこりがとけたよ

う。

行つた先は池袋から東上線というので朝霞。<sup>あさか</sup> 薯掘りです。曇つていたので、どうするか分らなかつたが、大きいお握りや島田から頂いて来た玉子の茹<sup>ゆ</sup>でたのをもつて池袋へ出かけたら、戸塚の子供二人が母さんをひつぱつてピンつくやつて來た。

朝霞はいかにも平凡であるが武藏野の起伏をもつた地形で、薯掘りはおどろくなれ、そこにある寺が世話やきなのです。バスに一区のつて山門の石の標<sup>しるし</sup>が見えるところへ来ると、左手の広い畑の面に一ヵ所こちやこちや色とりどりの人間のかたまりがある。薯掘りなのです。山門を入つてゆくと、そこの亭<sup>ちん</sup>、そこの松の木の下に棧敷をはつてフタバ幼稚園、何々小学校、特殊飲料組合と

びつしり。本堂の右手に紙を下げる薯掘案内所。一坪十六錢。う  
 ねが一本の三分の二位。私たちはそういう休處へはわりこめない  
 から、石段を下りて名ばかりの滝のあるところに丸鬚の百姓小母  
 さんの出している茶屋の床几を二つくつけてそこで休んでお握  
 りをたべ、實に呑氣(のんき)で、間抜けピクニツクなところに云いがたい  
 味があつて、神經の大保養になりました。やがて又山門の外へ出  
 て、畠道をゆき、薯掘りにかかつたが、井汲さん親子一生懸命掘  
 るわ掘るわ。健造も面白くて二坪買つたのでは掘りたりなく、じ  
 やあもう一坪買つておいと云つたら、ありがてえなアと云つた  
 のには爆笑してしまつた。

広い畠の眺めの上にごちやごちやした狭くるしい人のかたまり

を見ると、いかにも東京から来て買った烟をせせくつてゐるようで、可笑しいが、ごそごその中に入つて、はだしになつて健造のもて扱つている薯を掘つてやつたりしてゐると、やつぱり薯掘りは掘るべきものなりというようなところでした。

団体には景気のいい世話役がついてゐるのがあつたりして、庶民の秋の行楽の一つの姿がある。かえりは薯をわけ、それぞれにかついだり背負つたりして、ブラブラ十何丁かる駅まで歩いて來た。

そしたら余り駄がひどい人なので、すこしすくのを待つ間、広告でもう一つの名所としてある日本第二の大梵鐘だいぼんしょうというのを見物に、自動車へ満載で行つた。ところが、そこは寺でも何でも

ないトタン屋根の大作事場で、その梵鐘の発願人根津嘉一郎。大仏もこしらえかけてある。職人が働いていて、その仏師の仮住居らしい竹垣の小家の前にはコスモスが咲いている。根津はこの梵鐘を精神凶作地の人々におくるための由。大仏もつくり、名所にして金が落ちるようにする由。根津とこの土地とはどういう関係があるのかは不明でした。

家へかえったのは六時。稻ちゃんのところで夕飯の御ちそうになり。ぶらりと時々山や野原を歩くことの必要をしみじみ感じました。少くとも稻や私には実に必要です。くたびれは大したことなかつたけれども、眠つたら夢を見ました。シンプソン夫人の旦那様が三越で女の振袖を買つてているところでした。

二十七日に渡す原稿を終つてお目にかかりにゆきます。M子、  
体がもたないので社を一週に二三度出ることにして、原稿だけ送  
るようになりました。月給は、きょう貰つて来るのだが、二十円な  
らしい方。食えない。うちで食わす。食わすることに異議はないが、  
私の心持にはそれ以外の重みがかかつてこまるから、何とかした  
いと考え中です。

掛布団の工合はいかがでしょう。島田へは、もし達ちゃんが召  
集されると、それからでは間に合わないから、真綿でこしらえた  
チヨツキと毛糸の靴下二つ送りました。お母さんが召すために長  
襦袢の布。あなたの腹巻のための毛糸、そして明日あたりお母さ  
んに、あなたがこの冬かけていらした夜着をつくり直してお送り

します。お母さんは達ちゃんに軟かい夜具をきさせて御自分は私が称して石ブトンというのをつかつていらつしやる。この冬はお体もすこし疲れが出ていらつしやるからすこしは軽い思いをなさる必要があります。夜中に二三回お父さんの御用でお起きになるし。隆ちゃんがとなりに寝てあげています。

名画工ハガキはつきましようか。輸入禁止になるので特別にお目にかけたくてお送りしたのですが。では又お目にかかるて。きょうはまだ眠たい、大体この頃眠たくて。あなたもよくおよれますか

十月二十九日　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

## 十月二十九日 第三十四信

きょうは暖い天氣です。天氣が暖いばかりでなく暖い。体の内に何とも云えない暖かさと安らかさとがある。こういう気持、何と久しぶりでしよう。

きのうはあれからかえつて、お昼をたべて、それからお客様に会つて、眠りました。朝あの時間にゆくためには、前晩おそいといつも眠い。（前の日に『婦人公論』へ刻々の課題という女のきようの生きかたについて書いたので）目がさめたら五時。五時半から中央公論の故瀧田樗蔭十三回忌あり。私も発起人の一人。ゆこ  
うかゆくまいか。紋付着て帯しめて苦しい。それでも決心して出

かけました。徳富蘇峰、桑木嚴翼、如是閑その他という顔ぶれ、作家では秋声、白鳥、春夫、弾、久米など。女の方では瀧田さん時代の人俊子、千代、私、時雨など。いかにも東京会館向なり。蘇峰、如是閑、しきりに瀧田の思い出のなかに私の名を引き合いに出し、何だかてれてしまつた。何も瀧田の人物鑑定眼を裏づけるに私だけをとり立てて云うには当らないのですからね。好意からとわかっているだけれくさかつた。

かえりに俊子さんのところに一寸よつて喋つて、十二時になると円タクの流しがなくなりガレージから反対の方角に行くときは猛烈な価になるのであわててかえつてきました。

ところで、うちのおひき君、きのう日向に自分のふとんを干し

ました。ポンポコになつてゐるのをかついで二階から降りてゆくから、おひささん、そのふとんで今夜早くグースーねるの考えるとうれしいだろう？ と云つたら、ええ、うれしくて黙つて居たいようだ、と云つた。何という感情表現でしよう。實にその気持端的にわかる。私は非常に感服しました。

きょうはこれから勉強して、来るべき文学について何か書く。

これは一口に云えぬ題です。文学に近頃場所をとりはじめているルポルタージュといふもののリアリティーが来るべき時代の目はどう見られるか、又ルポルタージュの真価とリアリズムの問題もあり、そのことをすこしつきつめて見て見たいと思います。ルポルタージュというのは若干の地方色と抽象名詞の羅列ではない筈

のものですから。直さんなどこの理解に於て房雄君と全く同じである。

九月一日の『ダイヤモンド』明日お送りします 松山さんの絵の本も。松山さんは満州旅行をしてスケッチをいくつか描き須山計一さんと展覧会をしました。私は月賦でチチハル辺の醤油屋の店をかいだ30円の六号をとり、今机の右手の壁にかけてあります。松山さんまだ下手です。それでも好意のもてる絵で、眺めて感じる親しい未熟さ（技術上の）が何だか却つて私を自分の仕事に努力させるような面白さがあります。画面に雰囲気を出すということは何とむずかしいのでしょうかね。それにこの画家はそういう点では角度がまだ鋭くない。性格的にも。松山さんは人物をもつと

勉強して私を描きたいのだつて。私もいやではないが、私の生きている歓びと苦しさの縊い交つた光輝というような核心的なものが、現在の腕ではつかまるまい。単純にしつかりさなどと抽出されたらまつたく降参ですから。ただしつかりものの女なんて!!

松山さんの絵が上達するのをたのしみにして待つて居りましょう。

島田と野原の方のこと、二三日のうちにとりはからいます。本当にいい折でしよう。島田にしろ達ちゃんが召集をうければやはり人手を以前よりおやといにならなければならぬのだし。

野原と島田とは同額にします。50ぐらい減らしたつて同じこと故。まあ私たちとして一生に一度のことでしょうからね。それから、これは女房じみたお願ひですが、どうか島田へ手紙をお書き

下さい。今度のことは私たちが度々出来ないことだから今してお  
くのだということをはつきり御納得ゆかせておいて下さい。私は  
いろいろな気持からこの間うち島田へ出来るだけ骨を折つてゐる。  
作家は雑作なく大した金をとるそうな、というお考えが何となく  
出来ていて、実はこの間行つたときも感じて苦しかつた。私は説  
明したり、ありがたがつて貰つたりはしたくないから笑つてゐる  
だけですが。どうかお願。私のこの心持もあなたには勿論おわか  
りなのだから。よろしくお願ひいたします。こういう形で出て來  
ると、同じ「後欠」

十一月一日朝　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

## 十一月一日 第三十五信。

この間お目にかかつたときから何か心にのこつて いるものがあつていろいろ考え、あなたの体のことについてですが、床に入る前この手紙を書く気になりました。

この間のときも、あなたはどつちかといふと私の心持を安めよう、不安を与えない、大局的に悠々<sup>ゆうゆう</sup>としてするべき勉強をしているようにと心にかけて御自分の健康のこともお話してました。私もそのお気持はよくわかるいろいろだが、不図考えて、私はいつもあなたの体の悪いときを過ぎてからだけそのことをきいていふということについて非常にびつくりしました。例えば夏に腸出

血をしたということを初めておききしたのは十月十五日頃でした。その前から永らく便に膿<sup>(のう)</sup>が混つていたことを伺つたのは先日がはじめてであつたと思います。そしてそういう病状は既に年のはじまり頃からあつたのでしよう。

細かい変化、熱の上下、そういうことは勿論大局的に眺め見とおしてゆかなければならないが、そういう、何か本質的な変りについて、私がそのときどきに知らなかつたということは、決して今日の私をも安心せしめません。あなたとしてそれらを持つて動じぬことで自然な恢復力を蓄積していらつしやることは当然のことであるけれども、私が其を刻々に知らされないことは、考えて見れば、あまり特別です。あなたからしか謂わばあなたの体のリ

アリティーは知ることが出来ない。私が根もとの安心というか持久的なものはたつぱりもつてているということがよくわかつていた。だけて、私は常に具体的にあなたの体の事情について知つていて、私としてするべき様々のことをしてみたい。この間もお話ししたように、互の間にある安らかさというものの能動的な具体性はあるのですもの。例えどんな小さいことでも。どんな一寸したことでも。私は古風なロマン主義者でも巫女みこでもないから、最も大切なものをアブラハムの祭壇にただのせて主觀を満足させてはいられない。

どうかこれから出血でもあつたり、何か変つたことがあつたらきつと電報を下さい。きつと。私が右往左往的心痛をするだろう

という風な御心配は本当に無用です。私は逆から云えばあなたに安心されている証左としてもそのようにして頂く権利があると思うの。よほど前、咲枝に下すつたお手紙で、ユリの体についても何についても最も悪い場合のことでも事実を知らすようにと仰云つていたでしょう？あの心持。分つて下さるでしょう？いたわ 努わられ、知らされない。それは有難く、うれしい。でもくちおいしいというようなことがないどどうして云えましょう。私はこれまで割合多岐な現実を見て、それを正当に理解し耐え、処する道を見出そうとする努力には次第につよめられて来ている。私たちの生活の貴重な収穫として。ですから、私がはつとばかりにとりのぼせてはしまわないことが確かなら、どうぞもつとそのときそのと

きあることを教えて下さい。これはあなたとして何もさしさわりはおありにならないことです。そうして下すつたからと云つて、あなたの何ものもよわりはしない。大変面倒くさいことでしょか？ 或はそういう様々の手続きが却つてあなたの体にさわる風な事情でしようか。もしそうならば、ですがさもなければどうかこの希望をかなえる約束をして下さい。却つて私は安堵することが出来るだらうと思います。私はあんまり我ままな女房ではないでしょか？だからその承認として、こういう指きりをして下さい。もしお願いがわがまだつたらそれでもかまわない、やつぱり私は私の心にあるこれほどの愛情が当然に必要とする具体性としてこのゲンマンの指を出します。ではのこと、きつと。

十一月十日 「巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（演劇「土」の舞台写真の絵はがき）」

十一月十日。八日の雨の中を、うちのおひささん同道「土」長塚節を見ました。演出岡倉士郎。小説「土」にはない節自身を出しているが、高志の進歩的性格は漠然としている。おつぎ山本安英。勘次薄田。平造本庄。これは勘次が平造のキビの穂を薙つて見つかつたところ。

大体面白く見られました。満員。壽夫さんに逢いました。呉々 よろしくのことでした。

十一月十一日夜

〔巣鴨拘置所の顯治宛 目白より（封書）〕

十一月十一日の夜。

第三十六信

（きょうはじめて勉強部屋へ火鉢を入れました。今鉄びんの湯が煮えたつていい音を立ててている、但しこの湯はのめず。咲枝がさびさせてしまつたのを持つて来たのだから。オ薯いものシツポでも煮てアクを抜力ネバナラヌ）

十一月二日のお手紙がけさつきました。この頃は先のうち、一週に一度ずつ日曜日か月曜ときめて待っていた心持はなくなつて居るけれども、やはり朝第一に、ホーサンで眼を洗うより先に、

テーブルの手紙束をひつくるかえすのを見ると、結局絶えず待つているということになる。慢性なり。

秋晴れのような明るさと澄んだ力のある手紙をいただいて大変大変うれしい。ありがとう。古い頃書いたものをそういう風に読んでいただいて、何と云つていいかしら。頬つぺたの両方へ、小さい灯がついたような感じです。それにつけても、『冬を越す薈』、『乳房』、『昼夜隨筆』そしてこの頃書いているものを読んでほしいと思う。あなたに読んでいただくことが出来ない、そういう事情が、私を自分の仕事に向つておろそかならざる心持にしているというのは何と面白い関係でしよう。体はこの頃よく気をつけているし、すこしゆとりをつけているので大分ましになりま

した。残暑頃と秋の初めはへばつていたが。長い小説は、第一が「雑沓」80枚、「海流」97枚、「道づれ」65で、私のプランの第一の部分の三分の二ばかり来ました。この正月『文芸』にのこりの部分をすっかりのせてしまいたいと思ったが、三笠から出ている『発達史日本講座』の現代に今日の文学50枚を十月一杯までにかくべきだつたのをのばしているので次の部分は二月頃にするか三月にするかします。

第一、第二、第三部になる予定です。1931頃から36位に及ぶ。私は昔云つていたようにこの小説では、外面的な事件を主とせず、社会の各層の典型的な諸事情と性格と歴史の波との関係を描き出してゆきたいのです。恐らく一遍書き終つて随分手を入れ

なければなりますまい。しかも、室生犀星、佐藤春夫、中村武羅夫というような人々は、私の小説を見ると持病のゼン息が起つたり、はきそくなつたりするのですつて。お互様に辛いことです。

小説は長いもののつづきのほかに、「築地河岸」25と「鏡の中の月」18とをかいだ。今年はそれでも、すこしは小説を書いた方です。段々かけてくる。来年はもつと小説に重点をおきたいのですが、短いいろいろの評論風なものも、自分の趣向からばかりでなくやはり書く方がいいと思い（金のことには非ず）閉口です。十ヶ月には多分もう書いて上げたと思いますが、『新女苑』（祭日ならざる日々）12、『婦公』20、別に15あとこまかい文芸的感想30ばかり。本月はその三笠の一仕事を片づけたらあと短い小説20〜

30をかいて、あとはすつかり長い方のつづき。

「伸子」をかいた頃を考えると夢のよう。三月に一度ぐらいの割で60枚だの九十枚だと。ポツリポツリ書いていた。

日本ペンクラブというのが十年から出来てることを御存じでしょうか。会長藤村、教授翻訳家出版関係者、作家詩人という人々です。大変行儀がよくてキュークツであるところです。私がそこの会員にされました。夏頃そこと外務省とで女の作家の作品をドイツ語にするので送るのだそうで林、野上、宇野、私で、私は「心の河」。これはあなたによく云つていらつしやる『白い蚊帳』に収めるためにまとめた短篇の中の一つです。自分でこまかいことは記憶しない。そんなに古いもの。

あなたのお体のこと。慣れた強さの生じることもよくわかります。強靭であることもわかる。でも、この前、私が速達であげた手紙の約束は守つて下さるでしょう？ 私がくよつく故ではあります。それも分つて下さるわね。お母さん方を御安心させ申すために私がいく分心をつかつていることもわかつて下さつてゐる。野原島田へお送りするについてのお願い、あれももうお読み下すつたかしら。

いろいろの私たちの生活の悲喜をひつくるめて、とにかく私はいい仕事がしたい。とにかく私たちの仕事であつて、他の何人のでもないという血と熱との通つている仕事をしたい。小説でも。評論でも。私たちが素質的にもつてゐるものとの価値というものあ

るとすれば、其は要するにこういう望みを忘れることが出来ないで、そのために努力しつづけてゆく氣力が即その価値であるとでも云えるかもしれない。私の芸術家としての困難は、人間的生活経験の内容が複雑豊富でそれをこなす技量がカツカツであるという点です。生活内容に応じては技量があまつていた時代、今はその逆の時代。それに私は何だか持ちものが、これまでの所謂小説家どちがつているのだが、それが芸術的完成にまで到達していない、美しく素晴らしく脱皮し切つていない、そういう実に興味深い未知数が現在あるのです。稻子はいつもよい批評家であり鼓舞者で、私は注意ぶかくその言葉を考えながら、謂わば自分の発掘をしているようなところです。その点からでもこの長篇は重大な

意味をもつてゐるわけです。太郎のことはこの次、別に太郎篇をあげます。緑郎はついたということが分つただけ。あさつてあたりお目にかかりに行きますが。この手紙では沢山書きのこしてしまつた。本当に度々手紙を頂けるなら、實に、うれしい。

十一月十六日 晴 第三十六信  
〔巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（封書）〕

きょうは、おなかのわるい日の手紙。どうかして、おなかの工合がわるくて、今日お目にかかりに行こうとしていたのに、それが出来ず。その代りにこの短いお喋りをいたします。

『文艺首都』にこの頃の文学の一つのあらわれとしてルポルター  
ジユのことについてかき、国文学の専門の雑誌に二十枚ばかりの  
鷗外、漱石、荷風の文学にあらわれている婦人觀をかき、短い小  
説をかく前の氣分できのうは珍しく文展見物をしました。戸塚の  
夫妻、もう一人田舎のひとと私。月曜日は鑑賞日というので一円。  
それを知らず私が細君と田舎のひとの分を出すつもりで行つたの  
であと30銭しかのこらず。大笑い。

文展ではいろいろ駄作悪作の中にはやはり面白いものあり。栖鳳、  
木谷千種、清方など、文学に連関しての問題を我々に与え大いに  
愉快でした。栖鳳本年は何匹も家鴨あひるの子が遊んでいるところを描  
き、（二双屏風）金の箔が地一杯にとばしてある。久米正雄、七

十歳の栖鳳が老境で若さを愛す心持流露していると、うまい批評をしたが、金箔のことについては効果上あるがよいかないがよいかと書いていた。私達三人の結論は、この画に金箔は重要な画面の一つの支え重厚な一要素となつてゐるのであつて家鴨だけであつたら決して効果は出ないし、弱くなるし破綻を生じることを観破しました。栖鳳の画の価を考え、それをつりあげたからくりなど考えると虫がすかぬが、この老爺相当のものである。自身の芸術の弱い部分を賢くプラスに転化させる大なる才覚と胆力とを有している。これはやはり相当なものです。久米の芸術境が批評にあらわれ、栖鳳フフンと思つたであろう。いずれエハガキをお目にかけましょう。きのうは何しろ30銭だつたので。

清方は鰯いわし

という題の小さいものであるが、一葉の小説の情景です。溝板カタカタと踏みならして云々。長屋の水口でおかみさんが魚屋と云つてもぼてふりから鰯を買つているところ、水口の描写、と書いた札の下つている隣家の様子、なかなかアリスティックなのです。中心になるおかみさんがこの家のおかみとして藪ろうたけていすぎるのです。「一言に云えれば背がすらりとしている」と書いた札の下つている隣家の様子、なかなかアリスティックなのです。それがあがりとしても生活が滲みついていざ、「築地」の絵（知つていらつしやつたかしら。中年のいかにも粋な女が黒ぢりめんの羽織で一寸しなをして立つているところ）が浮いていて、甘く且つ通俗になつてゐる。清方の通俗性、插画性は、或マンネリズムの美の内容にある。隨筆などにもこれ

は出でいる。いつも情景を鏡花、一葉、荷風、万太郎で。これもお目にかけましよう。

荷風の「東綺譚」は本年中の傑作と云われています。それについてハイと云えるところと云えぬところとある。すこし彼の作品をよみ、いろいろ感想もあるが、私はふと里見弾と比較して見て面白く思いました。弾も花柳小説を昔ながらの花柳で描く恐らく最後の作者であろうが、荷風を比べると、その蕩児ぶりとうじがちがう。弾が花柳の中に「まごころ」を云々するところが弾の持味であつたのだが、この発生は何処からでしょう？ こういう一つなりの日本文学の消長を何かしら語るものがあると思う。水上瀧太郎が云つているとおり、「まごころ」も身勝手しごくであるが、

粹の要求も身勝手なものですね。

洋画では、特にこれこそというものはなし。中村研一などやはりうまいことはうまい。高間惣一が「日の出に鶴」なんぞかいているし、文部大臣賞を去年貰つた男が、いかにも人をくつた模倣の露出したコンポジションと不快な色感で通州というのをデカく描いている。私たちのすきであつた絵ハガキをお目にかけましょう。

かえりには、『日日』へよつて、細君が隨筆をかいだ稿料をとつて、三人で不二家で食事をして、私は現代ドイツ音楽の夕へまわりました。今日の作曲家たちのものです。私たちぐらいからの年頃の。何だか大して面白くなかった。演奏の技術が弱く貧しい

ためもあるが。——断片的でした。音楽の中の生活感情がつよく一貫していない。

そう云えば、此間、国際文化振興会主催で、輸出する映画日本の小学校、活花<sup>いけばな</sup>、日本画家の一 日、日本の陶磁器などを見ました。この前の手紙に書いたかしら？ 小室翠雲が竹の席画をしてそれをうつし面白く、又陶磁器は特に秀逸でした。これまでよりずっとましになっていた、文化映画として。小学校の方も、板垣鷹穂氏らの都市生活研究会とかがこしらえたのより遙にヴィヴィッドであるし、生活が出ていてよかつた。下で今げんのしおりを煮て居ります。陽がさしている。体がすこしだるくて。

御気分はこの頃まですか。もう冬の日ざしですね。今年は秋

がなかつたようです。刈つた稻をしごけないのに雨がつづいたから、豊年であつたのに不収穫であるよし。

十一月十九日夜 〔巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（封書）〕

十一月十九日 第三十七信

きょうは何とくたびれたでしよう。風に真正面から顔を吹かせながら歩いた。真直原っぱのはずれから家へ帰る気がしないで、あなたにあげる文展の工ハガキを買いに、神田の文房堂へまわりました。思うようなのがなかつた。日本画がないし。吸取紙を買つていたら、これまでの白い厚いのはなくなつて同じようでも和

製で吸収がわるいから薄い方がいいと教えてくれた店の男が、私を女学校のときから知っていると話しあじめました。まあ、とびつくりして感心した。私はこここの原稿紙で小説を書き出したのです。二十五字詰で、そういうのが例外であることも知らず、「貧しき人々の群」はそれをつかつた。思い出すことが、沢山あつたがそのことまでは話さず。かえつて新しい花をテーブルの上に飾つて、ベッドに入つて、まるでまるで眠つた。

寿江子が来て、又一緒に一寸出て、燈火の消えている街々の風景を見学して来て、エハガキの小さいところへ字をかく気がせず、こうやつて手紙をかきます。本当は、私は今頃小説をかいていいなければいけないのに。字を間違えたりばかりするから、あした早

くおきてはじめましよう。あしたの夜は眠れなくてもかまわない。

ひどい、永い病氣とたたかつたのち、次第次第に治癒力が出て来て、生活力がたかまつて来る今のあるたのお気持は、本当にどんなでしよう。さしのぼる明るさや響や波動が内部に感じられるようでしよう？ 私はそこをあつちこつちに歩く、眼をあなたの上につけて。それらの感じは、全く私の感覚の中に目醒めるようです。私はこの夏本当に苦しかつた。今になつてみれば苦しかつたわけであると思います。どうか、どうか益 自重して、その大事な生活力を蓄えて下さい。小説をかいていて、熱中して書いていて、いよいよおしまいが迫つて来たというときの、あの何とも云えない内からせき立てられるような感じ、それをぐつともつて

重く愈 『いよいよ』慎重にと進んでゆくあの気持。快復期の微妙な感動と歓喜は非常に似てゐるようです。そこがさむくさえないならば、雪の美しささえ似合<sup>ふさ</sup>わしいというような生活感情の時期なのでしようけれど。もしかしたらあなたは、私たちの生涯の生理的な危期をどうやらのり越えて下すつたのかもしれない。私のようこびがお分りになるでしようか。分るでしようか。ああ。

私は何だか何日も何日も眠りとおしたいように気の安まり、ほぐれた感じです。一寸あなたの袂の先でもつかまえて眠つて眠つて、眠りぬきたい。この手紙はこれでおしまい。

十一月二十一日 〔巢鴨拘置所の顯治宛 目白より（山下大五

郎筆「中庭の窓」の絵はがき)

十一月二十一日の朝七時すぎ。

きのう午後二時頃からかかつて小説を今かき終つたところ。二十五枚。「二人いるとき」という題。大変なリリシズムでしょう、お察し下さい。内容はリアリスティックですから御安心下さい。

この絵は実物はもつともつと新鮮です。一枚五銭でこの物価の時代、色彩の活きたエハガキは無理なことです。これからねるところ。

十一月二十二日　「巢鴨拘置所の顯治宛　目白より（封書）」

十一月二十二日 曇 第三十八信

若い女のひとのための読書案内をするために、最近出たフランスの或女仕立屋の書いたものをよんでいます。そして、その間の一寸したお喋りを。

この本を買うためにさつき外へ出かけ、途中で例のあなたの時計を修繕にやりました。懐中時計。もう動かなくなっているので。そしたら油がきれでゴミが入つてしまつている由。「きかいは割合よろしゅうござります」「買つたらいくら位です?」「今でしたら十円出ましよう」その位のもの? そしてこれかしら、いつかお母さんが洋服と時計を買った(『改造』の当選)といつていらしつたの。とにかく又動くようになるのは大変うれしい。留金

ばつかり金の可笑しい時計！

一昨日からきのうの朝にかけて、ひどく馬力をかけたので疲れが出てる。昨夜は重治さん来て夕飯をたべて、いろんな仕事の話ををして愉快。

この夏からこの間までの私の切なかつた心持など話しました。

丁度、もろい崖から落ちかかっている人が、手の先の力に全身をかけながらじりじりと、もつと堅いしつかりした地質のところへまで体をひき上げて来ようとしている、もろい土のくずれてゆくのと、手の力の持久力と、その全くのろい而も全力的な努力が必要とする時間と、それらのかね合いがどうなるだろう。実に見ていてたまらない。しかも見ているしかないという事情。日夜背中

のどこかに力が入つていて、心にゆとりがなくて、実にひどかつた。今は何か本当に体をのばしてつつぶしてほーつとするような気持がしています。あなたの今の体のお工合と、そのたっぷりした心持とを感じながら、あえらかつた、と顔の汗を手のひらでぶるんとするような心持。そして、私は今はまあ一寸、こういう心持をも喋つて、気をほぐしてよろこばしさと新鮮な感覚とに身をまかせたい心持。

いつかの冬、あなたは春のようだね、春のようだね、と云つていらしたことがあつた。覚えていらつしやるかしら、歩きながら。今年の冬、私たちは冬をそういうような底流れの感情ですごすのではないでしようか。今年私たちのまる五年目の生活は随分は

りつめたものでしたね。肉体の強靭さと精神の均衡というものは何と微妙でしょう。一本橋をわたるとき、落ちやしまいか、落ちたらこわい、という恐怖が足をすべらせる。そしてそれと反対のもの。私は、扇をひらいて褒めて上げたいと思う。もとより当然のことではあるけれども。あなたをとり戻したという感じ。それはつきりしたあなたの姿が打つて来る感じ、その感動がどんなだか本当に、本当にわかるくなるだろうか。

夜なかに霜がおりて、朝とけ、夜月がさして木の葉がおちてい るように、そういう絶間ない営みで生活力をたかめて行きましょ う。すっかり新しいしつかりした地べたのところまで出切りまし ょう。うれしさから涙をこぼしながら笑つて、或責任と義務の自

覚による意力からだけ自分がやつぱり生きて行かなければならぬものかと思うことは、殆ど堪え難かつたと、今話すことの出来るのは何と笑える、そして又涙の出る心持でしよう。これを云つてしまえば私のくつろぎも底をついた形ですね。では又。呉々も大切に。決して今までの周密さを御自分の体に対してもゆるめないで下さい。

十一月二十五日夕　〔巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

十一月二十四日　第三十九信、

きのう、夕飯後十枚ばかり「若い婦人のための書棚」をかけて、

終つてお風呂に入つたばかりのところへ「光子さんがいらつしやいました」「どの」「岩松さん」絵かきの光子が来た。雨が降つていて十時半頃で、さては神戸から出奔して来たかと思つたら（夫婦ゲン力をやつていたから）そうではなくて、一水会という石井柏亭や安井曾太郎のやつている会へ絵をもつて來たのでした。夜、二時頃までいろいろ絵や文学や女の生活の話をして、けさおそらくおきてかえつた。月末までいるというので、私は自分の大好きな動坂の家のスケッチと、本郷の或高台、一方は長いコンクリート塀になつていて、ずっと遠く小石川を見晴す風変りな道のスケッヂ、をして貰うことにしました。私の勉強している部屋にこいう可愛らしい都会の隅々の絵があつたらどんなにうれしいで

しよう。大変たのしみです。其にしても光子は、自分の絵の道具をもつて来ないとはけしからぬ。かりにも十日ばかり東京に来て、しかも刺戟を与える人々の顔を期待して来ていながら。まだただのおかみさんと画家とが分裂している。渾然こんぜん一つになつていな。心で一生懸命で手がまだ怠けている。こういう状態を多くの女の芸術家が経ているし、男も70%まではこれで一生を終るのね。若い女のために本をいろいろ考えていて、私に体がもう一つあつたら、本当にいい味と力と鼓舞のこもつた女のための本を極めて綜合的な内容で書きたいとさえ思いました。すべてが切りはなされていて婦人問題、医学の問題、法律の問題、ばらばらである。それが一人の女の日常生活のすべての部分にとけこんでいる。一

人一人の女が、自分から世の中に働きかける可能をもつてゐる。そういうことを感情から分らせてゆく本が一つもないというのは何たることでしよう。世の中に本は溢れているが、こういうクサビのような本はかかれていない。

笠間さんの隨筆は面白うございましたか、第一のを数行一寸見たが、何だか目があらい。

シャルル・フイリップの「ビュビュ・ド・モンパルナス」（これはお手紙で下らなさがわかつた）をふとよみかえして、ここに描かれているパリの下級勤人の生活や娼婦の生活に対する作者の心持と、荷風や武麟や丹羽のかく市井風俗との氣稟のちがいを感じます。どうして後者の作家らは目先の物象しか見ないでしよう。

浅はかにそれにひっぱられて喋くつてゐるのでしよう。精神といふものが低い。戯作者氣質が「当世書生氣質」で終つていない。そこが日本の文学の美の内容をひきずりおろしている。或壯麗な恍惚にまでたかまる悲劇。歡喜に迄貫通する悲劇というものの味いを生活の中に持して行くだけの精神力のはりつめかたをもたない。

私は音楽も絵にも文学にも實にこの強韌きわまりない高揚と、それと同量の深いブリリアントな忘我を愛するのだけれども。私の仕事が文字を突破してそこまで横溢することが出来たらどんなにうれしいでしょう。輝きわたる人間の真情のままが躍動したら。今夜は今に寿江子がここへよつて、七時から新響の定期演奏を

ききます。

(二十五日になつてからの分)

昨夜はベルリオーズという人の（クラシック）夢幻交響曲とい  
うのがなかなか面白かった。題の如きもので、情熱的第一楽章。  
円舞曲（舞踏会）第二楽章。野原での風景。絞首場への行進曲。  
悪魔の祭日の行進曲。大体テーマは（文学的に）分るでしょう？  
このひとつは楽器のつかいかたが面白く、太鼓のつかいかた（雷）  
として実に芸術的につかいヴェートウベンのパストーラルの嵐の  
太鼓のように説明的でない。又或場面、楽しき野原が次第にそこ  
でのシニスタースの光景を予想させながら最後には遠雷と鳥の声  
とでやや「枯枝に鳥とまりけり」の灰色と黒を印象づけるところ。

そして、この全体の曲に、一つずつモーティブとなり得る要素が沢山あつてなかなか刺戟された。私が音楽家であつたらきつと今日こんなにしていられないでしようと思う。メイエルホリドの音楽をつくつたりして、二十一二歳で第一シンフォニーをつくつたシュスタコヴィツチの音楽は、現物をきいたとき深い疑問を感じた。又写真にあらわれている相貌からも疑問を感じていた。音楽がフランスの後をついている外何があるのかと疑問だつたところ、この間新しいオペラのコンペティションのようなことが行われ、「ティーヒドン」（デルジンスキーア作曲）、この男の「マクベス夫人」（明るい小川）<sup>（バレ）</sup>が並んで上演され、明るい小川、マクベス夫人は絶対的に否定された。これは題を見ても文学をやるものに

は内容がわかります。世界的名声にあやまられたものとしてシュスタコヴィツチもエイゼンシュタインもメイエルホリドもある。（日本にもあります）私は音楽について直感的に抱いていた評価がやはり正しいのが証明されてうれしい。絵についても音楽についても私はこういう直感の科学性を豊富にしてゆきたいと思います。私の絵や音楽の批評は大抵はいつも当つているのだが、素人だから日本のレベルというものを自分では知らずにとび越していくので玄人クロートは所謂エティケットを知らぬ奴と思う。文学において文壇をことわっているのに、絵や音楽やの通ツバに追随する必要もない。

『二葉亭全集』は買いますから、そしたら御覧になるでしょう？

中村光夫、『二葉亭四迷論』あり。では又。私たちは月の美さを好きですね。この間の月夜は灯のない街と共に小説「二人いるとき」の中にかいだ。お大事に。ずっとあの調子でしよう？ 猶々油断なさらないで下さい、お願ひいたします。

十一月二十五日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（竹内栖鳳筆「若き家鴨」の絵はがき）〕

十一月二十五日、これがこの間の手紙で話した栖鳳の絵の右の方です。左の方もつづけて御覧下さい。私たちの批評の当つていることをお認めになりましょう。きょう、やつとお手紙が届いた

が、十二日の分は来ず、いきなり十八日の分です。十二日のを待つて待つていて来なかつたわけです、どうしたことであつたろう。  
見ぬ魚の大きさ。※

十一月二十五日 「巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（竹内栖鳳筆「若き家鴨」の絵はがき）」

十一月二十五日。この間お目にかかつたときよく伺つた野原島田のことは私によくよくわかつて居ります。あなたのお気持の中から。島田へはこのお歳暮にさしあげましょう。私はお父さんを笑顔にして上げたいから。野原は富美子が女学校へ入つたら。来

年三月。丁度フミちゃんの教育費に十分なわけです。大変によいと思う。皆安心出来て。月謝の心配は女の子は辛いだろうから。

※

十一月二十五日　「巢鴨拘置所の顯治宛　目白より（鎌木清方  
筆「鰯」の絵はがき）」

十一月二十五日、これが例の清方の鰯です。画面の奥までちゃんと描いているのだが、やはり插絵風になつてしまつていてる。芸術家が単に情緒に止つた場合この如き技術をもつっていてもやはり低俗にならざるを得ないことは実に教訓ですね。日本画にも或る

意味でのバー・バリスムが入つて来ていて（藤田嗣治の田舎芸者のモホー）其様なのも見かけたがまだ外側のものです。※

十一月二十五日 〔巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（中野和高筆「ひとつき」の絵はがき）〕

十一月二十五日 この絵は父親のイギリス風なおじいちゃんぶりが林権助伯を思い出させ、又何となく林町の父をも思い出せます。したしみのある面白い絵です。軽井沢辺と見えますね、遠景の工合。何年ぶりかで今年は絵を見て、芸術家の感興ということをいろいろに考えました。感興の色合、深さ、リアリティー。

清方だつて身にそつた感興でこれをつくつてゐるのですからね。  
※ これは※までで終りです。

十一月二十九日 〔巣鴨拘置所の顕治宛 目白より（菊池契月  
筆「麦※」の絵はがき）〕

十一月二十九日夕方。

そこにも豆腐やの音が夕方はきこえるでしよう。きょうは、本  
当に久しぶりで薙られ、分けられている髪を見て何と珍らしかつ  
たでしよう。

まだ四時すぎだのにもうすっかり夕方になつてゐる。この娘の

顔は原画は非常に清潔な美しさを持つているのですがよく見えませんね。どうか猶々お大切に。今の中のつき工合はもう一遍ひきしまらなければ本ものではありません、本当にお大事に。

十二月一日（消印）　「巢鴨拘置所の顯治宛　目白より（新作  
帶地陳列会より「額川陶象綴錦」の絵はがき）」

光子さんが動坂の絵をかくので一緒に来ました。あのまま木小屋があるしポストがあるし。おいなりさんの赤い旗が昔より大変賑やかにひるがえつていて通りの広さと云つたら。

この絵はがきの帯はなかなかいいでしよう？　しめたいと思う、

但し空想の中で。あなたに買つていただいて。エイセンは父の好きな陶工（クラシック）の一人です。国男さんから手袋をお送りいたしました。光子さんの子供は五つ、太郎より兄さんです。

十二月四日　「巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（安井曾太郎筆  
「承德の喇嘛廟」の絵はがき）」

十二月四日。安井曾太郎の画集の面白いのを文房堂で見つけましたからお送りいたします。画集中にこの絵の水彩のようなのがある。こつちにまで発展して来ている跡もくらべるとなかなか面白い。きょうは光子さんが油の方をしあげて、二人でその額ぶち

を買いにゆきました。可愛い絵です。いづれ写真をお送りいたしますが、思いがけず今年の暮はいいものが出来ました。

十二月五日　「巢鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）」

十二月五日　日　晴れて風がある。　第四十一信

十一月二十五日、づけのお手紙をけさいただきました。お体はずっと調子を保つてありますか。きょうあたりから吹く風がいかにも師走風になりました。綿入れ類ももう届いておりましよう。このお手紙に三つよく読めない字がある。「『科学知識』は時折達治に送っている」のあとにすぐつづいて「のものは矢張りやめに

した。」その上の三字がよめない。珍しいことだがよめない。何でしよう。この次お目にかかるて伺います。大したことではないらしい。

あなたが、本をよめなかつた間に得たものの価値について云つてらつしやることは、大づかみではあるが私にも推しあかることが出来ないとは思いません。

私の仕事について考え方を希望して下さること、全く私自身が考え努力していることと等しく、それ故一層はげましとなるのですが、私は箇々の作家のおかれている箇人的な事情、歴史的諸事情がその錯綜推進の間でどのように作家を大成せしめるかということについて、實に興味というには複雑すぎるほどの感興を抱いている。

わが身についても。内からの力と外からの力。その波はどのように将来の二十年ぐらいの間に一ヶの作家を押すでしょう。この考えは、一人の作家として自力で可能な範囲での努力は益 おしみなくやつて見る必要があるという結論を導き出すのです。

本年は私の文筆的生涯のうちで、決して渺い仕事をした年ではありませんでした。所謂拙速的仕事もしなければならないこともあつたが、私の拙速は決して投げたものではなく、最上に最速にという工合であつたから、一年経つて顧ると、自分が一番能力を発揮して一つの仕事をまとめ得る時間、用意それぞれが評論ではこんな風、小説ではこんな風と、技術的に理解を深められました。専門家としてはこういう自分の性能を知ることも必要であり、

そのためにはやはり一杯にフルにやつて見る必要がある。のろのろしかやれないもの、或程度のスピードを出してよいもの、ひとりでに出るもの、だがスピードの出た頭の活躍がどんな傾向を人間として作家としての私の中に蓄積してゆくか。こういう点をもやつぱり研究して見る必要がある。

私は永年極めて自然発生的に内部の熱気に押されてばかり仕事をして来たから、この頃いろいろこんなこまかいことも意識にのぼつて来て、建築的に仕事を考えるようになつたのを面白く思います。

一水会と言う絵の会に、昨日光子さんと寿江と三人で行つて、有島生馬の絵を見てアマチュア芸術家の陥るところは恐るべきも

のであると感じました。絵を、ネクタイを結ぶように描いている。樂でアツトホームであるとのではない、だらんと、只手になれていて、感動と洞察と追求が全く現實に対して發動していない。金のある人間が、ヴエランダで煙草をふかしてのびているようです。里見弾、生馬、武郎と考えて、武郎の生死について感じました。岩松の絵、どうも見た目のエフェクトを狙うことが巧みすぎる。正直に脚までちゃんと描かない。光子さんの絵は造船所の旋盤工場だというので、実はあの人によい意志とは云え、或堅い定式かと心配していたが、絵を見て感心しました。二十号だが、ちやんと色彩の感覺、働いている人間への共感、皆もつて明るく水気をもつて描かれている。大変うれしかった。百円の絵です。買

い手を欲しがつてゐる。但し、彼女の芸術の過程を愛するものでなければ、この絵はサロン用ではないからなかなかむずかしい。

柏亭先生に世話をたのんだらと云つたら、洋画家のパトロンとの関係の個人主義、極秘主義というものはひどいものらしく、自分が口をきいて売れるところをひとに紹介などはすまいとのことです。この世界は知らなかつた。絵というもののかけの世界のおくれ工合、険悪工合にはびっくりしました。

きょうから、『発達史日本講座』の現代文学をかきはじめます。この頃、小説にくつさりたい。それに夏からのこの約束で、フレーフー。五十枚ばかりだから、ユリよがんばれ、です。これさえすますとこの種の予約はまぬがれます。

キヤベジの葉のようなのというのは葉牡丹でしょう。それは、市民的正月の恒例である葉っぱです。外側の葉の枯れるのをはがすと内へ内へとキヤベジのようにならしくなつて行つて、しまいには大変柄の長い玉になります。私たちは今年の暮は、何となし愉しい。そうではありますか。とにかくいつなまけたということはなく生きたし、あなたは快復に向つていて下さるし、今年のために私達は何かしようとしていたところ優しい絵も二つ出来たし。年を送るという感情がこのような安心を伴つて、感じられることは何年にもなかつたことです。而もほのぼのと日ののぼる感じをもつて。では又、かぜをひかないで下さい。

十二月十一日午後　〔巢鴨拘置所の顯治宛　目白より（封書）〕

十二月十一日 第四十二信

けさ、あなたの十二月二日づけお手紙がつきました。ありがとうございます。いろいろな心持というのも、こうして字にかけておけばこそ一層はつきりとした存在となつて確實に実現するのは、實に妙ですね。私はこのごろ、仕事にふれてこの事實を深く感じている、もし文学として書かれていなかつたら、この人生の人間性、情の力や美の錯綜はどうして今日だけの蓄積として人間の歴史につたえられるでしょう。そして、私たちはまだ實に實に少ししか書いていない。そう思うと勿体ない。歴史に新しく加えるべきものは

本当に多いのに。

この頃は急に空気が乾きはじめて、皆喉がカラカラして、鼻の奥がかわいて苦しいが、ずっと大丈夫でいらつしやるでしょうか。私は夜中、急に喉がいりつくようで目をさますことがある。

昨夜は『中公』の隨筆を十枚かいて（くちなし）、これから例の私の荷物である今日の文学のつづきをかきます。今、能動精神の文学の声がおこつたところです。フランスのそういう時代のもつてているものと、こつちのとを比べてなかなか意味深い。この仕事は十三四日に終らねばなりません。

全く今年は沢山仕事をした。最も活動したものの一人です。しかし、今年の仕事ぶりは忘れることが出来なかろうと思う。歯を

くいしばつてやつたところがあつて。

このごろは心にくつろぎが出来て、瑞々みずみずして、何しろ私のこ

れまでの一生に只一度もつけたことのない題をつける位ですから。

来年はいろいろ仕事を整理して、評論風なものでは一つまとまつて七八十枚のものを、あとは小説という風にやりたい。そして、いかにもそれがやれそうな気持です。芸術というものは一面刻薄であつて、こつちが一生懸命でも心のゆとりなさなどは何か一つのマイナスとなつて作品に出る、なかなかくやしいようなものです。オペラの唱い手曰ク、最も悲しきうたを最も悲しくうたえるときは、自分が一番丈夫で幸福な時だ、と。これは勿論そのままではないし、そうだとしたら、今日芸術の仕事を何人がやり得る

かと言いたいところですが、それでも、今の心の状態の方が私と  
してよい。来年は質の更によい仕事をします。今年の暮、私はい  
そがしい仕事が終つたら出かけて行つて、一組のおとその道具を  
買うつもりです。或暮に、私はショールを巻きつけておとその道  
具を買いに出かけ、いろいろ見て或ものは手に迄とつて<sup>まさ</sup>将に買お  
うとしたが、どうしても心に買わせぬものがあつて遂に買わず、  
複雑不思議な思いに深く沈んでかえつたことがあつた。

今年は、それを買います。そして、それを買うことが実にたの  
しみで、うれしい。新しいおとその道具からあなたに注ぎ、私に  
つぎ、そして親しい大事な友達に注ぐ。

漱石の金剛草の話、私もその本はやはり面白く同様の印象でよ

みました。漱石の文学論、十七世紀英文学史、いずれも大事な只一つの鍵をおとしているだけ、そのことが今日明瞭に分るだけ、しつかりとしたもので面白い。英文学史なんか、ああ漱石が只もう二箇の「何故？」<sup>ホワイ</sup>を発してこの分析を深め得たら、と痛感した。狭いところにいて読んで。文学論にしろ、堅固周密な円形城壁のようだが、真中がスポンとぬけていて。すべての分析がそれぞれの線の上でだけ延ばされているから、簇生そうせいしていく相互関係の動きと根本に統一がない。あなたのおつしやるとおりの原因なことは明かです。

あなたの時計は直つて来て、この机の上にあります。金時計というのは、私は全く見なかつた。賄のこと、まことに残念ですが

まだ分りません。きょう島田からお手紙で、お金がつき、大変よろこんで下さり、よかつたと思います。達治さん達も一層本気で働く気分を励まされていると仰云っています。よかつたわね。光井の方へは、この暮は、富美ちゃんへの本（『小公子』やその他）と何かお送りして、お金は来年三月です。

あなたの腹巻きも、栄さんと新工夫したのをもうじきあめてお送り下さる由。今度のはきつとなさりよいでしょう。

本月六日に、曾禰達蔵博士が八十六歳で急逝されました。私はお祖父さんに死なれたようで、その夜お挨拶に行つてお姿を見たら大変涙がこぼれました。この方の生涯のこまかいことは知らないが、長州萩の人の由。漢詩などをやる（文学のことでしょう）

のが好きであつたが、家が貧しくて給費生となるには当時（明治以前）工学でなければ駄目だつた。それで工学をやるようになつた、と述懐された由、長男は理学博士で物理です。お前は其故好きな勉強をしろといわれた由。

事務所は十一月中に第二段の縮少をして、一月からは名儀も国男一人のものとなり、老人は隠退されることになつていました。國男もこれからは全く独立です。今の情況ですから建築は一般に困難です。

明日ごろ、可笑しい虎の絵の手拭を送ります。色のついた虎、虎年ですから。壁の比較的よい装飾になりますから、お正月には古いのとかえておつかい下さい。タオルねまき、初めは幅がひろ

くすぐるかもしませんが、こんどは洗つてもぢやありません。  
普通に召せるでしょ。

では猶々お大事に。この手紙は下旬につくでしょ。私は  
もう四五日のうちにお目にかかりにゆきますが、二十日すぎてか  
ら着くかと思うと何か一寸した言葉があげたい。一寸、胸のとこ  
ろに吊つてねへよ。

many many good wishes という云いかたは、謂わば暖い掌で背  
中や肩を親しくたたくような表情ですね。では又。

十一月二十五日　〔巣鴨拘置所の顕治宛　目白より（封書）〕

十二月二十五日夕方。第四十四信

十二月十五日づけのお手紙ありがとうございました。それについてはかくとして、とにかくこの手紙がそちらに届くのは正月に入つてからでしょうね。そうすると正月の第一のたよりになるわけですね。新春の挨拶というものには早いけれども、でも今年は、この間のうちの手紙で私が書いていたとおり私たちに歳暮も早く、したがつて新年も早く来たような心持です。だから、時間をとび越して、この手紙の中でいろいろと新しい一年に対して予想する感情でいうことは自然です。

一九三八年という年は、どのような内容で過されるでしょう。時節柄、「天気晴朗なれど」であろうと思われる。私は自分の仕

事についてこの間書いたように本年よく勉強したことと、あなたの命がとりとまつたらしいこととで、はつきり一つの成熟の感じがしてこの年こそゆつくりと心の満足するような書きぶりでやりたいという希望に満ちていたのです。勿論、それがそうゆけばこれにこしたことはない。でも、そうゆかなかつたとして、作家としての生き方の本然性が失われるのではないから、それなら又私らしくいろいろと勤勉に収穫をもつてやつてゆこうとも考えて居ります。そういう点ではやはり日々是好日たらしめ得るわけです。

どつちにしろ、あなたが健康の平衡を保つていて下さることは何よりうれしい。何よりの安心。精神上の苦痛というものも様々で、私は世俗的な意味で苦労性ではないのだけれど、苦しいとい

うことは、私の場合では自分の体より寧ろそちらの体についての場合につよく感じられます。あなたの着実な健康増進のための努力には、私は全幅の信頼をもつていてるから、出た結果はどうでも、あなたに対する私の苦情というものはないわけです。どうか今年は熱を出したくないものですね。

おかゆの境地を脱したら実に実にしめたものです。こんなにやいやいいう体面上、私も気をつけ最上の健康を気をつけますから御安心下さい。私の盲腸も妙な奴で、曲者です、ただものでない。可笑しいわね。まあ、適当にあつかって居ります。

ところで、どてらお気に入りました？ 今、もう押し迫つて縫つて貰えないので出来ているのを買って背中へだけポンポン真綿

を足したのです。エリは大変柔軟でしよう？ 頸や頬にやさしく  
当るでしよう？ きっとあなたはもつともつとふくらんだのを欲  
しくお思いだろうと察しているのですが、どうか辛抱して下さい。  
あれでも普通よりは厚い分なのですから。

もう一枚の綿入り羽織は一月中旬にしかお送り出来ません。これ  
もあしからず。

二十二日ごろ、光井の方へ500お送りしておきました。あなた  
の方のお小遣いもあれで当分間に合うし。いい正月と云うにはば  
かりなしですね。

きのうは、午後五時までかかつてやつと夏以来の宿題であつた  
「今日の文学の展望」66枚書き終り、夢中で終つて雨の中を林町

へゆきました。太郎の誕生日は十日であつたが曾禰博士「自注20」の御不幸でいそがしかつたのできのうにしたのです。河合の息子（咲枝の姉の子）たち、その身内の男の子四五人男の子ばかりで来ていて二階をすっかり装飾し、どつたんばつたんの大さわぎ。寿江がプロムパーティーであるが、この前からの風邪の耳がまだなおりらず、繻<sup>ほうたい</sup>帶に日本服姿でふらふらしていました。丁度私の行つたのは六時半ごろで、程なく昼の部は終り。子供ら引上げ。忽ち太郎孤影悄然となつたので、歓樂きわまつて哀愁生じて、泣いてしまつた。実にこの子供の心もちわかるでしょう？ 一人つ子なんてこれだから可哀そうです。

それから夜の部がはじまつて、こつちは大人の世界。御飯一緒

にたべて、寿江へ買つてやつた小幡博士の音響学の本の扉に字をかいてやつたりして、珍しく昨夜は林町に泊つた。おひささん一人故泊ることがちつともないのです。仕事の荷が降りたところなのでフースー眠つて、目をさまして、すぐには起きもせず、私にいただいてある黒子のほくろごくそばで遊んで、懐しがつて、優しい感情と切ない感情と、てつぺんではどうしてこう一つなのだろうと感じ、凝つとしていた。

それから起きて、食堂で太郎がトランクへちよこんと腰かけてお箸で食べているとなりでシャケで御飯たべて、「アラ百合ちゃん奈良漬がすきだつたわね、一寸きつてさし上げて」「アノー、もうみんなになつて居るんですが」「ほんと」というような会

話があつて、締切をサイソクの速達が来ているという電話でかえつてきました。

隙間風がスースーと顔をなでる家ながら、我が家はよろしい。まして、ちゃんと一つの封緘ふうかんがひかえていて見れば。

二葉亭の手紙や日記類の方への興味は全くそのとおりお送りする順として考えて居りました。安井氏の画に対して利口すぎるとの評がある。尤もです。奥行きなさは、愚かさではなくて、その利口さのために生じている。この頃の絵も妙に引込む力をもつてない。画面一杯にせり出して並んで、逆とても目をひき、うまいがどこまでも心を引っぱりこむどころはない。ああいう本で梅原龍三郎のがあります。又見ておきましょう。絵というものは

頭のためにいい（私たちのような仕事との関係で）。音楽は聴き込んでいって、こっちの心がこっちの心の内部で啓<sup>ひら</sup>ける燃えもある工合ですが、絵はやっぱりその芸術の特質で、眼の前がパーツと絵に向つて開いて行つて、こっちから入りこんで行つて、散歩をして、フムと思つたりハンと思つたり出来て、やはり楽しいもののです。スケツチが出来たら、下手でもさぞいい保養だらうと思います。寿江子は上手うまい。それでも絵は気まぐれにしかやる気がしない由。

あなたがお札を出したく思つていらつしやる人々には皆よろしくつたえますから御心配なく。親しい人達と賑やかに越年します。百枚近い文学のこの三四年間に亘る鳥瞰図的な推移図のか

けたのは、不満もあるが、よかつた。生活の中で幸福を発見する能力や仕事のそれが増してゆく諸事情というものは何と複雑でしょう。

この間、国男宛に下すつたお手紙、あつちがお歳暮に来たとき呉れました。わざわざありがとうございました。国男は、自分が書かないのにすまないと云っていた。皆に対してあなたの配つて下さるお心持をありがたく感じました。緑郎はこの間初めて手紙をよこして、パリのエトワールの近くの或一寸した作家の未亡人の家に暮すようになり、フランス語がまだよくこなせないから御飯のたびに大汗の由です。あのひとなりにいろいろ学んで来るでしょう。ただし紀は負傷しました。但生命に別状はない。島田の方では多賀ちゃんの

たよりで、お店へ米俵をつみ上げて、トラックも休みなしの由、  
 収入のある方らしい御様子で、父上も炬燼こたつのある中の間でこの頃  
 は御機嫌よろしいとのことです。結構だが忙しくてお母さん又腎  
 臓をぶりかえしになるといけないと思つて居ります。ではこの、  
 今年と明年とに亘る手紙はおしまい。あさつて（二十七日）お目  
 にかかりにゆきます。寒くなつて來たこと。年内に雪が降るかし  
 ら。かぜをお引きにならないように。どうぞ。

〔自注20〕曾禰博士——曾禰達蔵博士。百合子の父中條精一  
 郎と協力して建築事務所を長年經營された。





# 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十九巻」新日本出版社

1979（昭和54）年2月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

※初出情報は、「獄中への手紙 一九四五年（昭和二十一）」のフ  
イル末に、一括して記載します。

※各手紙の冒頭の日付は、底本ではゴシック体で組まれています。  
※底本巻末の注の内、宮本百合子自身が「十二年の手紙」（筑摩  
書房）編集時に付けたもの、もしくは手紙自体につけたものを  
「自注」として、通し番号を付して入力しました。

※「自注」は、それぞれの手紙の後に、2字下げで組み入れました。

※底本で「不明」とされている文字には、「」をあてました。  
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：花田泰治郎

2004年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつた

のは、ボランティアの皆さんです。

# 獄中への手紙

## 一九三七年（昭和十二年）

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 宮本百合子

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>